神の従者となった剣聖の異世界旅行

白の牙

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自身を転生させた神の従者となった転生者の青年〝桜井悠斗〟がやってきたのは魔法と魔法少女が存在する世界。その世界ではどんな出会いと女難が待っている

「ちょっと待て！出会いは解るが、女難ってなんだよ!?」

・・・のか

１月２９日　リメイク版を投稿します。それに伴い、タグの内容を編集します

２月５日　タイトルとあらすじを変更しました

目次

リメイク前
5度目の転生 1
春、それは出会いと別れの季節 3
大物からの依頼 6
妥協案 10
いざ、研究所内へ 13
ソウルの力の一旦 17
次元盗賊 23
ショッピング 27
贈り物 33
ソウルを求めて、いざ遺跡内へ 38
降臨、満を持して 47
リメイク版
序章 55
第01話 58
第02話 62
第03話 66
第04話 71
第05話 75
第06話 85
第07話 93
第08話 98
第09話 104
第10話 111

第31話 211
第30話 205
第29話 198
第28話 194
第27話 191
第26話 189
第25話 184
第24話 179
第23話 174
第22話 168
第21話 164
20話 160
第19話 155
第18話 149
第17話 145
第16話 139
第15話 134
14話 129
第13話 124
第12話 119
第11話 115

リメイク前
5度目の転生

「またここか」
見た目は青年だが年齢はそれなりに達している男が真っ白な空間を見回しながら呟く
「そして、いつも通り謎のガチャポンボックス。こいつがすべての始まりだったんだよな～～」
男性〝桜井悠斗〟は目を閉じて思い出す。悠斗は俗にいう転生者と呼ばれる存在。死後意識が目覚めると今いる空間にいて、置かれていたガチャポンボックスを興味本位で回すと
・ガイソーケンとすべてのリュウソウル
・西村太一並みの魔力量と魔力強度
・衛宮士郎並みの家事スキル
・英霊を2体呼べる
・肉体及び五感の強化
・錬成能力
・物を無限に収納できる指輪
・師事するものを呼んで修行をつけてもらえる
・風と雷を操る能力
・ハズレ
っと紙に書かれた物が開けたカプセルから出てき、次に出てきたガチャポンを回すと〝ありふれた職業で世界最強〟と書かれた紙が出てき、意味が解らないと首をかしげていると悠斗は足元に突如として空いた穴に落ちていた。そして気が付いたら赤ん坊になっていたのだ
「あの時は本当に焦ったぜ」
その時のことを思い出し、悠斗は顔をしかめ、気を取り直すと
「任務お疲れ様じゃの～悠斗、いや不屈の騎士よ」

光と共に杖を持った老人が現れ、悠斗にねぎらいの言葉を贈る
「その名で呼ぶのは止めてくれ。まだ、本家の騎士に比べれば俺なんてまだまだなんだからよ」
老人に二つ名で呼ばれた悠斗は頬を軽く掻く
「ふむ・・・さらに強くなったようじゃの」
「そりゃあな～～。迷宮で戦ったヒュドラよりも強い魔獣や龍、果てには邪神とかした女神と激戦を繰り広げたんだぜ？強くならなきゃこっちが死んじまう。できれば次の世界はのんびりと暮らせる世界がいいぜ」
「それはお主の運次第じゃの」
「・・・あいつらのいる場所に行くってのは・・・」
「駄目とは言わんが、神の中にはお主を認めていない者もおる、特に下級神者たちはの。あ奴等を黙らせるためにもお主はさらに力をつけなくてはいけない。幸い邪神とかした女神を討ったことでお主の纏うオーラはかなりのものになっておる。同レベルものを後1体討てば問題ないはずじゃ」
「あの女神クラスのやつがいる世界なんてそうそうないと思うけどね～～」
悠斗はため息を吐きながら置かれたガチャに手を伸ばし、回す。一回りするとガチャから次に行く世界の書かれた紙の入ったカプセルが出て気、開けると
〝魔法少女リリカルなのは〟と書かれていた
「どんな世界かは解らないが、また魔法系の世界か」
「決まったようじゃの。では、行ってくるがよい」
老人が杖で地面を軽く小突くと、光の扉が現れる
「・・・・」
悠斗は無言でその扉を潜り、次の世界へと向かっていた
「・・・本来なら駄目な事なんじゃが、少しばかり手助けをしてやるとするかの～～。まぁ、乗り越えられるかはあ奴次第じゃがの」

春、それは出会いと別れの季節

春、それは出会いと別れの季節

「えっと、俺の名前は・・・・あった、あった」

大きな掲示板に張られた紙から自分の名前を探し、見つけた悠斗はついでに今日から1年同じ教室で学ぶ学友の名前を確認すると、顔を少ししかめる

「(まじかよ、聖洋中学が誇る5大聖女の内、3人と同じクラスとか。騒々しい1年になりそうだな)」

悠斗はフェイト・T・ハラオウン、月村すずか、八神はやての名前を見つけ、歓喜の声を上げるクラスメイトとなるであろう男子の声を聞き、せめて席は離れていてほしいと切に願ったが

「(この世に神はいないな)」

案の定、3人の聖女と隣、または近い席となった

「ユウ君の近い席か。1年よろしゅうな～」

「よろしくねユウト」

「えっと、よろしくね桜井君」

「・・あぁ、よろしく」

突き刺さる嫉妬と憎悪の視線を無視しながら悠斗は3人に軽く返事を返した。なぜこうなったかというと最初は名字順に別れ席に座っており、3人とも離れていたことから悠斗は安どしていたが、担任となった先生が〝早速だが席替えをする〟と宣言し、登校早々席替えをおこない、こうなったのだ

「(前途多難だな)」

「今年も全員バラバラのクラスになちゃったわね」
放課後、学校が終わり行きつけの喫茶店で疲れた心をいやそうと思いやってきた悠斗だったが、一つだけ忘れていたことがあった。悠斗の行きつけの喫茶店〝翠屋〟は聖洋５大聖女と呼ばれる一人の家が経営しているとことだった
「(心が休まる暇がないな)」
「そういえばすずかちゃん。ユウ君と仲良さそうやったな。フェイトちゃんも珍しく男子のことを名字やなくて名前で呼んでたし」
「そういうはやてちゃんも桜井君と仲良さそうだったよね」
「ユウ君とは小学生の時からの知り合いや。お互い料理好きっていう共通点から仲ようなったんや。そういうすずかちゃんは?」
「私は去年の文化祭からかな。偶然、実行委員になって出し物とか他のクラスメイト皆の役割とか話していくうちに自然と仲良くなって。文化祭が終わった後もよく話をしてたよ」
「ほうほう。そんでフェイトちゃんは?この中で一番かかわりがないように思えるんやけど?」
すずかの話を聞いたはやてが話をフェイトに振るう
「私の場合はちょっと特殊だったかな。ほらはやてが私に黙って去年開催したミスコンに出場させたでしょう?」
「あ〜〜あれは凄かったわよね。フェイトがぶっちぎりで優勝しちゃったんだから」
フェイトの話を聞き、その時の光景を思い出すように少女〝アリサ・バニングス〟が言う
「あの後から学年問わず結構な男子がフェイトちゃんに告白しては玉砕してたもんね」
当時に事を思い出しながら少女〝高町なのは〟が苦笑いしながら話す
「それで告白してきたうちの一人にＯＯ先輩って人がいたんだ」
「あ〜〜その人なら知ってるは。家ほどじゃないけど結構なお金持ちで何不自由なく育って、欲しいものはどんな手段を使ってでも手に入れるって噂があったんだけど、まさか」

「うん。校舎裏に呼ばれて告白されて、断ったら。隠れていた取り巻きの人に道を囲まれて、襲われそうになったんだ」
「その時に現れたのがユウ君ってことやね」
「うん。ＯＯ先輩が言った言葉と襲おうとしているところを録画したのを見せてたよ。それを奪い取ろうと取り巻きの人と一緒に襲い掛かったんだけど、一方的にボコボコにやられて、その映像を先生方に見られ、取り巻きの人と一緒に退学になったんだ。そのあとは、逆恨みで襲い掛かってくるかもしれないって言って、数週間の間、一緒に帰ってたんだ。そのあとも会えば軽く話してたりしてたかな」
「へぇ～～～つまり、ユウ君はフェイトちゃんにとって王子様ちゅうことやな」
「お、王子様!?」
はやてのからかい言葉にフェイトは顔を赤くした
「・・・・・」
遠くでその話を聞いていた悠斗はいたたまれずに席を立ちあがり、会計をするためにレジに向かう
「ふふ、モテモテだね。桜井君」
「・・・からかわないでください、士郎さん」
悠斗はこの店の店主を務める男性〝高町士郎〟のからかい言葉にジト目を向けると代金を払い店から出て行った

「ただいま～～」
「あら、お帰りなさい悠斗君」
「お帰りなさい悠斗」
家に帰宅した悠斗がリビングに入ると２人の女性が悠斗を出迎えた
「ただいま、プレシアさん、リインフォース」

大物からの依頼

「新しいクラスはどうだったの？」
「いいクラスですけど騒がしいクラスになりそうですね。何せ、聖洋5大聖女の内、3人がいますからね～～」
リインフォースが淹れたお茶を飲みながらプレシアの質問に答える悠斗
「しかし、2人を助け一緒に暮らすようになってもう5年か。早いもんだな」
「そう・・ね。もうっそんなに経ったのね」
「やっぱり、まだ怖いんですか？会うのが？」
「・・・そうかもしれないわね。アリシアと同じ顔なのに、年々アリシアとはどんどん違っていく、性格も、魔法の資質も何もかも。だから私はあの子にあまり関わらないようにしていた。あの子を娘だと認めてしまえば、何かが壊れてしまう、そんな気がしてたから。でも、それが間違いだった。アリシアを取り戻したがために私はあの子の願いと約束を忘れてしまっていた。でもそのことにもっと早く気が付いていればと今では思うわ。本当にいつも私は気づくのが遅いわ」
「（嘆きと後悔で進めない・・か）リインフォースはどうなんだ？前にも言ったが会いに行きたければいつでも行っていいんだぜ？」
プレシアの話を聞き終えた悠斗は今度はリインフォースに尋ねる
「私は貴方に命を救ってもらったという大きな恩があります。その恩を返しきるまでは主たちには会わず遠くから行く末を見守り続けます」
「（こっちはこっちで恩義を返すまで会いに行かないか。こりゃあ、強引にでも会わせるしかないな。何か些細なきっかけでもあれば楽なんだがな～～。ガイソーグの姿で〝お前たちに合わせたい奴らがいるついて来い〟なんて言っても馬鹿正直についてくるわけないし）前途多難だな」

「そういえば、あなた宛てに仕事の依頼が来ています」
「・・・誰からだ？」
「それが」
「何だ違法組織か何かか？もしそうなら断っておけ。殺生はやらん」
「いえ、そういうところからの依頼ではなく。その・・・時空管理局の3提督と呼ばれる人物たちからの依頼なんです」
「・・・・マジ？」
リインフォースから伝えられた依頼主に悠斗はしばらく放心してから聞き返した

「こちらが指定した時間になりました」
『よし、通信回線を開いてくれ』
「はい」
深夜、桜井家の地下にある通信施設でガイソーグの鎧を纏った悠斗の指示を受けて、リインフォースが回線を開く。しばらく待つと回線がつながり、2人の老人と1人の老婆が映った空中ディスプレイが投影される
『初めましてガイソーグ殿。私はミゼット・クローベル。時空管理局本局で統幕議長の職に就いていますが肩書だけのしがない老婆です』
『レオーネ・フィルス。法務顧問相談役を務めておるがミゼットと同じでしがない老人だ』
『ラルゴ・キース。武装隊栄誉元帥と呼ばれているがまぁ、他の2人と同じでしがない老人の1人じゃ』
『これはこれは、管理局が誇る、伝説の3提督の呼ばれている御仁らに名前を知っていただけているとは嬉しい限りだ。まぁ、俺の場合、悪い噂ばかりだろうがな』

『そうじゃの～研究所の襲撃及び破壊、輸送艦への襲撃等々、表向きは悪者と言われておるが、裏の事情を知る物、儂等のような者達は感謝しておるぞ。何せそのすべてに一部の管理局の高官が関わっておったのじゃからな』

老人の一人、ラルゴが愉快そうに笑って語りながら悠斗に感謝する

『世間話はここまでにして仕事の話といこうか。俺に頼みたい仕事があるそうだが？』

その後、3提督から仕事内容を聞いた悠斗はいくつかの条件を出し、3人の了承を得ると3提督からの依頼を受けることにした

『では、詳細なデータをそちらに送っておきます』

『最後に確認だ。俺が提示した条件を破った時の罰・・・本当にそれでいいのか？』

『ええ、勿論』

『そうか・・・覚悟が決まっているのであれば俺からは何も言わない』

そういうと悠斗は通信回線を切った

「ふぅ～～～」

「よかったのですか？仕事の依頼を受けて？」

話を聞いていたリインフォースが変身を解いた悠斗に尋ねる

「本当なら受ける必要なんてなかったんだが、今後の活動のことを考えるとあの3人との？がりは必要だからな」

仕事を受ける代わりに悠斗が提示した条件。それは、

・装備している剣及び、リュウソウル（ロストロギア扱い）を管理局の名のもとに取ろうとしないこと

・自分について一切の詮索をしないこと

の2つだ

「まぁ約束を破った場合、自分たちの首を差し出すといわれたときはびっくりしたけどな」

「それだけ、貴方と敵対したくないということでしょうね。数年前に貴方の持つリュソウルを狙った高官の編成した2個大隊を壊滅させたのですから」

「・・・そんなこともあったな」
当時のことを思い出し、悠斗は苦笑いする
「(しかし、仕事にあたるうえであっちからも1部隊を派遣するといったが、果たしてどんな奴らが来るのやら)」

「今話したのが今回、僕たちに与えられた任務の内容だ。何か質問はあるかい?」
とある一室の中に集まった面々に説明を終えた青年が尋ねる
「クロノ君、この協力者っていうのは誰なんや?」
「残念だが僕にも解らない。3提督の話では、複数のロストロギアを所持しているらしいが、決して奪おうとするなと言われている」
「複数のロストロギアを持ってるって一体どんな奴なんだよ?」
「とにかく今回の任務は今まで受けてきた度の任務よりも過酷なものになるだろう。全員、気を引き締めて任務にあたってくれ」
『了解』

妥協案

『指定されたポイントはここみたいだが・・・・まだ来てないようだな』

管理局、それも伝説と呼ばれる3提督の3人からの直々の依頼を受けた悠斗は向こう側がよこした局員との合流ポイントに到着したが、あちらはまだ来ていなかった

『どんな奴らが来ることやら。まぁ、あの3人の息のかかった奴なのは間違いないが。ましで話が通じる奴だといいんだけどな。その前に、研究所の場所の特定をしておくか』

悠斗は機械で出来た無数の鳥を指輪型のアイテムボックスから呼び出し、飛び立たせる

『同調開始』

鳥型のロボット達に見えている風景が悠斗が着けているコンタクトレンズに映し出される。しばらくの間、映し出されている映像を処理していると地面に淡い光が灯る

『来たようだな』

淡い光がどんどん輝きを増していき、光が弾けると、2人の青年と3人の少女、2人の女性、2人の幼女?が現れた

「誰が幼女だ!!」

「ど、どうしたのヴィータちゃん?」

「いや、何か今、幼女って言われたような気がしたんだよ」

『・・・これから死地に向かうというのに騒がしい奴らだな』

「き、君は」

「ガイソーグさん!?」

悠斗の姿を見た一部の者は驚き、一部の者は身構える

「なぜ君がここに」

『何故・・か。知名な君ならすぐにわかるのではないかクロノ・ハラオウン?』

「・・・まさか、3提督が頼んだ協力者というのは」
『あの3人がどのように説明したかは知らないが、俺にとってはお前たちが協力者・・・っというより、後始末をおこなってもらう奴らのほうが適切だな』
「どういう意味だ?」
銃剣を持った青年〝一瀬拓也〟が銃剣の切っ先を悠斗に向けながら訪ねる
『そのままの意味だ。それと共に仕事をする者に武器を向ける意味、解っているだろうな?』
「・・拓也。武器を降ろすんだ」
「クロノさん、でも!」
「降ろすんだ」
クロノの強い口調に拓也は渋々と銃剣を降ろした
「部下が失礼をした。僕の顔に免じここは許してくれないだろうか?」
『俺の仕事前に余計はいざこざはしたくない。今回は見過ごす、だが次はないと思え』
「感謝する。みんなも武器を降ろしてくれ」
クロノの指示に従い、武器を構えていた者たちは武器を降ろしたが、警戒は続けていた
『さて、お前たちはどのような任務を3提督から受けたのかを話してもらおうか?まぁ、何となく予想はつくがな』
「・・・僕たちはこの星にある違法研究を行っている研究員の捕縛と保管されているロストロギアの回収を行うよう言われている。差し支えなければ君が3提督から受けた仕事の内容を聞かせてほしい」
『俺があの3人から受けたのは研究施設への襲撃及び施設の破壊だ』
『っ!?』
3提督が悠斗に依頼した仕事内容を聞いた、管理局組は驚き目を見開く
「う、嘘だ!管理局、しかも伝説と呼ばれる3提督がそんなことを頼

むなんてはず・・・」
『・・普通ならそんなことは頼まないだろうな。だが、どんなものにも光と闇が存在する。それは組織も例外じゃないってことだ』
「どういうこと？」
「さぁ？」
「・・・・・」
『どうやらここにいる何人かは分かったようだな。研究所にいる職員、及び、警備している奴らの捕縛は手伝ってやる。施設への破壊活動にはそっちは手を出さない、これでどうだ？』
悠斗は妥協案をなのは達、管理局側に言う
「・・・分かった、君のその条件を飲もう」
「いいのクロノ？」
「あぁ」
『話が纏まったことだ。さっさと依頼された研究所に行くとしようか』
「待ってくれ。研究所がどこにあるのか解らないうちは無暗に歩き回らないほうが
話が纏まり、悠斗が立ち上がるり、行こうとするとクロノが待ったをかける
『先に来ていた俺が何もせずにただじっとここにいたとでも？研究所の場所なら既に突き止めた。〝界穿〟』
クロノ達と話をしている間に飛ばした機械を通して目的の研究所を発見していた悠斗は手をかざし、空間に穴を開ける
『ぼさっとするな行くぞ』
唖然としている管理局側に一声かけると悠斗は開けた穴に入っていった

いざ、研究所内へ

『着いたぞ。この先に研究所がある』
空間に開けた穴を通って研究所のある場所にやってきた悠斗と管理局一同。だが、目の前には建物のたの字も存在していなかった
「何もないじゃんか」
『そう見えているだけだ。よく見ておけ』
悠斗は近くに落ちていた石を拾い錬成を使って砂にすると、気流を操ってその砂を飛ばす。悠斗がすることが分からなく見ていた一同、そんなことをしてもその砂は目の前を通過するだけだと思っていたが、しばらくすると砂は左右に別れ進み、幕のようなものが一瞬だけちらりと姿を現した
「今のは一体」
『侵入者を撃退するバリアに研究所を隠す光学迷彩の2段構え。例え研究所を見つけられてもバリアにより返り討ちに合うっか・中に入るのには骨が折れそうだな』
悠斗がどう研究所内に入り込もうか考えていると
「まどろっこしい、正面突破すりゃいいだけの話だろう。このメンツなら相手にばれても問題ねぇ」
赤茶色の髪の幼女こと〝ヴィータ〟が実に脳筋な案を出す
「だから、誰が幼女だ!!」
「静かにしろヴィータ。相手にばれる」
桃色髪の女性。一部（主にヴィータ）からはわがままボディと呼ばれている
「む？」
「どうしたのシグナム？」
「いや、何か不名誉なことを言われた気がしたんだが、気のせいか？」
「今日のシグナムとヴィータちゃん、少しへんよ？」

金髪の女性、シャマルが心配そうな顔で2人を見る
「うむ、疲れているのならここは我らに任せて休むといい」
青い毛皮の狼、ザフィーラが2人に休むよう告げる
『正面突破という案は止めたほうがいいだろう。隠れていて解らないだろうがこの研究所はかなりの大きさ。中にいる護衛の魔導士もそれなりにいるだろう。どの程度の実力化までは解らないが、相手をしているうちに研究者達にロストロギアをもって逃亡される恐れもある』
「あの、ガイソーグさんのさっきの魔法で中に入ることはできないんですか?」
なのはがこの場所に来た時に通ってきた穴で中に入れないかと尋ねる
『無理だ。あれは俺が場所を認識していなければ出来ん。アレを使ってこの場所までこれたのは俺が待っている間に飛ばしていた物を通してこの場所を認識していたからこそ使えたんだ。・・・・・あんまり時間もかけてられんことだしな。ここは少し強引にいくか』

「ふわぁ～～～暇だな」
「おい、しっかりしろ。いつ敵が来るか分からないんだぞ?」
見張りをしている魔導師の1人の腑抜けた状態に1人が注意する
「見張りする意味なんてないだろう。何せ周りの風景と同化させて姿をくらませ、バリアで外敵からの侵入を阻むんだからよ。まじめに見張るなんて時間の無駄ってもんさ」
「・・・確かにそれはそうだが」
もう1人の魔導師が納得しようとしていると、張られているバリアに衝撃が入る
「な、何だ!?」

「おい、アレを見ろ!!」
魔導師の1人が指さしたほうを見ると、武装した管理局員が大勢いた
「この場所を自分たちで探し当てたとでもいうのか」
「で、でも大丈夫だろう。いくら管理局でもこのバリアを破るなんてこと・・」
「おい、あれって」
大丈夫だと自分に言い聞かせていた魔導士2人だったが、空にいる2人を見て顔を引きつらせる
「管理局のエース・オブ・エースに鉄槌の騎士、漆黒の魔弾だと!?」
「しかも、エース・オブ・エースと魔弾に至っては砲撃魔法を撃つ体勢だぞ!?」
「っ!緊急通信!管理局がこの研究所を発見し、攻めてきた。総員、武装して入り口に集合せよ!!」
魔導師の1人が研究所内にいる仲間に連絡を取り終えたとたん
「ディバイン・・バスター!」
「轟天爆砕!ギカント・シュラーク!」
「デススリンガー!」
ヴィータによる膨大な質量による大打撃でバリアに罅が入り、直後になのは、拓也、2人の砲撃魔法がひび割れた個所にあたり、穴を開けた
「つな!?バリアに穴を開けた!?」
「バリアの修復を急げ!」

「3人の力で壊せないなんて、どんだけ硬いんだよ?」
「でも、ガイソーグさんの作戦は成功したよ」

「あとは突入組に任せるしかないな」
1人入れる穴が修復されていく様を見ながらなのは、ヴィータ、拓也の3人は研究所に侵入したであろう仲間を信じ、地上に降りて、来るべき時まで魔力の回復に努め始めた

『侵入、成功だな』

ソウルの力の一旦

「少し強引に行くってどうやって研究所内に入るつもりだ？まさか、ヴィータが言ったように正面突破で入るつもりか？」
『少し違うな。クロノ・ハラオウン、そちらで戦える局員はこの場にいる以外でと何人いる？』
シグナムの問いを否定した後、悠斗はクロノに尋ねる
「艦にあと１０人にほど待機させているが」
『ならその１０人を今すぐこの場に呼べ。その１０人が到着し、準備が整い次第。高町なのは、一瀬拓也、鉄槌の騎士にあのバリアを攻撃してもらう』
「何であたしら3人だけでバリアを破壊しなくちゃいけないんだ？ここにいる全員でやればあっという間だろう」
『あのバリアを完全に破壊する場合、魔力の大半を消費することになる。勝てはするだろうが多少は苦戦するだろう。俺がお前達、3人にやってもらいたいのはバリアの完全破壊ではなく人1人通れるだけの穴を開けてもらうことだ』
「穴・・・ですか？」
『そうだ。その穴から研究所内に侵入し、敵魔導師及び研究員の捕縛、バリアの解除を行う』
「だが、その方法で研究所内に入れたとしても、入った瞬間に敵から一斉攻撃されるおそれが・・・」
『その点は問題ない』
悠斗は自分がたてた作戦を伝えると、クロノがその作戦の問題点を挙げるも、悠斗は問題ないといい、右腰のホルダーか1つのリュウソウルを取り出し、見せる
『これは周囲に溶け込み、身を隠すことができるものだ。これを使って周囲と一体化し空いた穴から中に入る』
「君はそんなものまで持っているのか。それは僕たちも使うこと

は・・・」
『出来ない。これは俺にしか使えない』
「まさか1人で行くつもりですか?」
『ならば逆に聞こう。敵にばれずに侵入する手立てをお前たちは持っているのか?』
「そ、それは」
悠斗の言葉にフェイトは口ごもってしまう。悠斗の言う通り自分たちには相手にばれずに中に入る手立てがないからだ
『まぁ、研究所内にいる魔導師と研究員の捕縛にロストロギアの回収、それらすべてを1人でできるほど俺は万能ではないからな、お前達にも手伝ってもらう』
「え?でも、私達は一緒に中に入れないから・・・」
『確かにお前たちは中に入れない。なら中に入った俺がお前たちを中に入れればいいだけの話だ。この場に来た時と同じようにな』

『ここでいいか。〝界穿〟』
研究所内に侵入した悠斗は人気がない場所までやってくると透明化を解除して手をかざし空間に穴を開ける。そして、その開いた穴からフェイト、はやて、リインフォース・ツヴァイ、シグナム、シャマル、ザフィーラの6人が入ってきた
「姿が消えていてわからなかったが、侵入は成功したようだな」
『当然だ。出来ない作戦を立てるはずがないだろう。本番はここからだ、俺達潜入組がバリアを破壊しつつ、敵を捕縛するのが先か、相手が逃げるのが先かのな』
「はい」
「気合入れて行かなあかんな」

悠斗の話を聞き、フェイトは力強く頷き、はやては頬を軽く叩いて気合を入れた
「誰かここにいるのか?サボってないで逃げる準備・・・・を?」
するとドアが開き、研究所で働いている研究員が入ってきた
『丁度いいタイミングでいいものがきたな。湖の騎士、奴の捕縛を』
「任せて」
悠斗に言われ、シャマルは魔力の糸でつながったペンタグルで入ってきた研究員を捕縛した
『〝絶界〟』
悠斗は不可視の空間遮断型の結界を入り口に張って、空間を遮断した
『さて、お前にはいろいろと話してもらおう』
『コタエソウル』
悠斗はガイソーケンから入れているソウルを取り出し別のソウルを装入し、数度口の開け閉めを行うと力を発動させる
『さて、話し合いを始めようか』
そして悠斗はコタエソウルの力を使い脱出用の艦の場所、バリアを解除する方法、ロストロギアの保管場所等々、様々な質問を研究員にし、答えさ情報を得た
『貴重な情報ありがとよ。もう眠っていいぞ』
「・・・あ!?」
悠斗は研究の肩に手を置き、スタンガン並みの電気を流し気を失わせた
『っということだ。ここは3手に別れ手行動したほうがいいだろう』
「せやね。なら私とリインはバリアを解除するほうに行くわ。シグナムは私と、ザフィーラとシャマルは艦のほうをお願いするな」
「はいです」
「解りました」
「はい」
「承知しました」

『なら残った俺とフェイト・T・ハラオウンは研究員達を捕縛しつつロストロギアの回収だな』
「よ、よろしくお願いします」
『それじゃあ行くか』
悠斗は空間遮断の結界を解除する。そして、部屋を出て3手に別れ行動を開始した

「金色の閃光!?なんでここに!?」
「捕まえるぞ!!そんで後で可愛がるぞ!!」
『〝縛煌鎖〟』
「な、なんだ!?」
悠斗が魔法を発動させるとどこからともなく無数の光の鎖が現れ、敵魔導師達に巻き付き縛り上げる
『つふ、いろんな意味で人気だな』
「・・うれしくないです」
敵の言葉を聞いていたフェイトはその言葉に素直に喜べないでいた
『(丁度いい少し聞いてみるか)フェイト・T・ハラオウン、お前はなくなった母親、プレシア・テスタロッサをどう思っている?』
「え?」
悠斗のいきなりの問いかけにフェイトは答えられなかった
『何、それなりに長い付き合いだからな気になっただけだ。まぁ、答えたくないのなら答えなくていい』
「・・・今でも母親だと思っています」
『ほぅ』
「母さんにとって私はアリシアになれなかった出来損ないでいらない存在なのかもしれません。でも、私にとっては今でも母さんなんです」
『・・・そうか。すまないなつらいことを思い出させてしまった』

震える声で語るフェイトに悠斗は心の底から謝る
『もし、もしだ。お前の母親、プレシア・テスタロッサに会えるとしたらお前はどうする？いや、どうしたい？』
「分かりあいたいです。あの時に行ったことをもう一度言って、娘だと、家族なんだと伝えたいです。解ってくれるまで何度でも、私の想いを伝えたいです。なのはが私にしてくれたように」
『・・・強くなったな。初めて会ったあの時よりも』
「皆のおかげです。その中には貴方も入っています」
『そういわれるほど俺は何もしていないがな。先を急ごう』
「はい」
聞きたかったことを聞き終えた悠斗は先を急ぐべくテンポを上げ、それに着いて行くべくフェイトもテンポを上げた

『もうすぐだな』
「はい。ロストロギアの保管庫」
敵を捕縛しながら進み続けた悠斗とフェイトは研究所内のロストロギアが保管されている区画にたどり着いた
『・・・妙だな』
「何がですか？」
『ロストロギアはここの者たちにとっても大事なもののはず、持って逃げるのにも誰かしらいると思ったが、誰一人いない』
「・・言われてみればそうですね。もしかしてもう全部持って艦のほうに行ったんじゃ」
『かもしれないが、確認だけはしておこう』
最後の曲がり角を曲がった悠斗とフェイトが見たのは、ロストロギアを取りに来た研究員とその護衛を務めていた魔導師達が大勢床に伏して倒れていた
「これって」
『・・・脈はある。気を失っているだけだろう。まさか、俺たち以外に

この研究所に入り込んだ奴がいたとはな』
悠斗は魔法で気を失った者達を縛り上げると、保管庫の前に立つ
『ご対面といこうか、俺たち以外の侵入者のな』

次元盗賊

「ん～～～ここにもなさそうだな。はぁ～～厳重な警備をしてたからあると思ったんだけどはずれか」
ロストロギア保管庫の中で一人の少年が保管されているロストロギアを手に取って眺めながら言う
「大体、ボスもボスだよな～～。名前は解るけどどんな形をしてるか分からない物をどうやって見つけ当てろっていうんだよ」
ここにいない人物に文句を垂れながらも少年は手を休めずに作業を続けていると、強い力が2つここに近づいていることを感じ取った
「ちょっと時間をかけすぎちまったか？まだ全部調べ終えてないし、手早く終わらせますか」

『ご対面といこうか。俺たち以外の侵入者のな』
そういうと悠斗は扉を開けて保管庫の中に入る。それに続くようにフェイトも中に入るが、誰もいなかった
「誰も・・いない？」
『(俺達が入る前に逃げた？)』
悠斗は周囲を見回しながら少しずつ部屋の中を進んでいく。そして、何かを感じ取ったのか振り向きざまに剣を振るった
「うぉ!?」
『・・攻撃の体勢から一瞬で回避の姿勢に移したか、やるな』
「まじかよ。気配を隠すのには結構自信があったのによ」
「いったい何処に？」

『最初からこの部屋にいたのさ。隅に隠れ、気配を完全に周囲と同化させることによりいないと思い込ませていたのさ。そうだろう？』
「・・まじかよ。初見でネタバレされるなんて」
悠斗の言ったことが正解だったのか少年は気を落とすがすぐの持ち直し、悠斗とフェイトを見る
「・・同業者・・には見えねぇな。あんたら一体何者だ？」
「時空管理局執務官、フェイト・T・ハラオウンです」
『俺はガイソーグ。しがない傭兵だ』
「げげ!?管理局に最近噂になってる全身鎧の傭兵かよ!?」
『こっちは名乗ったんだ。そっちも名乗ってもらおうか？』
「・・ゾラ・トライバル。そこの鎧のあんちゃんと同じってわけじゃないがしがない盗賊団のメンバーの一人さ」
少年、ゾラ・トライバルは悠斗とフェイトの自分の名を告げた
「・・そういえば、このごろロストロギアを目当てに輸送艦とかを襲っている集団がいるって報告が」
「あ～～多分それは俺達のことだな。まぁ、襲っても目当ての物じゃなかったら奪わないけどな」
『だが、目当てのものがあれば奪うんだろう？』
「まぁ、そこは否定しないな盗賊だし。あ～～でもロストロギアっていうだけで回収しようとする管理局と違って俺らはそこの暮らしに必要になってるものは奪わないけどな」
悠斗の問いを肯定したゾラだったが、自分達は管理局とは違うということを告げる
「奪うって私達は別に奪ってるわけじゃ・・・」
「アンタら管理局はそう思ってないかもしれないが、一部の人間はそう思っているのさ」
『世間話はここまでにしようか。俺にこの権利はないがお前を捕縛させてもらう。言いたいことは牢屋の中か取調室ででもいうんだな』
無理やり話しの腰を折った悠斗は剣先をゾラに向け言う
「悪いけど俺もここでつかまるわけにはいかねぇんだ・・・よ」
ゾラは一瞬で悠斗とフェイトとの距離を詰めると、後ろ腰に納めて

いる２本の剣の一本抜刀する。ノーモーションでの流れるような動きから繰り出された虚を突いた攻撃だったが悠斗には通じず余裕をもって防がれた。まさか防がれるとは思っていなかったゾラだったが袖口からピンポン玉サイズのボールを取り出すと床に投げつけた。床にあたったボールはすぐに割れ、白い煙が吹きで、部屋を満たした

「あばよ、とっつぁん!!」

「なんでそのセリフを知ってるの!?」

煙幕で視界を覆われ、何処にいるか分からないがゾラの口からでたその言葉に珍しくフェイトがツッコムが答えは返ってこなかった

『(魔力探知、気配を断つ効果のある煙幕か) こざかしい〝絶禍〟』

悠斗は６０㎝ほどの黒い球体を作り上げ、その球体に部屋に充満している煙を全て球体で吸引した

『(この部屋から出るには俺とハラオウンの後ろにある扉か部屋にある換気口から出るしかない。だが、扉が開かれた形跡はないし換気口が壊された形跡もない。いったいどうやって?)』

悠斗は部屋の隅々まで見回すとあることに気づく

『・・抜け目のない奴だな。さすがは盗賊といったところか』

「どういうことですか?」

『見てみろ。この部屋に入った時と今を比べてみればすぐにわかる』

悠斗に言われ、フェイトは部屋を見回していると、悠斗の言った意味を理解した

「ロストロギアが減っている」

『そういうことだ』

すると、別動隊及び、クロノからフェイトに逃げ出そうとした研究員達の捕縛が完了したという連絡が入った

『〝壊劫〟』

５００ｍ四方の正四角形の塊が無人となった研究所に落下し、跡形

もなく消滅させた
「相変わらず凄い威力だな」
魔法の余波で生まれたクレーターに局員が唖然としている中、クロノが話しかける
『それゆえに使いどころが難しい魔法だがな。さて、依頼はこれで終了だ。俺は帰らせてもらう(リインフォース聞こえるか?仕事は終わった。転移魔法で俺をそっちに戻してくれ)』
「(解りました)」
念話石と呼ばれる特殊な鉱石を使って作った通信機で地球にいるリインフォースに連絡を入れ、しばらくすると悠斗の足元に魔方陣が展開された
『さらばだ』
別れを告げると悠斗はその場からいなくなった

「ひゃ〜〜〜〜すっげぇ威力だな」
研究所から少し離れた場所で悠斗の放った魔法を見ていたゾラは素直に驚く
「さっさと撤収して正解だったな。あの鎧の野郎と正面切って戦うのは得策じゃねえ」
ゾラは保管庫から持ってきたロストロギアの入った袋を担ぐと転移魔法を発動させた悠斗同様この星からいなくなった

ショッピング

「次はあそこのお店に行くわよ！」
「ア、アリサちゃん、少し休ませて」
「いやよ。時間は有限っていうでしょう？ほら行くわよ!!」
「にゃ～～～!?」
休日の昼間、聖洋5大聖女と呼ばれている5人がショッピングを楽しんでいた
「アリサちゃん、楽しそうやね～～」
「中学生になってから5人そろって集まって遊ぶってことができなくなってきたからね。休日はなのはちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃんも仕事でいない日が多いから」
なのはの手を引っ張って別の店に入っていくアリサを見ながらすずかが語る
「フェイトー！はやてー！すずかー！ぼさっとしてないで早く来なさい」
「うん」
遠くにいるアリサにせかされ、3人は歩く速度を少し早めた

「へぇ～～～雑誌に書かれていた通りいろんな露店があるわね」
手ごろな店で昼食をとったなのは達はアリサが行ってみたいという場所にやってきた
「アリサ、なんでここに来たの？」
「何でって、女の子なんだから自分に合ったアクセサリーを見つけて出かけるときに身に着けたりするのは当たり前でしょうが」

フェイトの問いにアリサが呆れた口調と表情で言う。実際、アリサもすずかもペンダント等を身に着けている
「アリサちゃん、アクセサリーなら私達も一応身に着けてるよ」
なのは、フェイト、はやては待機状態になっているデバイスを見せる
「まぁ、それも一応アクセサリーの内に入るんだろうけど、別なのがあってもいいってことよ。取り合えずいろんなお店を見て回りましょう。これだって思うものが見つかるかもしれないし」
〝武器になるようなものはアクセサリーじゃないわよ〟と言いたくなったアリサだったが何とかこらえると3人を論しウィンドウショッピングの要領で露店を見て回るがこれだというものがなかなか見つからないでいた。そして次の店へと向かう
「いらっしゃいま・・せ?」
椅子に座って新聞を読んでいたい人物が客が来たことに気づき、新聞を畳んで挨拶をしようとしたところで固まる。そしてなのは達5人も固まった
「「ユ、ユウト／ユウ君!?」」
「悠斗君!?」
「「さ、桜井／君!?」」
「あんたこんなところで何やってるのよ!?」
「何って見ればわかるだろう?店番だよ」
アリサの質問に悠斗が答える
「この店の店長とは知り合いでな。偶に手伝ってるのさ」
「それってバイトじゃ」
「いや、バイトじゃない。なのはが家の店を偶に手伝っているのと同じだ。実際、前に先生が買いに来た時に同じ質問をされたがそういって納得してもらった」
「そう、なんだ」
「まぁ、駄賃はちゃんと貰ってるけどな。はつはっはっ」
「やっぱりバイトやん!!」
自分でバイトだと認め笑う悠斗にはやてがツッコム

「それにしてもこのお店、他のお店に比べて品数が少ないし、少し高いわね」
「そうだね。でも、他のお店に比べてなっていうか、手作りって感じがするよね」
「その通りこの店のは店主であるマイスター手作りだ」
すずかの言葉に悠斗は肯定をした
「すいません」
「おっと、いらっしゃいませ」
すると、一人の男性が店にやってきて、悠斗に話しかける
「先週、オーダーメイトを頼んだ菊岡です。頼んだものができたと連絡を貰たのですが」
「はいはい。菊岡様ですね、少々お待ちください」
話を聞いた悠斗は屋台の裏手に行き、戸を開けて一つの箱を取り出し、手袋をしてから箱を開け、慎重に中に入っていたものを取り出し男性に見せる
「こちらが菊岡様に頼まれ、作り上げたオーダーメイトの髪飾りです。ご確認ください」
「・・・綺麗」
５人は蝶を模した髪飾りを見てそうつぶやくことしかできなかった
「店主曰く、〝頼まれていたのに加え、羽の淵の部分に合うよう虹色風に仕立て上げてみた〟っとのことです。満足のいく出来だといっておりましたが、いかがでしょうか？」
「・・・素晴らしいです」
「ありがとうございます」
男性から髪飾りを受け取った悠斗は慎重に箱の中にしまい、梱包して男性に渡す
「オーダメイトの一品なのでＯＯ円になります」
「・・・どうぞ」
「・・はい、丁度ですね。ありがとうございました」
品物を貰い、帰っていく男性にお礼を言いながら頭を下げて見送る

「ねえ、このお店ってオーダーメイドも取り扱ってるの？」
「あぁ。その分、料金は高くなるがな。・・・まさか」
「ふふん、そのまさかよ。ここの店主にオーダーメイドを頼むわ。勿論全員分」
「あ～～～バニングスと月村はお嬢様だから払えるかもしれないが、なのは、ハラオウン、八神は払えるのか？」
予想していた言葉に悠斗はため息を吐き、支払い、特になのは、フェイト、はやての心配をした
「だ、大丈夫だよ」
「わ、私も」
「私もや。蓄えは仰山あるんや」
「大丈夫っていうなら俺は何も言わない。・・・・ほれ」
悠斗は数枚の紙を5人を渡す
「その紙に、どんな形のアクセサリーがいいか書いて俺に渡してくれ。できれば具体的に図面で書いてくれれば店主もやりやすいと思う」
「解ったわ。行くわよ皆」
紙を受け取ると5人は近くにある喫茶店に向かっていった
「今書くのかよ。しかしまずったな今日はあいつも来てるんだよな～～。ばれないとは思うが、心構えは必要だろうから連絡しておくか」
悠斗は携帯を取り出すと誰かへと連絡し始めた

「持ってきたわよ！」
日も落ち店じまいの準備をしているとなのはら5人が作ってもらいたいアクセサリーの書かれた紙をもって戻ってきた
「あれ？隣にいる人は？」

「あぁ、店主の手伝いをしている」
「リリス・メンフィスと申します」
リリスと名乗った女性は5人を見回すと笑みを浮かべた
「「・・・・・」」
「あの、さっきから私のことをじっと見てますが、どうかしましたか？」
自分のことをじっとみるなのは、フェイト、はやてにリリスが尋ねる
「・・・リイン・・フォース？」
「っ!?リインフォース？私はリリスですが」
「あ！すいません。知ってる子にあまりにも似ていたもんで、つい」
「私を見て、その人と見間違うなんて・・・とても大切な人なんですね」
「はい。私、私らにとってとっても大切な子なんです」
「リリス、そろそろ行こう」
「はい。それでは」
「頼まれた物ができ次第伝える。んじゃ、また学校でな」
「うん、またね」
5人に別れの挨拶を告げると悠斗はリヤカーを引いてリリスと共に帰っていった

「ふぅ～～～一瞬ばれたかと思ったが何とかなったなリリス・・いや、リインフォース」
「えぇ。私も一瞬焦ってしまいました」
帰りの道中、悠斗はリリスことリインフォースに話しかけた
「久しぶりに八神を直に見てどう思った」
「勿論嬉しかったです。それよりどうするんですか、頼まれた品は

?」

「頼まれた以上、ちゃんと作るさ」

贈り物

「・・・ふぅ～～～～何とか作る分の材料はできたな」
家の地下に作った作業場でアクセサリーを作るのに必要な鉱物等の錬成を終えた悠斗は固まった身体をほぐすと一息取ろうとしたとき、携帯に着信が入った
「着信者不明？」
画面に表示された文字に悠斗は間違い電話か、勧誘電話かと思い無視を決め込んだ。しばらくすると着信は止み、部屋を出ようとした矢先、また電話が鳴った
「（また同じ奴からか。また無視をしてもいいが何度もかけられるのも面倒だな）はい、もしもし？」
『やっとでおったか。遅いぞ』
「この声爺さん!?」
悠斗に電話をかけてきたのは悠斗をこの世界に送り込んだ神その人であった
「何で俺の携帯番号知ってるんだよ!?」
『そりゃあ、あれじゃ儂が神じゃからじゃよ』
「理由になってねぇよ」
神の返答に悠斗が呆れた口調でツッコム
「っで？何の用なんですか？確か転生させたものへの接触は禁止されているって前に言ってたような気がするんですけど」
『正確には直接接触するのじゃがの。今日電話したのはお主にあることを伝えるためじゃ』
「あること？」
『うむ、その世界ある遺跡に儂が作ったオリジナルのリュウソウルを隠した』
「・・・は？」
『場所はお主の携帯に送っておく。取りに行くか、行かないかはお

主の判断に任せる。ではの～～』
「ちょっと待て!?爺さん?爺さん!!あの爺、切るの早すぎだろう」
神の言葉に放心していた悠斗だが、すぐに気を持ちなおし問いただそうとするが既に通話は切れており、かかってきた番号に電話を掛けるも〝この番号は現在使われておりません〟というメッセージが聞こえてくるだけだった
「あの爺、この忙しいときに余計なことしやがって」
一息入れるのをやめて悠斗は椅子に座ってどうするかを考え始める
「爺さんは回収しにいくかは俺が決めていいって言ってたから無理に取りに行かなくてもいいんだが・・・神が作ったものだからな～～カナエソウルみたいなとんでもないものだったらやばいことになるし・・・・行くしかない・・か」
悩んだ末に悠斗は神が送ったと言ったリュウソウルを回収しに行くことを決めると、丁度いいタイミングでメールが届いた
「・・・・タイミング見てるんじゃねぇだろうなあの爺」

「ロストロギアの回収に行ってくるですか?」
「あぁ。俺が個人的に持っているのと同じ代物があるかもしれない遺跡が見つかったって知り合いの情報屋から連絡を貰ってな。今から行ってこようと思ってる」
「急ですね」
「この間遭遇した次元盗賊のこともあるからな。早いほうがいいだろう」
「・・・解りました。でしたら私も同行します」
「お前も?」

自分も着いて行くといったリインフォースに悠斗が尋ね返す
「はい。たまには身体を動かさないといざというとき困りますから。それに、頼んでいたものが出来上がったのでそれの性能テストも兼ねて一緒に行きます」
「頼んでいたもの？」
「プレシアの頼んで私用のアームドデバイスの開発を頼んでいたんです。それが先日完成したんです」
「へぇ～～リインフォース専用のデバイス・・・か。どんなものなのか興味あるな。分かった、一緒に行くか」
「では準備をしてきます」
悠斗にそう告げるとリインフォースは準備の為に２階に上がっていった
「さてさてさ～～て、一体どんなソウルが送られてきたのやら・・不謹慎だけど、少し楽しみだな」

「・・・到着しました」
「ここが俺が求めるロストロギアが封印されている遺跡がある星か」
リインフォースの準備が整い、家にある転送装置で遺跡のある星までやってきた悠斗とリインフォースの２人
「・・・見渡す限り森だな。遺跡を探すに一苦労しそうだな。偵察機を飛ばすか」
「いえ、ここは私に任せてください。グランシャリオ、ロッドフォー

ムで起動」
　リインフォースは納められた宝石を中心に剣、盾などと言った七つの武具が描かれたカードを取り出し、起動させるとカードは杖となりそれと同時に身に纏っている騎士甲冑のデザインが変わった
「リインフォース、騎士甲冑のデザイン変ってないか？」
「プレシア曰く、形態によって適した服装になるそうです。この状態は魔法戦に適した状態ですね」
「へぇ～～～」
「始めます」
　リインフォースは杖の石突で地面を軽く小突くと魔方陣が展開され、数瞬後にはピンボールサイズの漆黒の魔力球１２個を自分の周囲に作り上げ、それらを飛ばした
「サーチャーだったか？今のは？」
「はい。ですが、広大な星から遺跡だけを探すのには少々時間がかかってしまいますが」
「俺の無人偵察機でもそれは同じだろう。気長に待つとしよう」
「では、ティータイムといきましょう。こんなこともあろうかとお茶とスコーンを持ってきたんです」
「用意がいいな」
　悠斗はリインフォースが広げたシーツに座り、用意し、持ってきたお茶とスコーンでティータイムを始めた。そして、しばらくして
「・・・見つけました」
「結構早かったな」
「どうやらこの星は私達が思っていたよりも大きくはなかったようですね」
「んで？目的の遺跡は？」
「・・ここから数百キロ先にあるようです」
「中にどんな仕掛けがあるか分からない以上魔力は極力抑えておくべきだな。っとなるとこれで移動するのが一番か」
　悠斗は指にはめている指輪型のアイテムボックスから一台のバイクを呼び出す。呼び出したバイクにまたがり、調子を確かめる

「長いこと使ってなかったから心配だったんだが、問題ないみたいだな。リインフォース、遺跡までのナビゲートは任せる」
「・・・・」
「どうした？」
「いえ、その、悠斗、貴方、免許は持っているんですか？」
リインフォースは至極当たり前のことを悠斗に尋ねた
「おいおい、何言ってるんだ、持ってるわけねぇだろう」
「持ってないのになんでバイクをもっているんですか？」
「・・・貰ったからだ。そんなことより早く後ろに乗れ。行くぞ」
悠斗にせかされリインフォースは納得のいかない表情をするも悠斗の言う通りバイクの後ろに乗り、振り落とされないようにしっかりと悠斗にしがみついた
「そんじゃあ、出発だ」
リインフォースが自分にしがみついたのを確認した悠斗は遺跡へとバイクを走らせた

ソウルを求めて、いざ遺跡内へ

「ここだな」
「ずいぶんと雰囲気のある遺跡ですね」
バイクで走ること30分、悠斗とリインフォースは目的の遺跡前へとたどり着いた
「取り合えず入り口を探すぞ」
バイクをアイテムボックスに収納した悠斗は2手に別れ遺跡の周囲を回り入り口を探し始めたが一向に見つからないでいた
「・・・いっそのことこの壁を壊して中に入るか？」
『悠斗、ちょっと来てもらえますか？』
悠斗が物騒なことを考えていたところにリインフォースからの念話が届く
「どうした？入り口が見つかったのか？」
『いえ、入り口はまだ見つかっていないのですが。少し気になる物を見つけたんです』
「気になる物？」
『はい。貴方の持つ、剣の鍔に似た竜の頭部を模した絵のようなものです』
「（まさか）すぐに行く」
リインフォースの話を聞いた悠斗は思い当たる節があったのかすぐに行くと伝え、駆けだした

「リインフォース」
「お早いおつきですね」
「まぁな。それより言っていた絵はどこだ？」
「こちらです」
悠斗はリインフォースの案内の元、彼女が見つけた絵の描かれてい

る場所へと赴く
「あそこです」
「あれか」
絵の描かれている場所に着くと悠斗はガイソーケンを取り出す
「(俺の予想が正しければ)」
悠斗はガイソーケンを絵に向け掲げると剣から放たれた光が絵にあたり、絵の描かれた部分の石壁が上部へとスライドし入り口が出来上がった
「やっぱりか」
悠斗は剣を納め、出来上がった入り口から遺跡内へと入っていく。そして、
「つな!?」
道なりに進み、奥までたどり着くとリインフォースは目の前の光景に驚く
「遺跡の中に・・・溶岩地帯!?」
「こいつはたまげたな」
かくいう悠斗も目の前の光景に多少なりに驚いている
「法則的にあり得ません。遺跡の内部に溶岩地帯があるだなんて」
「その溶岩を覆うように作られたのかもしれないぞ?それにしても・・・・」
悠斗は溶岩地帯を見渡しながら考える
「(似てい・・・いや、似すぎている。あの世界の迷宮に)」
「悠斗?」
「何でもない。これだけの熱さだ、脱水症状や噴き出るマグマ等々に気を付けながら進もう」
「そのほうがよさそうですね」
悠斗の言葉にリインフォースは頷き、2人は細心の注意をしながら溶岩地帯を進み始めた

「撃ち抜け」
「あやよっと」
悠斗とリインフォースの2人は時折壁から噴き出るマグマやマグマを纏った生物と退治しながらも確実に前へと進んでいた
「ふぅ～～～・・・リインフォース、少し休もう」
「い、いえ、私、は、まだ、いけます」
「汗だらだらで、意識がもうろうしかけているのにそういわれても説得力ないぞ」
悠斗は壁に手を添えると〝錬成魔法〟で壁に穴を開け、開けた穴の中に入り、再び錬成魔法で人数分の簡易椅子を作る。そして、
「〝絶界〟」
空間遮断型の防御結界を自分達がいるスペースに展開した
「ほれ、水分補給しておけ。後、このタオルで汗も拭いておけ」
「あ、ありがとうございます」
悠斗は指輪型のアイテムボックスから2人分の飲料水とタオルを取り出し、そのうちの1つをリインフォースに渡す
「(迷宮が遺跡に変り、出てくる生物は変ってはいるがやはりここはあの場所そのままだ。まぁ、最奥がそのままかどうかは解らないが)」
水分補給をしながら悠斗は進んでいくうちに自分が感じたことが正解だと確信した
「(それにしても)」
悠斗はちらりとタオルで汗を拭くリインフォースを見る。汗をかいているせいなのか大人の女性としての魅力がさらに増しており、否応にも目を釘付けにされる
「?どうかしましたか?」
「いや、何でもない。それより体調はどうだ?」
「水分補給をしたおかげで少しは元に戻りました。ですが凄いものですね、あの熱さは。マグマ地帯を進む前に騎士甲冑を熱に耐えられるよう設定したのですが、あまり効果がなかったです」

「・・・そんなことも出来るのか。便利だなこの世界の魔法は」
「私としては悠斗の魔法のほうが不思議でありません。長い間、魔力を蒐集し、新しい魔法を本に記載させてきましたが、悠斗が持つ魔法は一切ありませんでした」
「確かに俺が覚えている魔法はどれも協力だが適正がなければ覚えても宝の持ち腐れだからな。実際俺も七つある強力な魔法全てを十全に扱えるかと聞かれれば〝Ｎｏ〟としか言えない」
悠斗はリインフォースに自身が覚えた七つの魔法についての説明を行う
「さて、十分とはいかないが休んで体力も気力も回復することができたしことだし先に進むとするか」
「はい」

「ここが最奥ですか」
「今にも噴火しそうな雰囲気だな」
それから1時間ぐらいかけて奥に進むと2人は遺跡の最奥らしき場所にたどり着いた
「悠斗あれを」
リインフォースが指さす場所に視線を向けると中央にある小さな祭壇らしき場所に神が用意したリュウソウルが置かれていた
「このまますんなりといけばいいんだが・・・」
『グォオオオオオオオオオ』
「やっぱりそう来るよな。お宝を手に入れるにはその宝を守護するガーディアンを倒さなきゃ手に入れられない。ＲＰＧそのものだな」
悠斗の独り言と共にマグマ溜りからマグマをでできた巨大な岩石人形（見た目はトリコのロックドラム）が現れた
「行けるなリインフォース？」
「勿論です」

リインフォースは杖を槍射砲へと変え左腕に装備し、騎士甲冑も別の物へと変化する
『グゥオオオオ』
「散開」
振り下ろされる岩石巨人の拳を2手に別れて回避し、悠斗は重力魔法でリインフォースは飛行魔法で宙に浮かび上がる。岩石巨人は左手で自身の一部である岩石を剥ぎ取り、悠斗めがけて投げつける
「陸の型　弧影斬」
それに対し悠斗は斬撃を飛ばして岩石を両断する。岩石を斬った斬撃はそのまま岩石巨人の左肩に当たり、斬撃痕を刻み付けたが、内部はマグマでできているのか瞬く間に修復された
「高速再生・・・いや、マグマを吸収して傷口を直したか。厄介な能力だな」
『グゥオオオオオ』
岩石巨人が足を振り上げると同時に、足元にあるマグマが飛び散る。マグマの雨が悠斗に降りかかる間際、悠斗の前にリインフォースが現れ、防御壁を展開してマグマの雨から悠斗を守ると、岩石巨人に近づき左腕に装備した槍射砲で岩石巨人の腹部を殴り、さらにバンカーを射出して腹部に風穴を開けた。だが、その穴はすぐに塞がってしまった
「まるでナハトと戦っているようだ」
「あれよりはましだろう」
岩石巨人の再生を見てリインフォースが昔のことを思い出していると隣にやってきた悠斗が比べている対称よりかはましだと告げる
「あれはマグマを吸収して傷をいやしている。つまり、マグマさえどうにかすれば奴は回復することができなくなる。だが、これだけの量のマグマをなくすのは至難の業だ。リインフォース、このマグマ全てを冷却できる氷雪又は水系統の魔法はあるか？」
「・・・あるにはあります。ですが、発動するのは大量の水を必要とするのでこの場では使えません」
「っと、なると俺がやるしかないか」

リインフォースの返答を聞くと悠斗は持っている刀を左逆手に持ち替えると
「ヒエヒエソウル」
一つのリュウソウルを取り出し、持っている刀の柄頭にソウルモードのソウルを装填すると刀に冷気が宿る。さらに悠斗の魔力が風に変換され刀を覆った
「吹き荒れろ絶対零度の凍気。ストームブリザード」
風により勢いを増した冷気がマグマへと放たれ全てのマグマを冷却させた
「これでお前はもう損傷を直すことは出来なくなったな」
『グ、ガ・・・』
「岩の隙間から身体に冷気が入り込んで肉体に流れるマグマも少し冷却されたようですね。大丈夫だとは思いますが、念には念を入れて完全に動けなくします」
岩石巨人の動きが少し鈍ったことに気づいたリインフォースは完全に動きを止めよう足元にベルカ式魔方陣を展開させる
「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち抜け。石化の槍、ミストルティン！」
詠唱と共に魔方陣が展開されその周りに8本の槍が設置される。そして詠唱の終わりと同時に8本の槍が岩石巨人に向け撃ちだされる。槍は岩石巨人にあたると、貫いた個所を中心に巨人の肉体を石化させていき、石像へと変わった
「止めだ」
悠斗は刀の柄頭に装填したソウルを取り出すと再び刀身に風を纏わせる
「肆の型　疾風爪々」
斬撃と真空の刃が組み合わさった3連撃が石像となった岩石巨人を断ち斬った
「ふぅ～～～」
「お疲れさまでした悠斗」
「お前もなリインフォース」

悠斗とリインフォースはお互いにこの戦闘の労を労った。それを終えると悠斗は中央の祭壇まで行き、置かれているリュウソウルを回収する
「さて、どんな能力を秘めたソウル何だが。こればっかりは試してみないと解らないな」
『リングソウル』

手に入れたソウルをガイソーケンに装填すると、重低音の音声と共に入れたソウルの名が流れる。そして
「(何だ?意識が・・・遠のく?)」
悠斗は意識を失った

「・・・・っ!ここは?」
「どうやら無事に儂が送ったソウルを手に入れたようじゃの?」
「爺さん」
見覚えのある空間に聞き覚えのある声を聴き、悠斗はここが何処なのか、そして誰が自分を呼んだのかを瞬時に理解した
「俺をここに呼んだ理由はあのソウルについて・・だよな?」
「正解じゃ。お主が手に入れたあのソウル。あれはの〜〜お主の世界にあるゲームの生物を参考に作ったものじゃ」
「俺の世界にあるゲームの生物?」
神の話を聞き、悠斗はそれが何なのかを考える
「(リングを使う生物。ソニック・・・は違うな。あれはどっちかというとリングを集めるものだ。リング、リング、リング・・・・まさか)ポケットモンスターのフーパ?」
「またまた正解じゃ。三つのリングがお主の周りに展開され、お主が行きたいと思った場所と?がる。お主の力量次第では隕石を呼ぶことも出来るがあまりお勧めしないな」

「俺だって星を氷河期にしたくないっての」
「取り合えず強力なものじゃから取り扱いには十分に注意するようにの」
「わ～～てる」
「では、お主の精神を元に戻すぞい。またの～～」
「まだ送るつもりかよ!?」

「・・う・!ゆ・・と!悠斗!?」
「っは!?リインフォース?」
「よかった。気が付いたのですね?いきなりピクリとも動かなくなったので心配したんですよ?」
「悪い」
自分のことを心配してくれたリインフォースに謝ると悠斗は自身を周りに浮かぶ三つのリングを見る
「(念じればよかったんだよな)」
悠斗は自分の部屋を想像して念じると。一つのリングが自分の部屋と?がった

「これはいいかもな。魔法を使って空間に干渉するには少し時間がかかるし魔力もかなり消費する。その点、このソウルを使えば魔力は使わないで済むし、仕事を終えた後、自力で帰れる」
「どうやらいいものだったようですね」
「まぁな。そっちは?それの使い勝手はどうだったんだ?」
「とてもよかったです。帰ったらプレシアに改めてお礼を言わないといけませんね」
「そいつは重畳。んじゃ、帰るか」
「はい」

リインフォースの答えを聞いた悠斗は頷き、リングを人一人通れる大きさまでに変化させるとリングを通って地球、正確には家へと帰宅した

降臨、満を持して

「がぁ!?」
「き、貴様ら、こ、こんなことをして、ただで済むと思って、いるのか?」
「黙れ」
「がは!?」
武装した集団がとある世界にある管理局の拠点を襲撃し壊滅させた
「リーダー、ここに保管されていた物を調べましたが我々が求めている物はありませんでした」
「・・・そうか。ならここにもう用はない。撤収する」
『Ｊａ』
リーダーの指示に他の者たちは頷き、撤収を始めた
「ま、待て。お前・・たちは・・一体・・何者・・なん・・だ?」
「・・・・我らはお前達、腐った管理局に恨みを持ち、鉄槌を下す者。それだけだ」
意識がまだ残っていた局員の問いにフルフェイスを被った者が静かに、だが怒気を含んだ声で答えながらその場から撤収した

「〝管理世界にある管理局の拠点に襲撃。犯人の目的は何なのか!?〟ねぇ」
悠斗の家の地下にある端末で管理世界で起こった事件の記事を読

んでいた
「取材に協力した局員の話では、基地と局員を襲撃しつつ、何かを探していたと書かれているけど、いったい何を探していたのかしら？」
「ロストロギアだということは間違いないのでしょうが」
悠斗と共に記事を見ていたプレシアとリインフォースが首をかしげる
「とにかく、犯人の狙いが管理局員ならここ（地球）にも来るかもしれないな」
「それはないんじゃないかしら？確かにここにも拠点は存在するけどこれまでに襲われた管理世界の支部に比べれば小さいし、保管されているロストロギアもない。ここを狙う理由は・・・」
「あるじゃないですか。ここにとんでもない物が」
「・・・夜天の魔導書・・ですね？」
「正解だ。それと俺のリュウソウルもな」
リインフォースの返答に悠斗はリュウソウルを手でいじりながら頷いて答えた
「まぁ、俺のリュウソウルに関しては問題ないだろう。ガイソーグとして活動していて、何処を拠点に行動しているか知っているのは２人のみ。だが、夜天の魔導書については持ち主も所在地も判明している。来る確率は高いだろう」

悠斗がリインフォースとプレシアと襲撃犯のことに関して話しているのと同時刻、管理局海鳴支部でなのは達を呼んだクロノが同じことを話していた
「っと、言うわけだからはやては十分に気を付けてほしい。外出は

控え、もし出るときはなのは達と一緒に行動してくれ」
「了解や」
「でも、この襲撃犯の目的って何なんだろうね？」
「解らない。でも、厄介な相手だということだけは確かだろうね」
なのはの問いにクロノがため息をつきながら答えた

「（なんでこうなった？）」
悠斗は目の前にいる武装した集団を見て人知れずため息を吐く
「（確か、頼まれていたアクセサリー作りに疲れ、息抜きがてら散歩をしようと外に出て、公園にやってきたらなのは達に遭遇して、嫌な予感がしたからとっとと別れようとしたら公園全体に結界が張られて、ニュースに出てきた管理局襲撃犯のやつらが出てきた・・・なんでさ？）」
「転移して早々、地球の管理局員に出会えるなんてついているわね」
「・・・ふん」
「フェイトちゃん、はやてちゃん！」
「「うん」」
「レイジングハート・エクセリオン」
「バルディッシュ・アサルト」
「「セットアップ！」」
「行くでリイン」
「はいです」
「「ユニゾン・イン」」
なのは、フェイト、はやての３人は防護服、騎士甲冑と魔導杖を展開し、はやては自身のサポートを務める融合騎の〝リインフォース・ツヴァイ〟とユニゾンする

「はやてちゃんはアリサちゃん、すずかちゃん、悠斗君の護衛をお願い」
「あの人たちの相手は私となのはがやる」
「了解や。３人には指一本触れさせへんで」
３人のことをはやてに託すとなのはとフェイトは３人の襲撃犯との戦闘を開始した

「（戦況は五分五分・・か）」
「あんた・・随分と冷静ね」
「・・・冷静に見えるようにしてるだけだ（嘘）」
悠斗が戦況を確認しているとアリサが声をかけてき、悠斗は答える
「ごめんなアリサちゃん、すずかちゃん、ユウ君、私らの事情に巻き込んで」
「別に気にしてないわよ。それにこんなことといちいち気にしてたらアンタたち3人の友達なんて務まらないわよ」
「そうだよはやてちゃん」
「アリサちゃん、すずかちゃん・・・・・おおきに」
「友情を深め合っているところ悪いがあの２人ピンチだぞ？」
「「え？」」
悠斗の指摘に3人が前を見ると悠斗の言う通りなのはとフェイトの２人が２人の襲撃犯に劣勢を強いられていた
「そ、そんななのはちゃんとフェイトちゃんの２人が押されるやなんて」
長い間一緒にいたことから２人の実力を一番よく知っているはやては目の前の光景を疑う。悠斗の言う通り２人が押されているのだ
「きゃ⁉」
「あう⁉」
そして、３人の襲撃犯の内。リーダー格と思われる女性の一撃を食らい、２人は悠斗たちのいる場所まで吹き飛ばされてきた

「なのはちゃん！フェイトちゃん！」
「・・・２つ名を得ているからどれほど強いのか楽しみにしていたが・・・弱すぎる」
「馬鹿にしてはだめよＫ。戦うことのできない子達に被害が行かないように力をセーブしていたみたいだから」
「ふん、守るべきものが近くにあるときこそ人はいつもの倍の力を出せるというもの。だというのにその守るべきものに気を取られたのはその２人が弱者だからだ」
弓を持った女性の言葉に槍を持った少年がなのはとフェイトを伐倒する
「な、なんで、私達、管理局を襲うの？」
「ほぅ？まあ意識が有ったとわな。認識を改める必要があるそうだ」
自分の攻撃を受けて気を失っていなかったなのはに少年は感心する
「お前達管理局を襲うわけだったか？他のやつらは知らんが俺は貴様たち管理局をつぶすために行動している。貴様たち管理局はロストロギアは危険だからという理由だけで回収を行っている。本当に危険なものかどうかも調べずな」
「それってどういう・・・」
「これ以上話すことはない。恨むのなら弱者である自分を恨むことだな。デモンズセイバー！」
少年は持っている槍の矛先をなのは達に向けると槍から奔流とも呼べる魔力砲を放った
「させへん！クラウ・ソラス！」
護衛にまわっていたはやてが杖から魔力砲を放ち、相殺させる
「確か・・・ロストロギア〝闇の書〟今は〝夜天の書〟だったかか？その主だったか？貴様の力この俺に見せてみろ」
「言われへんでも見せたるわ」
はやてが持つ書のページが自動的に捲られ、あるページで止まる
「『バルムンク！』」

はやての周囲に魔力で形成された８本の剣が設置され、少年に向け放たれる
「ふん！」
飛来する８本の剣を少年は回転の力を加えた横薙ぎですべて薙ぎ払った
「Ｍ、手を出すなよ」
「しょうがないわね」
「いくぞ！」
少年は素早い動きではやてに近づき槍による突きを繰り出すも。はやては書に蒐集された魔法の一つ〝ブリッツアクション〟で少年の背後に移動すると、蒐集された魔法〝フラッシュインパクト〟で攻撃するも少年は槍を後ろに回し攻撃を防いだ
「あの金髪の速さに比べれば止まって見える。デモンズディザスター！」
少年ははやての杖を弾き飛ばすと槍による連続攻撃を繰り出す
「きゃあ!?」
最初こそ連撃を防いでいたはやてだったが、少年の怒涛の攻撃を防ぎきれず突きによってなのは達のいるところまで突き飛ばされ、さらにユニゾンも解除された
「どんなに膨大な魔力や魔法を持っていようとも使いこなせないのであれば意味はない。ジークセイバー」
少年を槍を頭上に掲げると槍から魔力で形成された刃が噴き出る
「「さ、させない／へん」」
痛む体に鞭を撃って立ち上がったなのは、フェイト、はやての３人は少年を睨む
「・・・いい目だ。だが、もう遅い」
少年は笑みを浮かべると一切の躊躇なく魔力刃を振り下ろした。なのは、フェイト、はやての３人は協力して強固な防御壁を形成して少年の攻撃を防ぐ
「「ぐぅぅぅぅう！」」
「俺の強さの前にひれ伏せろ!!」

少年が魔力刃に更に魔力を注ぎ込む、3人も負けじと魔力を盾に注ぎ込む、均衡していた状況は飛来した矢によって崩された
「あう!?」
「「フェイトちゃん!?」」
一瞬の気のゆるみ、それによって保たれていた均衡は破れ刃が盾を砕き、刃が迫りくる。絶体絶命の瞬間、なのは達の前に一つの人影が現れ
「肆の型　断空」
迫りくる凶刃を両断した
「こいつらに何かあったら悲しむ人が多くいるんだ。だからやらせんねぇ」
右手に剣を持ち、5人を守るように前に出た悠斗がそう告げた
「やはりな。貴様を一目見たときから貴様が力を隠していたことには気づいていた」
「あらら、そんなに早くからばれてたとはな、まだまだ修行が足りないってことか。大丈夫かなのは、ハラオウン、八神」
少年の言葉に悠斗は乾いた笑みで笑うと、剣を肩に担ぎ、3人に安否を尋ねる
「ゆ、悠斗君?」
「さ、桜井?そ、その剣は」
「ま、まさか」
「ん?あ～～～咄嗟だったからこっちを取り出しちまったか」
悠斗は3人の視線が自分ではなく持っている剣に行っていることに気づき、見ると苦笑いをすると剣を左手に持ち替えながら少年をみる
「悪いがばらしたくないもんをばらさせた憂さ晴らしも兼ねて相手をしてやる」
「・・・一目見たときからただ者ではないと思っていたがここまでとはな。貴様、何者だ?」
「俺か?俺はどこにでもいる普通の学生。そして・・・騎士だ」
少年の問いに悠斗はリュウソウルをソウルモードからナイトモー

ドにさせながら答え、ソウルを剣の口部分に装填する
『ガイソウチェンジ』
重低音の声が周囲に響く
「鎧装」
剣を再び右手に持ち替え、口を閉じると、悠斗の周囲に鎧のパーツが現れ、悠斗の身体に装着された
「不屈の騎士　ガイソーグ。お前に敗北を与えてやる者の名だ。よーく覚えておけ」

リメイク版
序章

「ふふ、お帰りなさい悠斗君」
「ただいま戻りましたエルシャさん」
神域と呼ばれる神々が生活する場所でグラビアアイドルなど目ではないほどの容姿とおもちを持った女性が目の前にいる青年〝桜井悠斗〟を笑顔で出迎えた
「エルシャさん、前回聞こうと思ってたですけど。なんで俺を何度も転生させるんですか？普通こういうのって1回だけだと思うんですけど？」
「ええ、普通はそうです。ですが、悠斗さんは転生した世界で偉業を成し遂げているんですよ」
「偉業？」
「ええ。ネギまの世界では仲間と共に創造主を倒し、異世界召喚でいった世界では人の命を駒として見ていた神を倒してみせた」
エルシャは悠斗がおこなった2つの偉業について教える
「まぁ、その異世界に行かせたのは私なんですけど」
「何となくそんな気はしてたんですけどやっぱりそうだったんですか。でも、偉業っていうのはどうかと思いますけどね。俺、1人で成したことじゃないので」
「確かにそうかもしれません。ですが仲間と共にそれを成した。それは誰にもでも出来ることではありません。そんなあなたにあるお仕事をお願いしたいのです」
「仕事ですか？」
「はい。私の部下となって様々な世界を渡り私利私欲の為に物語を捻じ曲げようとする転生者の排除する仕事をお願いしたいのです」
「やっぱり俺以外にもいるんですね転生者って」
「はい。数多くいます。どうでしょうか？このお話、受けてもらえ

ますでしょうか？」
「・・・解りました、その話受けましょう」
「本当ですか!?」
「ええ。その代わり、俺と縁を結んだ者達をここに呼んで一緒に暮らさせてほしい。それが条件です」
「その程度のことでしたら問題ありません。貴方が次に行く世界での仕事が終わりここに戻ってきたときには全員を呼んでおきます。もちろん、次に行く世界で縁を結んだ人も一緒に」
「・・・感謝します」
エルシャの返答に悠斗は頭を下げてお礼を言った
「では、仕事に行ってもらう前に2つほど要件を済ませておきましょう」
「要件ですか？」
「はい。1つ目はこれを引いてください」
エルシャが指を鳴らすと見覚えのあるガチャポンが現れた
「・・・・引けってことですか？」
「はい。私の部下になり、仕事を引き受けてくれた対価です」
「対価って・・・最初に引いて得た力だけで俺は満足なんですけどね～～」
「・・・・・」
「解りまたよ。引けばいいんでしょう引けば」
じっと自分のことを見てくるエルシャに根負けしたのか、悠斗は渋々ガチャポンのレバーを引いた。すると、1個のカプセルが出てくる
「さてさて、何が出るんでしょうかね～～」
出てきたカプセルをエルシャが開けるとそこには
―初代祝福の風　リインフォースの復活―
っと書かれた紙が出てきた
「これはまた大当たりですね」
「そうなんですか？」
エルシャと共にガチャの内容を見ていた悠斗だったが、よくわから

なかったのか首をかしげる
「彼女に関しては貴方を転生させるのと一緒に蘇らせておきましょう。さて次は」
エルシャが指を鳴らすと2人の足元に魔方陣が展開される
「・・・この魔方陣、どっかで見たような・・・・まさか」
「ふふ、そのまさかです」
「ちょっと待って・・んぅ!?」
エルシャが何をするのか解った、悠斗は止めよとするも一足遅く、エルシャは悠斗にキスをした。すると、魔方陣が強く輝き、一枚のカードが現れた
「ふふ、契約完了ですね。これからよろしくお願いしますね」
手に取ったカードで口元を隠し、笑みを浮かべながらエルシャは悠斗に告げた。その後、コピーされたカードとカードの効果を確認し終えた後、悠斗は次の世界へと転生した

第01話

「・・・ぅ・・・うんん」
失っていた意識が目覚めた悠斗はゆっくりと体を起こす
「・・・ここが次の世界か」
数分かけて意識を覚醒させた悠斗は周囲を見回し、森の仲なのだと理解すると、顔を抑えて右手を顔からはなし、地につけようとすると
―ムニュン―
右手に何か柔らかいものを掴んだ感触を覚える
「ムニュン?」
それが何なのか気になった悠斗は振り向き、固まった。なぜなら今、悠斗が握っている何かは自分の隣で意識を失っている銀髪の美女〝リインフォース〟の胸だったからだ
「っん」
「(こ、これは!?柔らかさ、弾力、張り、その全てを兼ねそろえた完璧な)って違うだろう!?」
あまりの揉み心地に評論家のまねごとをした自分の一人ツッコミをしつつ、悠斗は慌てて右手を掴んでいた胸から離した
「すぅ〜〜〜はぁ〜〜、すぅ〜〜〜はぁ〜〜〜」
悠斗は大きくなった鼓動を落ち着かせるために何回か深呼吸を繰り返し、心を落ち着かせ、リインフォースを起こそうとするが、顔を見た瞬間、右手で触った感触が蘇ってくる
「煩悩退散!煩悩退散!」
心に湧き上がる煩悩を地面に頭を打って振り払い、起こそうとするも再び煩悩が浮かび上がり、再び頭を地面に打って振り払う。その行動を何度か繰り返しているうちにリインフォースの目が開く
「ここは?私は確か?ナハトと共に死んだはず・・」
「おぉ、目が覚めたのか」
「おぉ、気が付いたか」

「君は・・・君、額から血が出ているぞ!?」
リインフォースは悠斗を見るや一気に意識が覚醒した。なぜなら悠斗の額からは少量とはいえ血が出ていたからだ
「え?あ～～～気にしなくてもいいっすよ?俺にとってはほんのかすり傷みたいなもんですから」
リインフォースに言われ悠斗は自分が血を流していたことに気づくも前回の転生先で手に入れた技能ですぐに回復すると解っているために問題ないというが、それを知らないリインフォスースは
「すまない」
「へ?」
悠斗に一言謝罪すると、悠斗が羽織っている上着の袖を破り、さらにそれを破って端同士を結び、即席の包帯を作り上げるとそれで額を巻いた。その際、近距離までリインフォースが来たことで悠斗の胸元にリインフォースの双球が当たり、さらに髪から漂ってくるにおいに悠斗は我をわすれそうになるが
「(煩悩退散、煩悩退散、煩悩退散)」
見ず知らずの自分のことを心配し、怪我の手当てをしてくれている彼女に対し、失礼だと自分の言い聞かせ、必死に自分の煩悩と戦っていた
「・・これでよし」
「あ、ありがとうございます」
手当てを終え離れるリインフォースに悠斗は一言お礼を言う
「気にしないでくれ、私が勝手にしたことなのだからな。所で君はなぜこのような場所に?」
「気がついたらここにいて、えっと・・・」
「そう言えば自己紹介がまだだったな。私はリインフォース、気軽にリインとでも呼んでくれ」
「俺は桜井悠斗です。名字でも、名前でも好きなほうでどうぞ。ん!話の続きですけど、俺は気づいたらここに倒れていて、リインさんが隣で眠っていたんです」
「そう・・か。だが、なぜ私は・・・・ぐぅ!?」

「リインさん？」
顎に手を添え何かを考えていたリインフォースは謎の頭痛に膝をつく
「（こ、これは？）」
頭に送られてくる膨大な情報にリインフォースは困惑する。そして、数分かけて送られてくる情報を整理し、リインフォースは自分が蘇った理由を知った
「だ、大丈夫ですか？」
「あぁ、大丈夫だ。桜井」
「何ですか？」
「ありがとう。私が再び生を手に入れたのは君のおかげだのようだ」
「っ!?どうしてそれを」
リインフォースの言葉に悠斗は目を見開く

「これは・・凄いな」
「俺の自慢の別荘ですよ」
あそこではゆっくり話は出来ないと思った悠斗はリインフォースをダイオラマ球内にある別荘に招待し話をすることにした
「口に合うかどうかわかりませんがどうぞ」
「すまない、頂くよ」
悠斗は別荘内に保管していた緑茶をリインフォースに出すと向かい側の椅子に座る
「それで、なんで俺があなたの復活に関わっていると解ったんですか？」
「さっき、私の頭に膨大な情報が流れてきたんだ。そしてその情報の１つに私が蘇ったことについての情報もあったんだ。神という存

在が本当にいることにも驚いたし、君が転生者と呼ばれる存在だということにも驚いた」
「そんな情報まで教えたのかよエルシャさんは」
リインフォースの話を聞き悠斗は軽い頭痛に襲われる
「君のおかげで私は蘇り、新たな生を送ることができる。本当に、本当にありがとう」
「はぁ～～、礼を言うならエルシャさんに言ってください。俺はこれといったことはしていませんから」
「確かに私を蘇らせてくれたのは神だ。だが君が私の復活と書かれた券を当てなければ私は蘇ることはなかった。だから私は君にお礼を言いたいんだ」
「分かりました。そのお礼は一応受け取っておきます。でも、俺が転生者だってことは他の誰かに言うのは・・」
「勿論話さない。恩人に仇を返したくないからね」
「とにかく今日、あっちでは1時間ですが、ゆっくりと体を休めて体調と魔力を整えてください。ここは外と違って魔力が充溢してますからそこそこ回復すると思いますよ」
「・・・言われてみれば確かにここは魔力に満ち溢れている。ふふ、改めて異世界の魔法が凄いということが分かった気がするよ」
「あ～～そうそう、ここには風呂もあるんで入っても構わないですよ。着替えは・・・・俺の服でよければ貸しますが」
「重ね重ねありがとう。じゃあ、一着貸してもらえるかな?」
「了解しました。こっちです」
悠斗はリインフォースを風呂場へと案内すると、着替えの服を取りに自室へと向かった

第０２話

「くぁ～～～～～」
ダイオラマ球で１日を過ごし体力、魔力、その他諸々を回復した悠斗とリインフォースは外に出てくる
「・・・本当に１時間しか経っていなんだな」
「ん？信じてなかったんっすか？」
「半信半疑でした」
「まぁ、当然と言えば当然か。この中で１日過ごしてもこっちでは１時間しかたっていないって言われれば」
悠斗は苦笑いしながらダイオラマ球を指輪型のアイテムボックスにしまう
「一日使ってたっぷりと休息も取ったことだし、探索を始めますか」
「そうだな」
悠斗とリインフォースが探索を始めようとすると、茂みから
「ニャ～～～」
１匹の猫が出てきた
「・・・猫？」
「猫は猫でも野良猫じゃないかと」
しばらくの間２人を眺めていた猫は飽きたのか２人に背を向け数歩歩くと立ち止まり、悠斗たちを見る
「ついて来い・・ってことか？」
「そのようですね」
２人は猫の案内の元、森の中を進んでいき、出口までたどり着いた悠斗とリインフォースが見たのは見事な庭園のある屋敷だった
「これは・・見事なものだな」
リインフォースは見事な庭園に感動しいたが、悠斗の脳裏にはあることが思い浮かんだ
「（あれってどう見てもお金持ちが住んでそうな家だよな？ってこ

とは何か俺とリインフォースが森だと思っていた場所はこの家の敷地内。・・・これって誰だどう見て不法侵入になるんじゃ）」
　このままここにいればとんでもないことが起きる気がした悠斗はリインフォースを連れて一刻も早くこの場から離れようとした矢先。何かが地面に落ちる音が聞こえてきた。ブリキ人形のように悠斗が音のしたほうに向くと、メイド服を着た藍色髪の女性が立っていた
「（遅かったか）」
「だ、だ、だ、誰ですか貴方たちは!?も、もしかしてど、泥棒!?」
「いや、私達は」
　悠斗とリインフォースを指さしながら慌てる女性の言葉にリインフォースが訂正のことを言おうとするが、女性は相当慌てているのか２人の話を聞かず、あたふたしていると
「ファリン？いったいどうしたの？」
　屋敷から紫髪の少女がやってくる
「す、すずかちゃん！ど、泥棒！泥棒がいるんです!?」
「泥棒って、この家のセキュリティを突破できる人なんていな・・・」
　慌てる女性に苦笑いしながら少女がやってくると悠斗とリインフォース、正確にはリインフォースを見て驚いた顔をする
「リインフォース・・さん？」
「む？君は私のことを知っているのか？」
「お、覚えていませんか？あの日、クリスマスの夜になのはちゃんとフェイトちゃんと戦っていたあなたと会っているんですが」
「クリスマスの夜、あの２人と戦い・・・・・まさか」
　少女の言葉にリインフォースは過去の記憶をたどると、目の前の少女から自分を呪縛から救ってくれた小さき勇者の２人と戦っていた時に出会った一般人の２人の内の１人と姿が重なる
「あの時の結界内に迷い込んでいた少女か？」
「っ！はい」
「そうか。大きくなったものだ」
「あれからもう１０年経ちましたから」
「１０年・・・もうそんなに経っているのか」

「えっと、えっと？」
「どうにかなったのか？」

「月村すずかです」
「桜井悠斗です。到底信じてもらえないような話だったのに信じてもらいありがとうございます」
「気にしないでください。付き合いの長い友達の影響でこういうことにはちょっと慣れているんです」
「慣れっていうのは怖いからな～～。ファリンさんでしたっけ？驚かせてすいませんでした」
「い、いえ。こ、こちらこそみっともない姿を見せてしまいましたから」
「主はやてと騎士たちは元気にやっているのか？」
「はい。みんな元気にやっていると思います」
「思う？ここ（地球）にはいないんですか？」
「４年前、中学校を卒業すると同時にミッドチルダっていうところに引っ越していったんです。家は私ともう１人の家で預かっています」
「・・そうか」
「と、ところでお二人はこれからどうするつもりなんですか？」
暗くなった雰囲気をなくすためにファリンが悠斗とリインフォースに今後のことを尋ねた
「どうするもなにもな～～戸籍もなければ住む場所もない。資金はあるが使えるかどうか分からないしな～～」
「私もそのどれももっていない」
雰囲気を変えるために聞いた話で余計、雰囲気が悪くなりファリンがオロオロしていると
「だったら、はやてちゃんか私の友達の２人との連絡が取れるまで

の間、私の家で住み込みで働くっていうのはどうですか？
「「え？」」
「お父さんとお母さんは新しい工場を建てるために海外でお姉ちゃんも結婚と同時にヨーロッパに行っていて今、この家に住んでいるのは私とファリンだけなんです。大きいのに2人だけだなんてちょっと寂しくて」
「俺としてはありがたいんですけど、いいのか？見ず知らずの男を住み込みとはいえ家に泊まらせるだなんて？」
「悠斗さんは決して懸念していることをするような人じゃないと思ってますから。これでも人を見る目には自信があるつもりです」
「「・・・・・・」」
しばらくの間無言で互いを見る悠斗とすずか
「リインフォース、お前はどうする？」
「私は、さっきも言った通り、何も持っていない。だから、彼女の厚意に甘えさせ貰うつもりだ。君は？」
「俺もその厚意に甘えさせてもらう。もちろん、恩は働いて返す」
「決まりみたいですね」
「あぁ。しばらくの間、お世話になりますすずかさん。いや、すずかお嬢様」
執事のように頭を少し下げて悠斗はすずかに挨拶を行った

第０３話

「「行ってらっしゃいませ」」
悠斗とリインフォースがすずかの家でお世話になって早、２週間。悠斗はともかくそういったことに不慣れだったリインフォースは最初こそミスなどをしていたが今ではすべてをそつなくこなせるようにまで成長した
「今日は何時ごろ迎えに行けばいいんだ・・んん、ですか？」
「ふふ、いつもの口調でいいですよ悠斗さん」
「そういうわけにはいきません。今の俺は居候のみにして執事の１人。それに今は仕事中ちゃんとした口調で話さないといけないんです」
車を運転しながら悠斗はあまり使わない丁寧語ですずかに話す
「今日はアリサちゃんが家まで送ってくれるってメールで教えてくれたから帰りの迎えは大丈夫です」
「畏まりました」
すずかの答えを聞き悠斗は頷く。さて、何故こちらでの免許がないのになぜ悠斗が車を運転で着ているのか、答えは簡単、〝運転免許証再交付申請書〟と〝運転免許証紛失始末書〟の２つを提出してこの世界の免許証を作ったのだ（その際、魔法を使って担当した人の意識を誘導したが）
「到着いたしました」
「ドアは自分で開けるから大丈夫です」
エンジンを止め、ドアを開けようとするがすずかを自分で開けるというので悠斗は動きを止めた
「すずか――！」
「アリサちゃん。おはよう」
「おはようすずか。桜井もおはよう」
「おはようございます、アリサ様」

「・・・アンタの敬語は何かなれないわね」
金髪の少女　アリサ・バニングスがすずかと悠斗に近づき挨拶を行う
「それではすずか様、私はここで」
「うん。また家で」
「はい。では」
すずかとアリサに一礼すると、悠斗は車に乗り込み、車を家へと走らせた。その道中
「あ～～～丁寧語は疲れるな～～」
口調をいつもの砕けたもの戻していた

月村邸に戻ると悠斗は部屋の掃除、買い出し、庭の花の手入れ、飼っている猫たちへの餌やりなど沢山のことを行い、気が付くと夕方になっていた
「ただいま～」
「お邪魔します」
「お帰りなさいませすずか様。そしていらっしゃいませアリサ様」
夕食の仕込みを終わらせ一息入れているとすずかが大学から戻ってき、アリサも家へに上がってきた
「悠斗さん、ここは家ですし。いつもの口調でお願いします」
「ですが」
「私達しかいないからいいって言ってるのよ。普段のアンタの口調を知ってるこっちからしてみれば、何ていうかむず痒いのよ」
「・・・・解りま・・・んん、解った」
すずかとアリサにせがまれ悠斗は普段の口調に戻し、お茶とお菓子を用意するために厨房へと向かい、準備してすずかの部屋へと向かい、ドアを数回ノックし、返事が聞こえるとドアを開けて部屋の中に

入る
「今日作ったスコーンと数種類のジャム、それに合う紅茶だ」
「「「「ニャ～～～～」」」」
「これお前たちは食えないから」
部屋に入った途端群がってきた猫たちから持ってきたものを守りながらテーブルの上にお茶と菓子を置く
「ったく、俺を見ればすぐに餌をねだって来るようになったな」
「ふふふ、悠斗さんの作るご飯がおいしいからだと思いますよ」
「この家の猫全員、あんたに餌付けされてるものね」
足元でじゃれついてくる猫たちに悠斗は呆れため息を吐き、すずかとアリサはその光景を笑いながら見ている
「そういう2人もそうなんじゃないのか？」
「う～～～ん否定できない所が怖いわね。家で雇ってるコックも確かに1流でおいしいのはおいしいんだけど、あんたの料理を食べた後に食べると何か物足りないのよね」
アリサは悠斗の作ったスコーンを食べながら答える
「悠斗さん、今日の夕ご飯は何ですか？」
「今日は八百屋でいいキャベツが売っていたからな。ロールキャベツにしようと思っているが」
「あんたのロールキャベツ」
「食べていくか？」
「いいの？」
「作るのに4人前も5人前も大して変わらん」
「じゃあ、食べていくわ」
すでに胃を捕まられているアリサは悠斗の問いに返答する。アリサの答えを聞いた悠斗はしばらくの間すずかとアリサと他愛もない話をした後、夕食の仕込みをする為に部屋から出て行った

「８９８、８９９、９００、９０１・・・」
夕食を食べ終え、車で帰るアリサを見送り、執事としての仕事を終わらせた悠斗は外で刀と同じ重さの木刀を使って素振りを行っていた
「９９５、９９６、９９７，９９８，９９９，１０００」
目標の数の素振りを終えると悠斗は椅子にかけていたタオルで掻いた汗を拭き、水分補給を行うと
「1、2、3、4・・・・」
今度は虚空に向かって正拳突きを始めた。木刀と同じように１０００回の正拳突きを終えると今度は蹴りの練習をおこなう。全てを終わらせるころには時刻は１０時をまわっていた
「ふぅ～～～～」
「毎日、精が出るな」
「リインフォース」
ほでった身体を冷ましていると寝間着の上に上着を羽織ったリインフォースが悠斗に声をかける
「日課だからな。本当だったら拳と蹴りの練習には巻藁を使いたいが、それだと当てるたびに音が鳴って迷惑になるからな」
水分補給をしながらリインフォースに話す悠斗
「そういえば、八神はやてだったか？連絡はとれたのか？」
「すずかお嬢様曰く、連絡はして次元漂流者が２名いて保護しているから直接受け取りに来てほしいといったようだが、主も忙しいらしくてな、もう少し先になりそうだ」
「そうか。リインフォースとしては早く会いたいんじゃないか？」
「・・確かに成長した主と私を救ってくれた小さな勇者２人に騎士達に早く会いたいが、恩を返してないまま行くのはどうかと思うんでね。主たちがこっちに来れる日まで待つとするさ」
「あんたがそういうのなら俺もう何も言わない。さて、風呂にでも入ってくるか。あぁ、そうそう」

リインフォースに答えを聞いた悠斗は屋敷に戻ろうとしたが何かを思い出したのかリインフォースに振り返り
「おやすみ、リインフォース。いい夢見ろよ」
「ふふ、お休み悠斗。君もいい夢を」
悠斗の言葉にリインフォースは笑みを浮かべて言い返し、しばらくしてから屋敷に入り、貸してもらっている部屋に戻っていった

第０４話

「う～～～～ん、もうこんな時間、ちょっと夢中になって読みすぎちゃったかな？」
キリがいいところで本にしおりを挟み、身体を伸ばして硬くなった身体をほぐすすずか。椅子から立ち上がって中庭が見える窓から外を眺めると悠斗が木刀を持って素振りをしているのが見えた
「今日もやってるんだ悠斗さん」
毎晩（朝もやっているが）、悠斗がおこなっている素振り、最初は何気なく見ていたすずかだったが気づけば毎晩、その光景を眺めるのが日課となっていた。悠斗を見るその表情はまるで恋する乙女のような顔をしている。しばらくの間、悠斗を見ていたすずかだったが、机に置いてある携帯が鳴っていたことに気づき慌てて取ると自分の姉の名が表示されていた
「もしもしお姉ちゃん？うん、私もファリンも元気だよ。そっちは？・・・・・へぇ～～大変そうだね。うん、うん、え？帰ってくる？」
「忍様と恭也様、雫お嬢様とお姉様が今日帰ってくるですか!?」
「うん。昨日の夜に連絡が来てね。纏まった休みが取れたからみんなで帰ってくるって」
翌日の朝食ですずかは姉である月村忍から教えられたことをファリン、悠斗、リインフォースに伝える

「忍様とその婿で恭也様のことは知っていますが、雫お嬢さまとは？」
「雫お嬢様は忍様と恭也様のお子様で、すずかちゃんとここにはいないなのはちゃんの姪なんです」
「成程」
ファリンの話を聞き、リインフォースは雫が誰なのかを理解した
「なら今日はすき焼きにでもしましょうかね」
久しぶりに再会する家族の祝いに悠斗はピッタリな献立をたてる
「はい、それでいいと思います。あ！それとファリン、後で翠屋に行って人数分の特性シュークリームを買ってきて」
「はい、分かりました」
しかし、すずかは今日という1日が残酷な1日になることになるとはこの時は思いもしなかった

「ぐふふふ、今日も綺麗だな～～彼女は」
1人の男が遠く離れたところから双眼鏡を使って誰かを見ていた
「それにしても何なんだあの男は？彼女の隣に立つ資格があるのは世界でただ1人、この僕のみ。だというのにあの男は。まぁいい、出来上がったコレの性能実験にあの男を使うとしよう」
男は双眼鏡を手放すと部屋に隅に直立不動で立っている物達を見て悪童い笑みを浮かべた

「誰かに見られているですか？」

「はい。ここ数日、ずっと誰かに見られているような気がするんです」
すずかの迎えにやってきていた悠斗はすずかからストーカー行為をされていること教えられた
「最初は気のせいかなって思ってたんです。だけど、日に日に視線が強くなってきてるのを感じて」
「はぁ～～～最初に気づいたときに教えてくれていればいくらでも対策のしようがあったんですよ？」
「ごめんなさい」
「まぁ、すずかお嬢様は美人で綺麗ですからね～～」
「え？び、美人？私がですか？」
「いや、誰がどう見ても美人でしょう。家柄もよく人柄もいい。好きになる男はごまんといるでしょうね。まぁ、ストーカー行為は行き過ぎてますが。とにかく警察に連絡して、家の周辺を調べてもらうようお願いしましょう。最悪の場合」
「場合？」
「俺が始末しますので」
物騒なことを笑顔で言う悠斗にすずかは苦笑いすることしかできなかった
「ゆ、悠斗さん、前!?」
「え？うぉ!?」
すずかに言われ、前を見ると進路状に女性が立っており、悠斗は慌ててブレーキを踏み、車を緊急停止させた。車は女性の数センチメートル前で止まり、ぶつかることはなかったが女性は怖かったのか膝をつく
「大丈夫ですか!?」
悠斗は女性の安否を確かめるために車から出て女性に近づくと、女性は悠斗のほうに振り向き
「ターゲットヲカクニン、ニンムヲカイシシマス」
「は？」
ロボットのような口調でしゃべる女性に悠斗が呆けていると、女性

は悠斗に身体に手を添え、電流を流し込んだ
「がぁ!?」
「悠斗さん!?」
電撃を流され、気を失った悠斗を見てすずかが悲鳴に上げる
「ターゲットノキゼツヲカクニン。ツヅイテツギノニンム、ツキムラスズカノホバクヲハジメマス」
女性は腕を車に向けると、腕から催涙ガスの入った弾を車に打ち込み、中にいるすずかを眠らせた
「ニンムノカンリョウヲカクニン。コレヨリフタリヲツレテモドリマス」
女性は悠斗と車で眠るすずかを抱え、その場を後にした

第０５話

「う・・・・・ん?ここは?」
目が覚めたすずかは見覚えのない場所に横たわっていた。起きたてのため思考が定まっていないが意識がはっきりとしていくうちに何があったのかを思い出してく
「悠斗さん、悠斗さんは?」
一緒に連れてこられたであろう悠斗を探そうと身体を起こそうとするも両手、両足をロープで縛られ、動くことができない
「おや?もう起きたのかい?」
暗闇の中から1人の青年が現れた
「こんな汚い場所で申し訳ない。本当なら僕達が出会うにふさわしい場所を確保しておきたかったんだが、これ以上、僕以外の男が君の側にいるのに耐えられなくてね。やはり実際に会う君は映像越しや双眼鏡越しで見るよりも美しく見えるよ」
「もしかしてこのところ私を見ていたのは」
「そうこの僕さ。だけど、限りなく本物の鳥に近く作り上げた鳥越しとはいえ僕のことに気づいていてくれていただなんて、やはり僕たちは赤い糸で結ばれているようだ」
「悠斗さんは?悠斗さんは何処に」
「あの男かい?一応生きてはいるよ、見てみるかい」
男が指を鳴らすと宙に映像が映し出され、手足を鎖で拘束され、宙に浮かばされている悠斗が映し出された
「タフな男だよ。本当だったら最初のあの電撃でショック死させるつもりだったのに、生きているんだから。呆れた生命力だよ」
「よかった」
拘束されているとはいえ悠斗が無事なことにすずかが安堵する。そんなすずかをみて男は気に入らないのか舌打ちをすると
「安心するのはまだ早いよ。彼のいる場所には爆弾を仕掛けてい

る」
「っ!?」
「解ったようだね？彼の生死は僕が握っている。彼を生かすも、殺すも僕の気分次第だ」
「・・・何が望み何ですか？」
「望みか。僕の望みは君だよ月村すずか」
すずかの問いに男は笑って自分の望みを言う
「あの男や君の友達が知らない本当の君を僕は知っている」
「っ!?」
本当の自分を知っていると言われすずかは眼を見開く
「どうして知っているのかって顔だね？何、僕はちょっと特殊でねありとあらゆることを知ることができるのさ。あれもそれを利用して作ったのさ」
男が後ろを指さすと、そこには悠斗とすずかを襲った女性の姿をした自動人形が無数に立っていた
「君たちの間ではロストテクノロジーと呼ばれているんだったね？あれはその技術に僕の知る技術を足して作ったものさ。試作機だけど全てにおいて君達が知っている物よりも上さ」
「・・・・・」
「１０秒、１０秒間だけ時間を上げよう、決められない場合このリモコンであの男を閉じ込めている部屋の爆弾を爆発させる。カウントスタート。１０・・・・」
男がカウントをするなかすずかは悩む。男の話が真実なら悠斗は自分のせいで巻き込まれただけ、自分がこの男の望み通りにすればあるいは
「１、０。時間切れだ」
すずかが考えているうちに１０秒という時間は過ぎてしまった。男は服から起爆スイッチを取り出す
「ま、ま・・・」
すずかが待つよう男に言うが男はすずかの言葉を聞かず、躊躇いなくボタンを押した。すると、映し出されていた映像から爆発音が聞こ

えてき、映し出されていた映像が途絶えた
「あ～～あ、君がすぐに答えないからあの男は死んでしまったよ」
「あ、あ」
「さて、それじゃ次に行こうか」
男が指を鳴らすと別の映像が複数映し出される。映し出された映像はすずかにとって見覚えがありすぎるものだった
「今度は5秒だ。5秒間に返答が返されなかった場合、君の友人の家を爆破させる。カウントスター・・・」
男がカウントを始めようとしたとき、地震が起きたわけではないのに建物が揺れた
「・・・何だ?」
突然の揺れに男はカウントを止めると、遠くから何かが壊れるような音が聞こえてくる
「(何だこの音は?・・・少しづつ音が大きくなってきている?)」
大きくなってきている音に男が不思議がっていると、突如、男とすずかのいる部屋の壁が破砕音と共に壁が崩れ、崩れた壁の向こうから
「祭りの場所はここか?」
男が設置した爆弾で死んだと思っていた悠斗が無傷(服は所々焦げているが)で現われた
「な!?」
「ゆ、悠斗、さん?」
「ん?おう月村、無事・・・じゃなさそうだな」
悠斗はすずかの顔にある涙痕をみて肉体面では無事でも精神面では無事ではないと理解した
「な、何で生きている!?あの爆弾は高ランク魔導師をも殺すことができるものだ。仮に爆発を防いだとしても無傷ではいられない」
「何でって、あれ以上の爆発を食らったことがあるからな。アレに比べればあんな爆発何ともない。そうだな～～知り合いの無敵でチートでバグなおっさん的にいうなら〝気合〟だな」
「あの爆発が大したことがないって」
悠斗はなんとなく目の前の男が自分とすずかを襲撃した女性に指

示を出した存在だということに気づき、摑まえるために動こうとするが
「う、動くな！1歩でも動けば、この映像に映っている家を爆破させる」
「バニングスの家に、翠屋、もう一つのは知らないマンションだな」
「っふ、それらの家はすべて月村嬢の親友の家だ。このスイッチのボタンを押せば爆発する・・・っ!?」
「どうした？もう1歩動いてるんだが？」
ほんの少し目をそらしただけだというのに自分の目の前にいる悠斗に男は驚く。そんな男のことなど露知らず悠斗は起爆スイッチを持っている手を掴み、握りしめる
「っく!?」
男はあまりの痛みに持っていた起爆スイッチを手放す。それを見た悠斗は男の手を放し
「ふん！」
男を顔面を思いっきり殴り飛ばした（もちろん身体強化無しで）。悠斗に殴られた男は何度か地面をバウンドしながら数メートル先へと飛ばされた
「大丈夫か月村？」
悠斗は男が手放したリモコンを拾うと縛られているすずかに尋ねる
「今、解いてやるからな」
「き、きさま、よくも、よくも僕を殴ったな！」
「俺の拳を受けて意識を失っていないなんて・・見た目の割にタフな奴だな」
悠斗の拳は魔力や氣による身体強化無しの状態でプロの格闘家を一撃で倒せるほどにまで鍛えられている。その拳を受けて、ふらふらながらも起き上がる男に悠斗は驚くが、真実は違う
「（咄嗟に簡易のバリアを張ってなければ倒されていた）お前は僕の命令を破った！だからその罰としてあの3つの家を爆破させる」
「リモコン無しでどうやるっていうんだ？」

「起爆装置がそれだけだと思ったのか?ちゃんと予備は用意してい・・・ない?なんで!?ちゃんとよういして・・・」
「その予備っていうのはこれのことか?」
服をまさぐりながら予備の起爆スイッチを探す男に悠斗は男が探している予備の起爆スイッチ及び、男が所持していたすべての機具を指で挟みながら尋ねる
「い、いつの間に」
「お前を殴る前に奪っておいたのさ。起爆スイッチが1つだけとは思わなかったんでね」
悠斗のあまりの早業に男は開いた口が塞がらず、悠斗は炎を灯し、奪った機具を融解させながら答えた。絶体絶命の中、男は自称最高の頭脳でこの状況を打破する方法を思案する。幸いにも作った機械人形達は音声入力で動くよう設定しているので機具がなくても動かせる。だが、動くよう命令し、人形達が動き出すまでに数秒かかってします。その隙を悠斗は絶対に見逃さないという確信を男は持っている
「(何か、何かないか?)」
人形が起動するほんの数秒、悠斗の意識を外させることができるものはないかと男が周りを見回していると、悠斗に縄を解いてもらっているすずかに視線が行く
「(そうだ、あるじゃないかとっておきのが)君はおろかだね。騙しているかもしれない子を助けにわざわざ来るだなんて」
「・・・騙している月村が俺を?」
「彼女にとって君は餌でしかないのさ。何せ彼女は・・・」
「っ!やめて!」
「夜の一族と言われる吸血鬼なのさ」
男が何を言おうとしているのか分かったすずかは止めるよう悲願するが、意味はなく、男は悠斗にすずかの正体を告げた
「魔導人形起動」
そしてその隙に男は最小の音量で自動人形を起動させる言葉を告げた

「はぁ～～～～何か隠しているって気はしていたがまさか吸血鬼とはな～～・・2度あることは3度あるっていうけど、まさにその通りだな」
「え？」
「へ？」
悠斗の予想外のリアクションにすずかと男は口を開ける
「な、何で驚かない!?吸血鬼だぞ？あの血を吸う吸血鬼だぞ!?」
「ん？あ～少しは驚いたぞ？でも知り合いに吸血鬼、しかも真祖って呼ばれているのにあったことがあるからそこまで驚きはしないな。むしろ驚きより・・・・お前への怒りのほうが勝ってるな」
「ひぃ!?」
悠斗から発せられる圧に男は怯える
「お前が何かを言う前、月村はお前にやめてと悲願し、自分の正体をばらされた後、涙を流していた。誰にも知られたくない秘密だったはずだ。それをお前はこの場をきり抜けるため使い、月村の心を傷つけた、怒る理由は十分だ」
「吸血鬼である彼女を助けて君に何のメリットがある？」
「メリット？取り合えず、お前の野望をつぶせることが1つだな。恐らくだが、お前は月村を絶望のどん底にまで落とし、そのあと何らかの手段を講じて自分に依存するようするじゃないか？」
「・・・・」
「その反応を見るに図星だったみたいだな。何で分かったのかって顔だな？俺はちょっとばっかし特殊でな相手の魂魄を見て何を考えたり、思ったりしているのかを見破ることができるのさ。しかし、本当に下種というか最低な男だなお前は」
「う、うるさい！魔導人形達！あの男を殺せ!!」
男は起動した人形達に悠斗を殺すよう命令を下すと、人形達の目が光、悠斗に襲い掛かる
「はぁ、ちゃんとした戦いの場でこいつを使いたかったぜ。〝来たれ（アディアット）〟」
悠斗は自身の姿が描かれたカードを取り出し、呪文を唱えるとカー

ドが光、その光を基点に無数の白い帯が放たれ、襲い掛かってきた人形達を次々と貫いていく
「おいおい、この程度かよ?これならあの未来から来た自称火星人が作ったロボのほうが手ごわかったぞ?」
「ならこの人形ならどうだ」
男が指を鳴らすと奥から動いている人形の倍近い大きさの人形が現れる。悠斗は無数の白の帯をその人形に放つが、他の人形と比べて装甲が厚く、貫くことができなかった
「装甲は他のやつに比べて硬いみたいだな」
「装甲だけじゃない。やれ、クイーン」
男の指示に従いクイーンと呼ばれた人形は拳を悠斗へと突きつける。悠斗は後ろにいるすずかを抱きかかえると横に跳んで拳を躱す
「攻撃力も他のとは比べ物にならないぐらいすごいのさ。クイーン、奴を追い詰めろ」
男の指示を受けた人形は両拳を何度も振るって悠斗の逃げ場をつぶしていく。そして
「に、逃げ道が」
ついに逃げる場所が無くなってしまった
「ふふふ、これで終わりだ」
止めを刺すべく人形が拳を悠斗に向け放つ。迫りくる拳に怯えすずかは眼を閉じるが、いつまでたっても痛みが来ないことに不思議がり、目を開けると、人形の巨大な拳を片手で受け止める悠斗の姿を目にした
「ふ～～～んこの程度の威力か。月村がいたから避けてたんだが、これなら避ける必要なかったな」
人形の拳を受け止めている手の周りに3つの球体が現れ、3つ同時に弾けると球体から電撃が放出され、一時的に人形の動きを麻痺させる
「打ち貫け」
悠斗の腕の周りが一瞬光ると巨大なパイルバンカーが装着される。悠斗は質量の差など関係ないかのようにすずかを抱えたまま人形へ

と跳躍し、パイルバンカーを突き刺して人形の装甲に亀裂を入れ、それに続くよう射出された釘が人形の強固な装甲を貫いた
「ぼ、僕のクイーンが・・・」
自身の切り札である人形があっさりと壊されたのを見て男は呆然とする
「〝来たれ〟」
悠斗が再び紡いだ言葉により、悠斗の腕の装着されていたパイルバンカーが消え、周囲に剣、斧、槍といった無数の武具が浮かんだ状態で現れる
「何なんだ、何なんだお前のその力は!?」
「これか?とあるチートでバグなおっさんが使い、俺が引き継いだ宝具、如何なる武具にも変幻自在、無敵無類の力、〝千の顔を持つ英雄〟だ。まぁ、英雄って書かれてはいるが俺はそんな大層な男じゃないけどな」
「千の顔を持つ英雄?そんな宝具、知らないし、ゲームにも出てこなかったぞ!?」
「・・・・・」
男の言葉に何かを感じた悠斗だったが男の言葉を1回飲み込み、周囲に展開した武具を男に向け射出する。射出された武具は少しでも動けば当たるというギリギリの場所に突き刺さる
「ひ、ひぃいいい!?」
「つま、こんなもんか」
「す、すごい」
「さて、バーナウ・ファー・ドラグ　大気よ、水よ白霧となれ、この者に一時の安息を　〝眠りの霧〟」
悠斗は相手を眠らせることのできる霧をすずかに浴びせる
「ゆ、悠斗、さ、ん?」
「悪いな月村。ここから先はお前には見せることはできないんだ。安心しろ、目が覚めるころにはすべてが終わって家にいるだろうからよ」
眠りの霧を浴びたすずかは数秒後にすやすやと寝息を立てながら

眠り始めた。悠斗はすずかを床におろすと、1歩も動けない男に近づく
「な、何だよ？」
「お前・・・転生者だろう？」
「っ!?」
悠斗の言葉に男は眼を見開く
「正解か。俺のアーティファクト〝千の顔を持つ英雄〟が宝具だと知って聞いたことがない、ゲームになかったって叫んでいたかな」
「じゃあ、お前も」
「あぁ、俺も転生者だ。まぁ、立ち位置は違うけどな」
「立ち位置が違う？」
「俺はお前のような自分勝手に事を成し、話を大幅に変えようとする者を狩る者だ」
「ぼ、僕をやるっていうのか？」
「それが女神の部下となった俺の仕事だからな。お前が善意をもって月村に接していればやる必要はなかったんだけど」
聞きたいことを聞き終えた悠斗は男に背を向け眠っているすずかを抱える
「あばよ」
男に別れの挨拶を告げると悠斗は転移符を使ってビル内から脱出した
「・・・僕をやるとか言ってたくせにやっていかないなんて甘い男だ。姿を現せ」
男が命令口調な言い方で喋ると、空間がゆがみ5体の人形が姿を現した
「ステルス機能付きの奴等を隠して配置しておいてよかった。人形ども、僕の周りにある剣、槍、斧を抜け！」
男の命に従い5体の人形が撤去作業を始めようとしたとき、何かが崩れていく音が天井から聞こえてくる
「何だ？」
気になった男が天井を見上げると、巨大な刃が天井を突き破りなが

ら自身めがけて落ちてくる。それが男が最後に見た光景だった

「ジャックのおっさん直伝、斬艦剣」
転移符で外に出た悠斗はアーティファクトを使って特大の剣を作り上げ、建物に向け投げた。投げられた大剣は建物を崩し、男を両断し、瓦礫の山へと変わった
「随分と遅くなったが、帰りますか」
その光景を最後まで見届けた悠斗はもう1枚の転移符を取り出し、発動させて月村邸へと転移した

第０６話

「遅いわね」
月村邸のリビングで日本に帰国し家に帰ってきていたすずかの姉〝月村忍〟が時計を見ながら呟く
「少し落ち着いたらどうなんだ忍？」
「だけど、もう７時なのよ。ファリンの話ではいつも１７時ぐらいには帰って来ているっていうじゃない」
忍の夫である男性〝月村恭也〟が忍に落ち着くよう言うが、大事な妹であるすずかの安否が気になってそれどころではない
「アリサちゃんには確認したのか？」
「えぇ。電話で聞いたら〝いつも通りの時間に迎えの車に乗って帰って行きましたよ〟って言われたわ」
「ふむ」
忍の返答に恭也は腕を組んで考え込む
「私もサーチャーで周りをくまなく探したのですが。手がかり一つ見つけられませんでした」
リインフォースも自分の力不足に嘆く
「やっぱり、警察に連絡・・・」
忍が警察に連絡をしようと言おうとしたとき、リビングに魔方陣が描かれる
「これは」
描かれている紋様こそ違うがそれが魔方陣だということに忍と恭也、リインフォースの３人は気づく。魔方陣から発せられる光が一瞬だけ強くなり、光が収まると
「ふぅ」
すずかを抱えた悠斗が現われた
「すずか!?」

「すずかお嬢様!?」
「すずかちゃん!?」
気を失っているすずかを見て姉である忍、ファリンの姉であるノエル、ファリンの3人が血相を変えて近寄る
「眠っているだけです。後数分もすれば目を覚ましますよ。所でファリンさん、あちらの方々は?」
「前に話していたすずかちゃんのお姉さんである忍様、忍様の旦那様である恭也様、お2人のお子様の雫お嬢様、私の姉のノエル姉さまです」
「そうですか。取り合えず今は月村をソファーに」
ファリンから紹介を受けた悠斗はまずは眠っているすずかをソファーに寝かせると、振り返り
「挨拶が遅れてすみません。俺は悠斗、桜井悠斗といいます。事情は後で話しますが、この家に居候しつつ執事の仕事をさせてもらっています」
「じゃあ、君がすずかの言っていた異世界から迷い込んだ男の子って事かしら?」
「まぁ、そういうことです。それと一ついいですか?」
「何かしら?」
「貴方とお嬢さんもやっぱり、吸血鬼なんですか?」
「「「っ!?」」」
悠斗の問いに忍、ノエル、ファリンの3人は眼を見開いて驚き、リインフォースは別の意味で驚く中、恭也は両目を細める
「その反応からして正解か」
「ど、どうしてそのことを」
「ちょっと事件に巻き込まれましてね。そこで月村が吸血鬼だということを知ったんです。その話も後にしましょう。お宅のお子様がお腹を空かしているようなので」
「「え?」」
「・・・・・」
忍と恭也がそろって後ろを振り返ると顔を赤くして俯いている我

が子の姿があった
「本当だったら今日はすき焼きにする予定だったんですが、遅いですからね、無難にチャーハンにでもしますか」
「ねぇ、お兄ちゃん」
「ん？確か雫ちゃんだったね？どうした？」
「今日のすき焼きじゃないの？」
「あ～～ごめんね。今日は遅いから別の夕飯にしないといけないんだ。でも、明日の夕飯はすき焼きだよ」
「・・・本当？」
「あぁ。約束する」
悠斗は雫の頭を優しくなでた後、夕飯を作るためにリビングから出て行った
「・・・ノエル」
「畏まりました」
忍の意図を理解したノエルは悠斗の後を追ってリビングを出て行った

「彼を監視させるために行かせたのか？」
「ええ。すずかの正体を知ってもなお助けてくれた子だからそんな心配はないと思うけど、念を入れてね」
出て行ったノエルを見て恭也が忍に尋ねる
「ん、う」
「すずか!?」
「お・・姉・・ちゃん？」
そして、今まで眠っていたすずかが目を覚ました。すずかはゆっくりと起き上がると周りを見回す

「ここ・・は・・・家?悠斗さんは!?」
「悠斗君なら無事ですよ。今、キッチンに行って夕食を作っています」
「そう・・なんだ」
「すずかお姉ちゃん」
「雫ちゃん」
ファリンから悠斗もいることを聞いたすずかはほっとし、抱き着いてきた雫を受け止める
「すずか、彼にばれたらしいわね?」
「・・・うん」
「貴方が自分で言ったの?」
「・・・私を誘拐した人が話したの。どうやって知ったのかは解らないけどその人は家のことを詳しく知っていたみたい」
「誘拐した首謀者は?」
「解らない。悠斗さんにここから先はR指定だって言われて眠らされたの」
「・・・彼とその首謀者は繋がっていた?でも、もし繋がっているならすずかを助ける理由はないはず」
すずかの話を聞き、忍が情報を整理していると、扉が開き
「お待たせしました。夕飯ができたので席についてください」
料理を乗せたトレーを押しながら悠斗が部屋に入ってきた
「「早いわね／な!?」」

「さて、ご飯も食べ、おいしいデザートも頂いたことだし、そろそろ話をしましょうか」
食後のお茶を飲みながら忍が話を切り出す
「悠斗君と呼ばせて貰ってもいいかしら?」

「どうぞ」
「じゃあ悠斗君。貴方は私達、私とすずかのことをどこまで知っているのかしら？」
「２人が夜の一族と呼ばれる吸血鬼だってことしか知りません」
「すずかと貴方を誘拐した首謀者はどうしたのかしら？」
「死んだと思いますよ。もうニュースになってると思いますが」
悠斗はリモコンを手に取り、テレビの電源を入れ、ニュース番組にすると
『本日未明、町はずれにある廃ビルが崩れることがありました。この老朽化が進んでいたため来週に取り壊しが決められていたビルがなぜ崩れたのか。周囲の人の話によりますと、爆弾を連想させる音がビル周辺から何度かなっていたということです。さらに崩れたビルからは身元不明の男性が死体で発見され、警察は男性の身元の確認を行って・・・』
「っと、言うわけです」
「私が眠っている間にそんなことになってただなんて」
「あんな場所で暴れればああなるのは当然のことだ。月村が気に病む必要はない」
「・・・薄情かもしれないけど私達の秘密を知っている者がいなくなったことは不幸中の幸いね」
「・・・忍」
「・・お姉ちゃん」
真剣な表情ながらどこかやるせない雰囲気の忍に恭也とすずかは声をかけることしかできなかった
「そう言えば悠斗さんは真祖の吸血鬼にあったことがあるって言ってましたよね」
「そうなの？」
すずかの話を聞き、忍が悠斗の聞き返す
「ええ。吸血鬼の真祖どころか悪魔に龍、亜人といろんな奴にあったことがあるんで吸血鬼だって言われたところでそこまでの驚きはしないな」

「貴方がいた世界ってどんな魔境なの？」
「強い者がわんさかいる人外魔境です」
「ほう、少し君のいた世界に興味が湧いてきたな」
悠斗の話を聞いて恭也は口角を上げた
「私も興味があるけど、そのことについては後で聞きましょう恭也。悠斗君、私達は誰かに自分たちの存在を知られた際、掟に従い２つの選択肢を与えているの。１つは相手の記憶を書き換えて消すこと。消すと言っても吸血鬼だということだけを消すから記憶喪失になる恐れはないわ」
「成程、無用な混乱を避けるためですね。俺のいた世界でも、魔法というのは秘匿とされていて、ばれた場合は魔法の関しての記憶のみを消していましたから。それでもう１つは？」
「もう１つは記憶を残したまま共に歩むかよ」
「記憶を消されるのは嫌なので残すほうで」
「そう。じゃあ、これからもすずかのことをよろしくお願いするわね悠斗君・・・いえ、義弟君」
「・・・・はい？」
忍の発言に悠斗はしばしの間、思考を停止させ、口に出せた言葉がそれだった
「記憶を残すってことはすずかと生涯を共にするってことじゃない。つまり、すずかと結婚するってことでしょう？」
「いやいやいやいや、ちょっと待ってください。それは話が飛躍しすぎじゃありませんか!?そんな簡単にどこの馬の骨かもわからない男に妹を託しますか!?」
「確かに私は貴方と会うのは今日が初めてで、貴方のことはそこまで知らないわ。だけど、すずかは貴方と一緒に暮らしているから私以上に貴方のことを知っているわ」
「確かにそうかもしれませんが。そんなこといきなり言われて〝はい〟だなんて言えませんよ。それに月村の気持ちを無視してどうするんですか？」
「それもそうね。すずか、貴方はどう思ってるの？」

忍はすずかに話を振ると
「わ、私は、そ、その・・・・」
「(ふむ、脈はありって所ね)」
「いい加減にしろ忍」
すると、今まで傍観していた恭也が止めに入る
「だって、この子、美人でかわいいのに男のおの字もないのよ?そのかわりあっち系の話ならあり得るけど・・・んん、姉としてほおっておけないのよ」
「その気持ちは解らないでもないが、そういうのは自分たちにペースでやらせるものだ。幸い2人は同じ場所に住んでいるんだ友達から始め、少しづつ互いのことを知っていくのがベストだろう」
「む〜〜〜〜」
恭也の正論に忍は頬を膨らませながら渋々了承した。そして、雫を寝かせるために忍と恭也は部屋に行き、ノエルとファリン、リインフォースもリビングから出ていき、2人きりとなった
「その、すいません悠斗さん、お姉ちゃんがその・・・」
「あ〜〜〜謝らなくていいぞ。話を聞いて記憶を残すって決めたのは俺自身だからな。まぁ、さすがに婚約者って言われたときは驚いたけど」
「あははは」
すずかも悠斗と同じ気持ちだったのか苦笑いする
「恭也さんの言った通り、婚約者や恋人はハードルが高いから友達から始めていくってことでいいか?」
「はい、私もそれでいいです」
「それじゃあ決まりだな。色々と大変になるだろうがよろしくなすずか」
「え?」
「ん?友達になったから名字じゃなく、名前で呼んでみたんだが・・・いやなら前みたいに名字で・・・」
「な、名前呼びでいいです」
「そ、そうか?じゃあ、俺は明日も早いからこれで失礼する。お休み

すずか」
「お、おやすみなさい悠斗さん」
すずかのことを名字ではなく名前で呼んだ悠斗は挨拶を交わして自室へと戻っていった

そのころ
「う～～～～ん」
一人の少女が椅子に背持たれながら身体を伸ばしていた
「何とか設立前に終わらせることができたわ～～。そういえばすずかちゃんから次元漂流者を2人保護したって言ってたな～～。部隊が始動したら帰ることも出来へんやろうし、引き取りついでにゆっくりするのもアリやな。そうやなのはちゃんとフェイトちゃんも誘わんとな。私が言うのもなんやけど、2人ともワーカーホリックやから。休めるときは休ませんとな」
騎士と主が再開するのは近い

第０７話

「地球に帰るのは久しぶりな気がするな～～なのはちゃんとフェイトちゃんは？」
「私はお父さんとお母さんの結婚記念日と年末年始には帰ってるよ」
「私もなのはと同じかな」
３人の少女が話をしながらとある場所を目指して歩ている。その容姿と周知度から男性や女性がすれ違うたびに歓喜の声を小さく上げる。３人は目的の場所にたどり着くと部屋に設置された機械に乗ってその場から消えた

「いらっしゃ・・・うんん、この場合、お帰りのほうがいいのかななのはちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃん」
「なのはとフェイトには1年に1回は会っているからいいけど、はやて、あんたも偶には帰ってきなさい」
消えた３人がたどり着いたのは大きな機械が設置された大部屋でその３人をすずかとアリサの２人が出迎えた
「ただいまアリサちゃん、すずかちゃん」
「こうして会うのは久しぶりだねアリサ、すずか」
「あはは、返す言葉もないな～～」
アリサとすずかにお帰りと言われた３人の少女〝高町なのは〟、〝フェイト・Ｔ・ハラオウン〟、〝八神はやて〟の３人は久しぶりの幼馴染との再会を喜ぶ
「３人ともどれだけこっちにいられるの？」
「３泊４日の予定や。でもほんまにええんかすずかちゃん？お世話

になっても？」
「はやてちゃんの家はうちの名義で管理してるけど、1人だと寂しいでしょう？」
「そういわれると何も言えへんな～～。じゃあ、お言葉に甘えてお世話になります」
「すずか。すずかが保護した2人の次元漂流者は？」
「1人は家でメイドの仕事を手伝ってもらってるよ。もう1人は恭也さんと一緒になのはちゃんの家に行ってるの」
「え？お兄ちゃん、帰ってきてるの？」
「うん。なのはちゃん達が帰ってくる5日ぐらい前ぐらいにね」
「なら久しぶりに家族が全員揃ったんだ」
家族が全員揃ったことになのはは嬉しがる
「ん～～～～～？」
「どうしたのはやて？さっきからすずかのことをじっと見てるけど？」
「いやな、気のせいかもしれへんけどすずかちゃん綺麗になったんとちゃう？」
「え？」
はやての言葉にすずかは首をかしげる
「はやてもそう思う？私も日に日にすずかが綺麗になっていってる気がするのよね。すずか、何か特別なことでもやってるの？」
「ううん、やってないよ？」
「化粧品を変えたとかは？」
「変えてないけど」
「ん～～～～～～・・・・・もしかしてすずかちゃん、恋しとるんやないか？」
「綺麗になったのと恋に何の関係があるのよ？」
「よく言うやん、恋をすると女の子は綺麗になるって。っで？どうなんやすずかちゃん？」
「・・・・」
女子なのかなのはとフェイトも興味ありげな表情ですずかを見る

「えっと、ノーコメントで」
「「えぇ～～～!?」」
「教えてくれてもえぇやないか。減るもんでもないし」
「だ～～め」
そういうとすずかは足早に部屋から出ていき、逃がさないとばかりにはやてがその後を追った
「・・・・・もしかして」
「アリサちゃん？」
「何か思い当たる節でもあるの？」
「えぇ、多分だけどね。でも教えないわよ？すずかを怒らせたくないでしょう？」
「確かに」
「すずかは怒ると怖いからね」
〝滅多に怒らない人は怒らせると怖い〟の言葉通り、滅多に怒らないすずかが怒った時の怖さを知っている２人はおとなしく引き下がった
『ぎにゃあああああ!?』
ただ１人は逆鱗に触れたのか叫び声を聞こえてきた

「うぅ～～～～～」
どこぞのギャグ漫画のように頭にたんこぶを添えたはやてがテーブルに突っ伏していると
「ご、ごめんねはやてちゃん」
「すずかが謝る必要ないわよ、はやての自業自得なんだから」
「にゃははは」
「あははは」
辛抱な言葉を口にするアリサになのはとフェイトは引き際を間違えれば自分たちもはやてと同じ目にあっていたと思い、から笑いする

ことしかできなかった
『お嬢様、お茶をお持ちしました』
「っ!?」
扉がノックされ、聞こえてきた声にはやてがいち早く反応する
「ふふ、入ってきていいですよ」
『・・失礼します』
そんなはやてを微笑みながらみていたすずかは扉の先にいる人物に入ってくるよう促す。扉が開き、5人、正確には3人の前に現れたのは
「え!?」
「・・嘘」
「リ・・イン・・フォース?」
メイド服を着たリインフォースであった
「お久しぶりです主。そして、小さな英雄達よ」
「ほんまに・・・ほんまにリインフォース・・なんか?」
「・・はい。貴方様から祝福の風という名を授からせてもらった、リインフォースです」
はやての問いにリインフォースが答えると、はやてはリインフォースに抱き着き、嬉し涙を流す。リインフォースもはやてを優しく抱きしめ、同じように嬉し涙を流した。そしてその後ろではなのはとフェイトが涙を流してはやてとリインフォースの再会を祝っていた

「皆にみっともないところを見られてもうたな～」
「みっともなくなんてないよはやてちゃん」
「うん。もう一度会うことが出来て、嬉しく泣いていたんだもん。全然みっともなくないよ」
落ち着いたはやてが流した涙を拭きとりながら笑って言うもなの

はとフェイトはそれを恥じる必要なはないと論する
「リインフォースさんはこれからどうするんですか？」
「主と共に歩んでいきたいと思っているが、とある人物に返すことのできない大きな恩があるります。ですので私は生涯をかけてその恩を返したいと思っているんです」
「・・・・そっか」
「いいのはやてちゃん？せっかく夢だったリインフォースさんと一緒に暮らすことができるんだよ？」
「本音を言えば私やってリインフォースと一緒に暮らしたい。でも、この子が自分で決めたんや。やったらこの子の主として私はリインフォースの思いを尊重させるわ。それに一生会えなくなるわけやないんや」
「はやて」
「所でリインフォースが言う生涯をかけて恩を返したいっていう人は何処にいるんや？主として挨拶しておきたいんやけど」
「彼でしたら、高町なのはの家にいますよ」
「え？ってことは？」
「はい。もう1人の次元漂流者です」

第０８話

「いらっしゃいませー」
店のドアが開き、カウンターにいた男性が入ってきたお客を出迎えると
「ただいま、お父さん」
「なのは!?」
遠い場所に暮らしていて滅多に帰ってこない娘が帰ってきたことになのはの父　高町士郎は驚いた声を上げる
「どうしたのあなた？ってなのは!?」
「ただいまお母さん」
「滅多に帰ってこないあなたが帰ってくるなんていったいどうしたの？」
店の奥からなのはの母　高町桃子が顔を出し、突然帰ってきたなのはの顔を見て驚く
「来月から仕事で忙しくなりそうで、その前に休暇を取ってフェイトちゃんとはやてちゃんと一緒に帰ってきたの」
「「お久しぶりです」」
「あら、フェイトちゃんにはやてちゃん、見ない間に随分綺麗になったわね」
「あ、ありがとうございます」
「いや～それほどでも」
桃花のお世辞（本人は本当のことを言っている）に２人は照れる
「そうだ、すずかちゃんから聞いたんだけどお兄ちゃん、帰ってきてるんだよね？」
「あぁ。今、美由紀と雫ちゃんを連れて道場に行っている。すずかちゃんの家に新しく入った執事君もね」
「？なんで道場？」
士郎の話を聞き、なのはは首をかしげる

「百聞は一見に如かず。口で説明するより実際に見たほうが早いかな」
「「「???」」」
士郎の言葉になのは、フェイト、はやての3人はさらに首を傾げ、事情を知っているリインフォース、すずか、アリサの3人は苦笑いをしていた

なのは達は士郎に言われた通り、道場へと赴き
「・・・へ？」
「・・・嘘」
「まじかいな」
道場内を駆け回りながら木刀を打ち合う恭也と悠斗の姿を見て唖然とする
「あれ？なのはにフェイトちゃん、はやてちゃん。帰ってきてたんだ」
「う、うん。そ、それよりお姉ちゃん、あれ何？」
道場の隅で悠斗と恭也の打ち合いを見ていたなのはの姉　高町美由紀になのはが尋ねる
「見ての通り、道場を駆け回りながら木刀で打ち合ってるんだよ。いや～～～まさか恭ちゃんとまともに打ち合える子がいるだなんて、世界は広いね～」
「恭也さんって、魔法無しのシグナムと対等に打ち合えるんやったよね？」
「むしろ、シグナムが押し負けていたよね？」
「そんな恭也さんと打ち合えているあの子は一体何者なんや？」
はやては恭也と打ち合っている悠斗を見て何者なのかの疑念を抱

く
「この短日でここまで成長しますか」
「自分でもびっくりしているよ。これ以上は成長できないと思っていたんだが、君と打ち合っていくうちに壁を乗り越えたらしい」
「・・・まるで超野菜人みたいだな」
「俺は金髪にはなれないぞ？まぁ、家族限定でそれに近いことなら出来るかもしれないが」
「「出来るんかい」」
恭也の発言に悠斗と観戦していたはやてが同時にツッコム
「ん？」
「あ」
「なのは？帰ってきていたのか？」
「う、うん、久しぶりお兄ちゃん」
「お兄ちゃん？じゃあ、彼女が恭也さんと美由紀さんの妹で、側にいるのがす・・んぅ、月村の言っていた友達の魔導師ってことか」
悠斗はなのは、フェイト、はやての3人を見て以前、すずかとリインフォースが話していた魔導士が彼女たちなのだと理解する
「どうも初めまして桜井悠斗だ」
「高町なのはです」
「フェイト・T・ハラオウンです」
「八神はやてです。すずかちゃんから話は聞いておったんですけど、ちょっとごたついていてすぐに迎えに来れなくてすみません」
「そこらへんは気にしなくても結構だ。俺がいなければ防ぐことのできなかったこともあったからな」
「どういう意味なんや？」
「そこらへんは後で月村にでも聞いてくれ。それで俺は一体どうなるんだ？」
「えっと、私達、管理局の規定で次元漂流者を見つけた場合は保護し、本局又はミッドまで連れてくるよう義務付けられているんや」
「ですので私達がミッドに戻るときについてきてくれるとありがたいです」

はやての説明に続くようにフェイトが悠斗に話す
「そっちに行く・・・か」
「何か問題でもあるんですか？」
「いや、俺は数日前から月村の護衛も兼ねていてな。護衛する人間を放っておいて着いて行くのはちょっとなと思ってね」
どうしたものかと悠斗が考えていると
「だったら、すずかも連れて行くっていうのはどうかしら？」
「「忍／さん」」
エプロンを着た忍が道場にやってきた
「忍さん、お久しぶりです」
「久しぶりねなのはちゃん」
「どうしたんだ忍？」
「お昼ご飯ができたから呼びに来たのよ」
「お、お姉ちゃん？さっき、私も連れて行けばいいじゃないって聞こえたんだけど？私の聞き間違いだよね？」
「聞き間違いじゃないわよ。まぁ、話はお昼ご飯を食べてからにしましょう」

「それでお姉ちゃん。私も一緒に行けばいいじゃないって言ったけどどういうこと？」
「その通りの意味よ。貴方、なのはちゃん達のデバイスだったかしら？それを見てそれを作る仕事がしてみたいな～～って前に言っていたじゃない」
「た、確かに言ったけど、それは大学を卒業してか・・・」
「確かにそれも一つの案ね。だけど、実際にそれについて学びながら時間をかけて大学を卒業するっていうのも1つの案よ。すずかは私よりも要領がいいから大学の勉強とそっちの勉強をうまくおこな

うことが出来るはずよ」
「う～～ん」
忍の話を聞き、すずかがそれもありかなと思うも忍が言うようにうまく出来るかどうか心配で悩む
「それに・・・悠斗君をなのはちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃんの3人の誰かに奪われちゃうかもしれないわよ？」
忍はすずかの耳元でそう告げる
「私の勘だけど・・悠斗君って恭也と同じでモテそうだから油断してると奪われちゃうわよ？本当に好きなのなら自分のことをもっとよく知ってもらうために頑張らないと・・ね？」
「・・・・うん」
「よし、決まったわね。早速、大学に申請しないといけないわね。はやてちゃん、そういうことだからすずかのことお願いしてもいいかしら？」
「まぁ、1年っていう期間限定でいいのなら構いませんけど」
「1年っね。すずか、その1年で学べるものはすべて学んで自分の糧にしてきなさい」
「が、頑張る」
「じゃあ、ついでにアリサちゃんもお願いしてもいいかしら？」
「へ？私もですか？」
まさか自分にまで話が来るとは思っていなかったアリサが忍に尋ねる
「アリサちゃんは自分の家の事業を手伝うのが夢だったわよね？」
「は、はい。だから大学でも経営や経済関係の授業を受けています」
「だったら、はやてちゃんのと行けばそれらを実際に体験できるんじゃないかしら？会社と軍じゃ用途は違うかもしれないけど、お金の回り方、回し方の勉強ができるわ」
「・・言われてみれば確かに。・・・はやて？」
「あ～～～言わんでもええでアリサちゃん。アリサちゃんの分も申請しておくから」
「さすが、持つべきは友達ね。ふふ、でも不謹慎だけど嬉しいわね。

また5人一緒にいられるんだから」
「そうだね」
「うん」
「せやな」
「うん」
アリサの言葉になのは、フェイト、はやて、すずかの４人は笑いながら頷いた

第０９話

「それじゃあ、アリサちゃん、すずかちゃん。１週間後に迎えに来るね」
なのは、フェイト、はやての短いが充実した休暇が終わり、３人は悠斗とリインフォースを連れて現在暮らしているミッドチルダへと戻ろうとしていた
「ええ。それまでに準備は済ませておくわ色々とね」
「恭也さん、ノエルさん、月村の護衛お願いします」
「お任せください。悠斗様の代わりしっかりと務めさせてもらいます」
「任せておけ」
「そんじゃあ、月村、バニングス、１週間後にまた会おうぜ」
「ええ。すずかがいないからってフェイトに手を出すんじゃないわよ？」
「出すわけないだろうが」
アリサの発言に悠斗がため息をつきながら答えた。悠斗ははやてが設立した部隊が始動するまで本局で次元漂流者の保護申請をした後、執務官であるフェイトの家で厄介になることとなったのだ。最初は家族の多いはやての家が候補に挙がったのだがリインフォースを迎えると満員になってしまうらしくなのはかフェイトの家となったが、なのはの家は２人で生活するには少し狭いらしく、フェイトの家となったのだ
「しかし、本当に大丈夫なのかハラオウン？そっちも１人暮らし何だろう？」
「家は偶に義母さんや義姉さんが泊まりくるので結構広いの大丈夫です」
「いや、俺が言いたいのはそういうことじゃなくてだな」

「あ～～無駄やで桜井はん。フェイトちゃん天然やから言っている意味解っとらんと思うで」
「天然・・天然か。それは厄介だないろんな意味で」
はやての言葉の聞き、悠斗は頭を抑えた
「？」
「どうしたの桜井君？頭痛？」
「・・・八神、もしかして高町も・・」
「察しの通り天然や」
「はぁ～～～」
「「？」」
悠斗のため息を見てなのはとフェイトが揃って首を傾げた

「それじゃあ、なのは、はやて、リインフォース。私は桜井さんの次元漂流者の保護申請を手伝ってから帰るね」
「うん。じゃあ、1週間後に」
「1週間後に私らが設立した〝機動六課〟の基地で会おうな」
本局にやってきたフェイトはなのは、はやて、リインフォースに別れの挨拶を告げると悠斗を連れて事務へと向かいそこで次元漂流者の保護申請を行い、悠斗はフェイトに言われた通りに記入していき、申請はスムーズに終わった
「手伝ってくれてありがとな。おかげで何の問題もなく記入することができたよ」
「これも仕事の一つですから。このままミッドに戻りますが、大丈夫ですか？」

「出来ればハラオウンの家に行く前にデパートによってくれるとありがたいんだが」
「デパートですか？」
「あぁ。着替えを買わなくちゃいけないからな。あっちにいたときは恭也さんのお古を貸してもらっていたんだが、忍さんから〝恭也のお古じゃなくて、ちゃんとしたものを買っておきなさい〟って言われてな。軍事資金も貰った」
「だったら、ミッドに戻る前に両替を済ませましょう」
フェイトは悠斗を連れて外資を両替できる場所に案内し、悠斗が持ってきた軍事金をミッドの紙幣に変えると今度こそミッドへと向かった

「スポーツカーに似た車か。高かったんじゃないのかこれ？」
「確かに高かったですけど、９歳ごろから管理局で働いていてお金は貯金していたので問題なく買えました」
「９歳!?そんな小さいころから働いてたのか!?」
フェイトの運転する車で悠斗はフェイトの言葉に悠斗は驚く
「（ネギまの世界でも修行とはいえネギは１０歳から教員として働いていたが、異世界の職の定義は一体どうなってるんだ？）」
力のあるという理由で働かせる管理局という組織に悠斗は不信感を覚えたがそれを口に出すことはしなかった
「（俺も同じ穴の狢だからな）」

デパートに来た悠斗とフェイトは並んで着替え売り場へと向かう。人と通りすぎるたびに通行人の視線が2人へと向かう
「皆、通り過ぎるたびに私達に事を見てるけど何かあったのかな？」
「（そりゃあ、こんな美人が歩いていれば2度見もするわな～）」
悠斗から見てフェイトはすずか同様、美人である。そんな美人が町を歩けば少し騒がしくなるのも無理もない。自身もその対象に入っている事を悠斗は気づいていない
「（害はそこまでないが見られていていい気分にはならないな。さっさと買うか）」
何度も見られるとうっとおしく感じてくるので悠斗はフェイトを待たせ、手早く服を購入してフェイトの待つ場所に戻ると
「なぁいいだろう？一緒に遊ぼうぜ？」
「ですから、何度も言ってるように私には一緒に来た人がいて、その人を待っているので、貴方たちとは一緒に行けません」
「君みたいな子を待たせてどっかに行くような男なんてほっとおいて俺達と行こうぜ？退屈はさせないよ？」
数人のチャラい男たちにナンパされていた
「（何処の世界にでもいるんだなああいう奴は）おい、俺の連れに何か用か？」
悠斗はナンパをしているチャラ男たちに軽くため息を吐くと近づき声をかける
「桜井さん」
「悪い、待たせたな」
「ああ？なんだよお前は？」
「彼女が言っていただろう？一緒にこのデパートに買い物に来た奴だよ。俺が穏便なうちにさっさと帰れ」
「はぁ？まるで俺達に勝てるっていう風に聞こえるんだけどな～～？」
「そう言ってるんだ」
「いいこと教えてやるよお兄さん。俺はな昔ＤＳＡＡで世界代表に

までなったぐらい強いんだよ」
「へぇ～～～～で？それがどうかしたのか？」
チャラ男1の言葉に悠斗はだからと言わんばかりに聞き返す
「どうやら言葉じゃなくて身体で分からせてやらないといけないようだな」
チャラ男1は手の骨と首を鳴らしながら身体をほぐした後、ファイティングポーズをとった。それを見てフェイトは局員の権限を使って止めようとすると、悠斗が手を出すなとフェイトにジェスチャーを送ってきたのでフェイトは渋々引き下がったが、いつでも行動できるようにすることにした
「くらえや！」
チャラ男1の右ストレートが悠斗の顔面目掛けて繰り出される。執務官として多くの次元犯罪者との戦闘を行ってきたフェイトの目から見てもそれなりの速さを持った拳は悠斗の顔に直撃する。騒ぎを見ていた野次馬たちはそれを見て小さき悲鳴を上げた
「へへへ。ケンちゃんのストレートをもろに受けて立っていた奴はいなかったぜ」
「女の前でかっこつけようとするからだ」
チャラ男2と3はかっこつけようと自分達に喧嘩を売った悠斗の末路を笑い、これか目の前にいる美女との逢引に心を躍らせているが
「なん・・・だと？」
悠斗を殴ったチャラ男1、通称ケンは目の前の光景に驚いてる。何事かと思ったチャラ男達が見ると、チャラ男1同様驚く。なぜなら悠斗は指2本でチャラ男の右拳を受け止めていたのだ
「もう終わりか？」
「っ!?おぉおおおおおおお!!」
悠斗の言葉に正気を取り戻したチャラ男は右拳だけではなく左手、両足を使ってラッシュを繰り出すも悠斗は右腕と2本の指のみでそのラッシュをさばいていく
「す、すごい」
その光景を見てフェイトは驚く。チャラ男の戦闘能力はBランク

魔導師とそれほど大差はないだろうとフェイトはチャラ男の動きを見て判断する。だが、悠斗の戦闘能力はそれを上回っている、下手をすれば自分たち以上の戦闘力を持っている可能性もある
「ジェットマグナム！」
チャラ男1は右腕を横に振るって悠斗の右腕を払うと、魔力を込めた必殺の一撃を無防備な悠斗の腹部めがけて放つ。フェイトはチャラ男1の拳に込められた魔力の量と質を見て危険だと判断し、止めに入ろうとするも一足遅く、悠斗が無事であることを祈る
「決まったぜ、ケンちゃんのフィニッシュブロー」
「アレを喰らって立っていた奴は一人もいな・・・」
チャラ男2と3、1は本日2度目の驚きをあらわにする。チャラ男1の繰り出した必殺の一撃を直に受けたというのに、悠斗は微動だにしていなかった
「中々いい一撃だったが、踏み込みが甘いうえに、腰が入っていない。そんなんじゃ自分より格下や自分と同等の相手ぐらいしか倒せないだろうな。ちょっと見本を見せてやるか」
悠斗はチャラ男1の目を見て、幻想空間へと精神を引き入れた。そして、数秒後
「はぁ、はぁ、はぁ」
肉体に精神が戻ったことにより、幻想空間で受けたダメージが肉体に反映されたのかチャラ男1は膝をついた
「ケンちゃん!?」
「お前一体、ケンちゃんに何を!?」
「やめろ!!」
悠斗に殴りかかろうとしたチャラ男2と3を1が止めた
「・・・俺達の叶う相手じゃねぇ。行くぞ」
そう言うとチャラ男1は悠斗に一礼すると立ち去って行った。1の行動に戸惑いながらも2と3は1の後を追ってこの場から去っていた
「大丈夫だったかハラオウン？何かあいつらにされてないか」
チャラ男達が去ったのを確かめると悠斗はフェイトに近づき安否

を確かめる
「大丈夫です。それで、服は？」
手ぶらで戻ってきた悠斗にフェイトが尋ねる
「異空間に収納してる。腹も減ったし、ここにあるレストランで食べていこう。迷惑をかけたからおごる」
「え？で、でも」
「いいから、いいから、行くぞ」
そういうと悠斗はフェイトの手を取ってその場から離れ、レストランエリアへと向かっていった

第１０話

デパートのレストランで遅めの昼食をとった悠斗とフェイトはウィンドウショッピングを少しした後、フェイトが借りているマンションへと赴いた。そして

「・・・随分と高そうなマンションだな」

フェイトが住んでいるマンションの外見を見て悠斗はしばしの間、固まってしまった

「家族がセキュリティのしっかりとしたところで暮らしなさいって言われたんです」

「まぁ、女の子の一人暮らしは何かと危ないし、家族としたら不安になるからな」

そういう経験があった悠斗はフェイトの家族の気持ちが痛いほどわかった

「そうなんですか？」

「そうなの」

フェイトの問いに悠斗は即答で返答した。車を駐車場に駐車させるとフェイトの先導の元、悠斗はフェイトが住んでいる階まで行き、部屋の中に案内された

「中もずいぶんと広いな。２人ぐらい一緒に住める広さだ」

「最初に話したかもしれないですけど、母が偶に遊びに来るんです。だから、少し広めのこの部屋を借りたんです」

悠斗は脱衣所、キッチン、ベランダ、トイレなど一通りの場所を教えられた後

「六課に行くまでの間はこの客間を使ってください」

「リビングと一緒で綺麗だな。そういえば偶にお家族が止まりに来るって言ってたから綺麗なのも当たり前か」

「私は調べ物をしなくちゃいけないので何かあったら呼んでください」

「おう」
悠斗に一礼するとフェイトは自室へと入っていった
「さて、荷解きを始めますか」
悠斗はアイテムボックスからデパートで買った服等を取り出し、作業を始める。作業は３０分もしないで終わり、それを終えると悠斗は紙とペンを取り出し、書き始める
「(いざというときのことを考えてあの2人には何かしらの防衛手段が必要だ。〝常に身に着けていれる〟。このことに一番適している物はアクセサリーを置いて他にない)」
悠斗はフェイトとウィンドウショッピングをしていたのは何も腹ごなしも兼ねてではなく、何かあった時のためずずかとアリサが自身の身を守れる手段があったほうがいいと思ったからだ
「(八神は大丈夫と言っているが、この世の絶対は存在しない)」
悠斗のその時が起こったことを想定して手段のないすずかとアリサの為に見た目はアクセサリーだが、その実は魔導具。それを作ることを決めたのだ
「・・・こんなところかね?」
悠斗はノートに描いたアクセサリーの試し書きを見て及第点とした
「あと付与する能力、魔法、技能も考えないといけないな。まぁ、それはおいおい考えればいいか」
アクセサリーの設計図が描かれたノートを机に置き、客間から出た悠斗はキッチンに行き、お湯を沸かしてさきほどフェイトから教えられた棚から緑茶の粉末を取り出し、カップに入れて沸いた湯を注ぐ
「あち」
息を吹き、冷めしながらお茶を飲んでいると、閉じられた部屋を見る
「まだ調べものしているのかね?」
さっきまでの自分同様、部屋に籠って調べ物をしているであるフェイトを想像し、1週間世話になる身として茶でも淹れようと思いお茶を淹れて部屋に行く

「ハラオウン？今大丈夫か？」
悠斗はドアを数回ノックして入ってもいいかの了承を得ようとするも、返事が返ってこなかった
「（寝てるのか？）」
返事が返ってこないことに不審に思いながらも数回置きにノックと声をかけることを繰り返すも返事は返ってこず、心配になった悠斗は
「入るぞ」
勝手に女性の部屋に入るのは失礼だと解りつつも悠斗はドアを開けて部屋にはいる。部屋の中では、パソコンに似た端末を使い、さらに複数のディスプレイを使用して調べ物をしているフェイトの姿があった
「（凄い集中力だ。こりゃあ、俺の声もノック音も届かないわけだ）」
悠斗は苦笑いしながらフェイトに近づき
「少しこんの詰めすぎないんじゃないか？」
空いている手でフェイトの眼前を一瞬さえぎるように下から上へと上げながら声をかけた
「きゃ!?さ、桜井さん!?ど、どうして、私の部屋に」
「どうしたも何もずっと部屋に籠って調べ物をしていただろう。一息つかせようと何度も声をかけたんだが反応がなくて心配になってな、失礼だとは思ったが勝手に入らせてもらった。ほい」
悠斗は慌てるフェイトに自分が寝室にいる理由を話すと少し冷めたお茶を机に置く
「こんの詰めすぎは体に良くないからな。少し休め」
「あ、ありがとうございます」
フェイトは悠斗が持ってきたお茶を飲む
「これって、ハチミツレモンですか」
「そうだ。疲労回復に加え、リラックス効果もある。さらに美容にも良いって言われてる」。まぁ、美容に関してはハラオウンには必要ないかもな」
「どうしてですか？」

「どうしてって?今でも十分美人だからな」
どうしてかわからないフェイトに悠斗が答えると
「び、美人ですか?わ、私が?」
「いや、誰がどう見て美人だろう。今日のデパートで歩いていてすれ違うたびに人がこっちを見ていたのだって、あのナンパ3人組にナンパされたのだってハラオウンが美人だからだぞ?」
「わ、私なんて、なのは達に比べたら」
「確かに高町達も美人だが、ハラオウンもあの4人に劣らずの美人だと俺は思うがな〜」
悠斗は自身の正直な感想をフェイトに伝えた
「お茶も渡したことだし俺は戻らせてもらう。いつまでも年頃の女の子の部屋に入ってるわけにもいかないからな。それと1つ、謙虚であることはハラオウンのいいところなんだろうが、もう少し自分に自信を持ってもいいと俺は思うぞ?」
言うと悠斗はフェイトの部屋から出て行った。対するフェイトは家族や親しい男友達である人以外から美人だの綺麗等と言われたことが頭に残り、集中することができず調べ物は全くといっていいほどはかどらなかった

第11話

悠斗がミッドチルダに来た日の翌日、転移というなれない移動に思いのほか疲れていたのか普段より遅めに起床した悠斗は着替えてリビングに行ったが、フェイトはおらず、変わりにテーブルの上に書置きが置かれていた

「〝調べ物が調べ終えなかったので地上本部に行って調べてきます。簡単なものですが、朝食と昼食は準備しておきました。よかったら召し上がってください。〟っか」

書置きを読んだ悠斗はキッチンにいき、冷蔵庫を開けるとフェイトが作った料理がラップに包まれて置かれていた

「何処が簡単だよ。それなりに手を込んで作った料理ばかりじゃねぇか」

用意された料理を見て悠斗がぼやく

「せっかく用意してくれたんだし食べるか」

悠斗は冷蔵庫からフェイトが用意してくれた料理を取り出し、レンジで温める

「いただきます」

朝食であろうすべての料理を温め終えると、悠斗は作ってくれたフェイトに感謝を意を込めて言葉を紡ぎ、料理を口にする

「おー・うまいな」

料理がおいしいのか悠斗は次々と口にしていき、あることを思い出す

「誰かが作った料理を食べるのは久しぶりな気がするな」

あっという間に朝食をたえらげると悠斗は食器を片付け。今日の予定を考える

「(本当だっら、ハラオウンにここ(ミッド)を案内してもらおうと思ってたんだが、仕事なら仕方ないな。マーキングをして出るっていう手もあるが、ハラオウンがいつ帰ってくるかもわからないし、その

案も却下）っと、なると別荘で昨日、デッサンしたアクセリー型の魔導具を作るとするか。それに、あれの手入れもしておきたいし」

「ただいまー」
地上本部での調べ物を終え、家に戻ってきたフェイト。そのまま部屋に戻って執務官の制服から私服へと着替え、リビングに行くが、悠斗はいなかった
「客間かな？」
リビングにいないので貸している客間にいるのかと思い部屋に赴いたが、そこにもおらず洗面所、トイレなども見に行ったが悠斗は何処にもいなかった
「何処に行ったんだろう？靴は玄関にあったから家にいるのは確かなんだけど」
フェイトは家のどこにもいない悠斗が何処にいるのか不審がる
「（そういえばまだベランダはまだ見てなかったっけ）」
フェイトの借りているこのマンションにはそれほど広くはないがベランダがあり、天気のいい日にはそこで日光浴をすることが出来るのだ
「・・・これは？」
フェイトはベランダに置かれている何処か南国ビーチを思わせる風景と大きめの家が模型されたボトルハウスを見つけ唖然とする
「こんなの置いてたっけ？」
身に覚えのない物にフェイトが不安がっていると〝カチ〟という音が聞こえ

「え？」
フェイトの姿が消えた。そして、フェイトが次に見た光景は
「え、え、えええええ!?」
青い空、白い雲、潮の香りが漂う南国の島だった
「この風景・・もしかしてここはあのボトルハウスの中？」
驚くもすぐに冷静になって状況を確かめていると、目の前の空間が歪んで1人通れるような穴が出来上がり、そこから
「誰が入ってきたかと思えばハラオウンじゃないか。まぁ、当然と言えば当然か。部屋の住人は1人だけなんだから」
作業服を着た悠斗が出てきた
「さ、桜井さん？」
「おかえりハラオウン。お仕事ご苦労さん。そして、ようこそ俺の別荘へ」

「じゃ、じゃあ、本当にここは」
「ああ、ハラオウンがベランダで見たボトルハウスの中さ」
ダイオラマ球にやってきたフェイトを球内にある家まで連れてきた悠斗はここが何処なのかを説明していた
「俺のいた世界でも普通とまではいかないがそれなりの権力を持った人達は持っている物だ、主に激務後、ゆっくりと休むためにな」
「こんなものを作れるだなんて桜井さんのいた世界は魔法が発達した世界だったんですね」
「もともと発達していたが、どんどん発達していってたな。入った後から言うのも何だが、今日一日は出れないからな」
「え!?じゃ、じゃあ、明日の夕方まで出れないってことですか!?私、明日大事なようがあるんです!?」

明日の夕方まで外には出れないとないと知ったフェイトは凄い剣幕で悠斗に詰め寄る
「どう、どう。確かハラオウンは地球、日本に住んでたんだよな？浦島太郎っていう昔話読んだことないか？」
「読んだことは確かにありますけど」
「ここはなその話に出てくる竜宮城と真逆の場所なんだ」
「真逆？」
「そ、ここで1日過ごしても外では1時間しか経ってないんだ。だから明日の大事なようとやらには問題なく行ける」
「っほ」
明日の用事に問題なく行けると解ったフェイトは安心した表情になった
「だから、今日一日ここでゆっくりして疲れをとっていくといい」
「はい。それと中を案内してもらってもいいですか？」
「構わねぇぞ」
悠斗は立ち上がり、フェイトに家の中を案内しはじめた

第12話

「ここ（ダイオラマ球）には色々な施設があるんですね」
不慮の事故から悠斗の別荘にやってきたフェイトは悠斗の案内の元、別荘内にある鍛練場、医務室、プール、図書室、遊技場、等々、様々な施設を案内されており、今度は
「ここは作業場だ。ここでアクセサリーや武器などを作ってる」
悠斗の作業場に案内された。そこには刀剣、盾、籠手、銃等といった武器と製作、または製作中のアクセサリーが置かれていた
「桜井さん」
「解ってる。これはこっちの世界では使用禁止にされている物だって言いたいんだろう？持っていくとしても盾だけだ」
フェイトの言いたいことを察した悠斗は理解してるといった口調でフェイトを論す
「それと、頼んでいた件は・・・」
「大丈夫です。六課に移動した日に渡しの補佐をしていた子に非殺傷の処置をするようお願いします」
「助かる。そうだ、飾っているアクセサリーの中から気に入ったものを1つ選んで持って行っていいぜ」
「え、でも」
「遠慮しなくていい。俺の無茶な注文を受けてくれた礼だ。それに、装飾品っていうのは飾るためじゃなく身に着けるためにあるんだからな」
「じゃ、じゃあお言葉に甘えて」
フェイトは悠斗の言葉に甘え、飾られているアクセサリーを見ていく。指輪、ブレスレッド、ネックレス、イヤリング等といった様々なアクセサリーの中でフェイトが選んだのは水晶を雷のような形に加工したネジ式のイヤリングだ
「じゃあ、これを貰ってもいいですか」

「おぉ、それか。それは俺が作った中でも満足のいく出来の1つだ。渡す前にちょっと貸してもらえるか」
「はい」
「すまないな」
フェイトからイヤリングを受け取った悠斗は囁く程度の声量でイヤリングに防水、対劣化等の処置を施し、それを終えるとフェイトに渡す
「あのこの図面って」
「それは、月村とバニングスに渡そうと思ってるアクセサリーの図面だ」
「アリサとすずかにですか？」
フェイトは悠斗がデッサンした太陽と月を模したイヤリングとネックレスを見る。何となくではあるが2人にあったデザインだとフェイトは思った
「でも、どうやって作るんですか？見たところ、それ用の機材は見当たらないんですけど」
「俺の作成法は特殊でな。色を付ける用の機材とアクセサリーを作るための材料だけあれば十分なんだよ」
「？」
「実際に見れば分かる」
悠斗は魔方陣の描かれた一枚の紙を作業机に敷き、その魔方陣にアクセサリーを作るための材料を乗せ
「錬成」
つぶやきと同時に魔力を紙に込めると紙に書かれている魔方陣が輝き、輝きが収まると紙の中央には翼を模したアクセサリーが出来上がっていた
「とまぁ、こんな感じだな」
悠斗は出来上がったアクセサリーを手に取って、出来を確かめる
「魔法を使って、アクセサリーを作った？」
「〝錬成〟魔法と言って。使用者のイメージしたものを作ることが出来る魔法だ。この魔法にかかれば武器だろうがアクセサリーだろ

うが一瞬で作ることが出来る」
「そんな魔法が合ったなんて」
「世界が違えば、魔法も違うってことだ。この〝錬成魔法〟だって、作るための素材がないと使うことはできないし、作るための明確なイメージがないと出来ても中身が入ってないただの張りぼてになっちゃうからな。ついでに言うと見せた〝錬成魔法〟は俺がいた世界ではありふれた魔法何だそうだ」
「この世界ではレアスキルに入る魔法だと思います」
フェイトは悠斗が今見せてくれた方法で作ったであろうイヤリングを眺めながら話す
「言っただろう、世界が違えば魔法の価値観も違う。ほい」
悠斗はイヤリングと同じように防水、対劣化などの処置をアクセサリーに施すと、それをフェイトに渡した
「それもやるよ。髪留め用に作ったものだから。仕事、日常関係なく使えるはずだ」
「あ、ありがとうございます。あの着けてもいいですか？」
「構わないぞ。その髪留めはもうハラオウンの物だからな。必要なら鏡も渡すが」
「お願いします」
フェイトは悠斗から借りた鏡を使って翼を模した髪留めを左側頭部に着け、さらに貰ったイヤリングもつける
「ど、どうですか？」
「・・・凄い似合ってる。あと、金の髪に銀の髪留めの組み合わせがここまでいい物だったなんてな～～。カメラがあったら1枚、いや何枚か写真を撮っていたな」
「あの、これと同じものをもう1つと男の子向けのアクセサリーを作ってもらってもいいですか」
「ん？それは別に構わないが」
「できれば、髪留めはワイン色にしてくれると嬉しんですけど」
「ワイン色ねぇ。解った、塗装した色が乾くまで数日かかるが、ここなら問題ないだろう。誰かにプレゼントでもするのか？」

「はい。私が保護している女の子にあげようと思って」
「もしかして明日の用事っていうのは」
「はい。私が保護した2人の子達と会う日です」
「成程、だったら誠心誠意込めて作らせてもらおう。ちなみに男の子の年齢は？」
「9歳です」
「9歳の男の子か。髪留めは必要ないから、頼まれた物と同じ物でネックレスタイプにしよう。色は青でいいかな」
フェイトからのお願いを受託した悠斗は作るアクセサリーの案を瞬時に考え、錬成魔法で2人分のアクセサリーを作り上げると、別室で塗装の作業を数回に分けておこなった。アクセサリーの塗装を終えた悠斗はフェイトと共に外のテラスでお茶を飲んでいた
「俺は後数日間こっちで過ごすつもりだが、ハラオウンはどうする？」
「頼んだ品が出来上がるまでここにいたいです」
「俺は別に構わないが着替えはどうするんだ？シャツやズボンぐらいなら貸すことは出来るがさすがに下着はないぞ」
「あ」
「今日一日ぐらいなら大丈夫だろう。明日になったらいったんここから出て、2～3日分の着替えをもってまたくればいい。それとこれを渡しておく」
悠斗はフェイトに1個のリングを差し出す
「これは」
「それはこのダイオラマ球に入っていても歳をとらなくするための指輪だ。数日だけだから問題ないとは思うが念のために着けて置くことをオススメする」
「・・・・・桜井さん」
「ん？」
「こんなことをお願いするのは変かもしれないんですが、私と戦ってくれませんか」
「・・・・はい？」

フェイトの予想外なお願いに悠斗は少しの間思考が停止してしまった

第13話

「すいません、いきなりこんなお願いをしちゃって」
「あ～～気にしなくていいぜ。そりゃあ最初は驚いたけど、俺にとってもこの世界の1級魔法使いの実力を知るいい機会だからな」
ダイオラマ球内にある砂浜で木刀を持った悠斗が普段着から軍服に似た服を着て右手にハルバートに似た魔導杖を持ったフェイトに言う
「しっかし、こっちの世界の杖は変ってるな、アクセサリーかと思っていた物が武器に変わるうえに、服装も変わるなんて」
普段着から今の服、フェイト曰く防護服へと瞬時に変った（その際、眼が良かった悠斗は不可抗力とはいえフェイトの裸体を見てしまったが、心の内にとどめておくことにした）のをみていろんな意味で驚いた
「じゃあ、始めようか」
「あの、その格好で戦うんですか？」
「現時点ではこの格好が動きやすいからな。何だ、何かまずいのか？」
フェイトが防護服に対し、悠斗はジャージ。誰がどう見て戦う格好ではない
「まずくはないんですけど。ちょっと」
「しょうがねぇな」
悠斗はため息を吐くとポケットからパクティオカードを取り出し、登録している服、黒のインナーに黒のスキニーパンツ、白のロングコート、両手にオープンフィンガーグローブ、黒のブーツへと服装を変えた
「こいつは俺の戦闘着なんだが、これなら大丈夫か？」
「ど、どうやったんですか？」
「企業秘密だ」
自分と同じように一瞬で服装を買えたことにフェイトが驚き、尋ね

るも悠斗は秘密だと言い、５００円玉を取り出す
「この硬貨が落ちたら開始ってことで」
「解りました」
「んじゃあ」
フェイトの了承を得た悠斗は５００円玉を上へと弾く。弾かれた硬貨は回転しながら下へと落ちていき、砂浜に落ちたと同時に、悠斗はフェイトに接近し、フェイトは空へと飛びあがった
「プラズマランサー・・ファイヤ！」
空に上がり、悠斗の初撃の一太刀を躱したフェイトは８つのフォトンスフィアを自身の周りに生成し、そこから槍のような魔力弾を悠斗へと放つ。それに対し悠斗は９つの無詠唱魔法の射手・雷の矢ｖｅｒで放たれた魔力弾を相殺させ、残りの１矢はフェイトへと向かった
「っ!?（重い!?）」
『Ｂｌｉｔｚ　Ａｃｔｉｏｎ』
矢を弾こうとバルディッシュ（以降ＢＤ）を振るうも見た目に反して矢は重く、はじき返せないと瞬時に理解したＢＤが超高速移動魔法を独断で発動し、矢から離れた
「ありがとうバルディッシュ」
『Ｎｏ　Ｐｒｏｂｌｅｍ．Ｓｉｒ．　Ｉ　ｔｈｉｎｋ　Ｉ　ｓｈｏｕｌｄ　ｇｏ　ｓｅｒｉｏｕｓｌｙ　ｈｅｒｅ（問題ありません。サー。ここは本気でいくべきかと思います）』
「そうだね」
ＢＤの言葉にフェイトは頷く
「（喋る杖・・か。意思があるから独自の判断で適切な行動を行い所有者を助けるか。中々面白いな。それにハラオウンの雰囲気が変わった）」
悠斗はフェイトの纏う空気が変ったことに気づき、笑みを浮かべると、瞬動で一気にフェイトの背後へと移動し、木刀を振るう
『Ｂｌｉｔｚ　Ａｃｔｉｏｎ』
だが、ＢＤが再び発動した超高速移動魔法で悠斗の一閃は空を切る。悠斗はそれに慌てることなく木刀を後ろに向かって振ると、フェ

イトの魔導杖をぶつかった
「背後から奇襲をかけるならもう少し気配を消さないといけないぜ？じゃないと強い奴にはばれちまう」
悠斗は木刀を振り切って、フェイトの魔導杖を弾き飛ばすと上段で構えると木刀の剣先に氣を集中させ
「奥義　斬岩剣」
フェイトめがけて一気に振り下ろした。それに対し、フェイトはシールドタイプの魔法障壁を張って悠斗の木刀での一撃を受け止めるが
「ふん！」
〝気合一閃〟、障壁はあっという間に砕け散る。悠斗はすかさず木刀を振り上げ追撃を行うも、フェイトはいち早くその場から離れ
「バルディッシュ」
『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．Ｃｒｅｓｃｅｎｔ　ｆｒｏｍ』
取り付けられているカバーがスライドすると、刃の部分が上に傾き、フレームのようなものが現れ、そこから圧縮した魔力の刃が生成された
「（ハラオウンの魔力が上昇した？）」
「行きます」
フェイトは大鎌となった魔導杖を両手で持ち、猛スピードで悠斗に近づく
「（氣で強化しているとはいえ、あれはまずいな）」
直感で大鎌の刃を受け止めるのはまずいと判断した悠斗は刃ではなくフレーム面に木刀をぶつけることで刃との接触をなくした
「はぁ！」
大鎌は使いにくい印象を持つ武器が悠斗の見解だ。だというのにフェイトはさっきの魔導杖と同じような巧みな手さばきで大鎌を振るっていく
「クレッセント・・セイバー！」
フェイトは大鎌を振るい、生成していた魔力刃を悠斗へと飛ばす。悠斗は回転しながら飛来する刃を木刀で上へと弾き飛ばし

「斬空閃」
お返しと言わんばかりに氣の斬撃をフェイトへと飛ばす。フェイトは新たに生成した魔力の刃で斬撃を斬ると、悠斗に接近し大鎌を振るう。悠斗は大鎌の一撃を木刀で弾くとフェイトに向け木刀を振り下ろす、フェイトは体に纏うタイプの魔法障壁で受け止めると、大鎌を悠斗へ向け
『Ｐｌａｓｍａ　Ｌａｎｃｅｒ』
そこから単発の魔力弾を至近距離から悠斗へと放つも悠斗はまるでそれが来るのが解っていたかのように身体を海老のように反らしてそれを躱すと、木刀の柄頭でフェイトの腹部に叩き込んだ（無論、痕が残らない程度の強さで）
「っ～!?ロック！」
腹部の痛みに耐えながらフェイトは片手を悠斗に向け、言葉を口ずさむと、悠斗の両手、両足にキューブ状のものが浮かび上がり、動きを封じ込める
「（拘束系の魔法か。いつの間に？）」
「トライデント・・・」
ＢＤが大鎌から魔導杖に戻り、スライドカバーが２回スライドし、フェイトの前に魔方陣が浮かび上がり、左手に収束された魔力球が生成される
「スマッシャー！」
そして、その魔力球を魔方陣に向け放つ。放たれた魔力球は魔方陣に当たると三つ矛のビームとなり悠斗へと向かう
「ふぅ～～～・・・・ぬん！」
悠斗はゆっくりと息を吐き、身体の力をほんの一瞬だけ抜き、数秒後に力を再び入れて腕の拘束魔法を力づくで壊し、木刀を両手で握る。そして、
「我流奥義　斬魔剣・改」
斬魔剣、本来ならそれは妖怪や悪魔と言った〝魔〟を斬るためのものだが悠斗のたゆまぬ努力の結果、魔法を斬ることも可能させたのだ。木刀を素早く３回振るい、３方向からくる魔力砲を斬った

「・・・嘘」
目の前で起きた現象にフェイトは驚き動きを止めた
「ここまでにしておこうか。この世界の魔法使いがどういうものなのか知ることが出来た。そっちも、大まかだが俺の実力も解ったんじゃないか？」
「はい。でも桜井さん、全然本気じゃありませんでしたよね？」
「それはハラオウンもだろう？汗もかいたことだし、風呂に入ってくるといい、ここの風呂は露天で海を見ながら入れるぞ」
「それは楽しみです」
悠斗はフェイトを風呂場へと案内する。その際、フェイトに入らないのかと聞かれ、男女の隔てはなく混浴何だと伝え、足早に去っていった

１４話

日はあっという間に過ぎ、はやてが設立した部隊〝機動六課〟の始動する日となった
「これがはやてちゃんの作った」
「夢の部隊なのね」
はやての頼みでアリサとすずかの迎えに行っていた悠斗は２人が持ってきた荷物を車から降ろす
「それじゃあシグナムさん、俺は２人の荷物を部屋に置いてくるので２人の案内をお願いします」
「任された」
「悪いわね桜井」
「気にすんなこれも仕事の内だ」
謝ってくるアリサに気にしていないと言いながら悠斗は荷物を持ち隊舎へと入っていった
「えっと、２人の部屋は・・・ここだな」
あらかじめ教えられていた部屋の番号を探しながら進み、目当ての部屋に着いた悠斗は借りていた鍵を使ってロックを外し、中へと入る
「俺が使わせてもらっている部屋と同じぐらいの広さだな。八神のことだから、もっと大きな部屋を用意すると思ってたんだが」
「主も最初はそうしようとしたらしい」
「リインフォース」
「久しぶりだな桜井。それと私のことはアインスと呼んでくれ。私の名と意志を継いだ者がいるんだ。話の続きだが、主も最初は２人の為にもう少し広い部屋を用意するといったんだが、バニングスが『友達だからって優遇するようじゃ、部下に示しがつかないから、私とすずかの部屋はアンタの部隊に所属する局員と同じような部屋で構わないわ』と言ったらしい」

「確かに最初から職権乱用してたんじゃ部下に示しがつかないわな」
そういうと悠斗は足早に部屋から出る。私物が何もないとはいえ女子の部屋、長居するのはだめだと思ったらしい
「そういえばそろそろ部隊発足のあいさつの時間だが、アインスは行かなくていいのか？」
「私は正規の局員ではなく桜井やバニングス、月村と同じで外部協力者となっているのでな挨拶場に出る必要はないと主に言われた」
「そうか」
「桜井はこの後どうするんだ？」
「施設内を回りながら訓練場に行ってみるつもりだ。ハラオウン曰く、見たらきっと驚くって言われてな。アインスは？」
「私はフォワードメンバーの訓練に参加する予定だ。何かあった時に主や貴方を守れるように戦闘の感を取り戻しておかないといけないからね」
「だから、動きやすい服をしていたのか」
悠斗はリインフォースが来ている服を見て納得した
「思ったんだが、魔法生命体だったか？それも成長するのか？」
「いいや、私達の見た目が変わるということはない」
「つまり、漫画とかで言う永遠の１７歳みたいなもんか。世の中の女性がそれを知ったら羨ましがれること間違いなしだな」
「そろそろ訓練の時間だ。また後で会おう」
「おう、頑張れよ～」
訓練の時刻に近づいていることを確認し、訓練場に歩いていくリインフォースを見送った悠斗は機動六課の探索を始めることにした

「やってるね～～」
六課内にある施設を一通り見て回った悠斗は訓練場へとやってき、

訓練しているリインフォースと前線部隊に所属している3人の少女と1人の少年を見る
「桜井さん」
「悠斗さん」
「よぉ、高町、月村。そして君は・・」
「初めまして、シャリオ・フィニーノです。皆からはシャーリーと呼ばれています。フェイトさんからの頼みで桜井さんの刀の非殺傷処置をやっています」
「桜井悠斗だ。よろしく頼む。それにしても・・」
シャーリーと挨拶を交わした後、悠斗は訓練場で薬剤のカプセルを大きくしたものに苦戦している3人の少女と1人の少年を見る
「アインスは難なく戦っているが、他の4人は浮いている相手との戦い方が出来てないな」
「皆、ああいうタイプの敵と戦うのは初めてですから」
「初めてか。初めてならしょうがないか」
なのはの言葉に悠斗は初めてなら仕方ないと受け入れた
「桜井さんもどうですか?」
「そうだな。これから戦うかも知れない相手だ。1度戦っておくか」
「それじゃあ、今やっている訓練が終わったらでいいですか?」
「あぁ、それで構わない」

「皆〜一旦集まって」
それから5分が経ち、なのははすべての仮想エネミーの破壊を終えたリインフォースとフェワードメンバーを呼んだ。なのはの呼ばれ、リインフォース以外の4人は疲れているのかフラフラしながらなのはの元までやってくる

「はい、お疲れ様。最初に比べるとうまく動けてたよ」
「「「あ、ありがとうございます」」」
「あの、なのはさん、すずかさんの隣にいる人は？発足式にはいなかったと思うんですけど」
白いリボンを頭に巻いたボーイッシュな少女が悠斗を見ながらなのはに尋ねる
「彼は・・・」
「自分で言うんで言わなくていいっす。んぅ！初めまして、俺は桜井悠斗。ここにいる月村とリインフォース、そしてバニングスと同じで民間協力者として機動六課に所属している者だ。普段はいろんなところを手伝っているから合わないだろうが、戦闘が起こった場合、一緒に行動することになるからその時はよろしくな」
「桜井さんの自己紹介も終えたことだし、みんなも挨拶をしておこうか。一緒に戦うことになる人だからね」
「はい。スバル・ナカジマですよろしくお願いします」
「ティアナ・ランスターです。よろしくお願いします」
「エリオ・モンディアルです。よろしくお願いします」
「キャロ・ル・ルシエです。こっちは家族のフリードです」
『キュクル～～』
3人の少女　スバル、ティアナ、キャロと1人の少年　エリオ、幼竜　フリードが悠斗に挨拶をする
「よし、みんなの挨拶も終えたことだし、桜井さんの訓練といこうか」
「おう」
悠斗はアイテムボックスから木刀を取り出し、肩に担ぎながら訓練場に行こうとすると
「桜井さん、その格好でするんですか？」
「そのつもりだけど何か問題でもあるのか？」
「問題はないんですけど、汚れちゃうかもしれないですから」
「成程、なら」
なのはの言葉に納得した悠斗は服を掴んで一気に脱ぐ

「「「「きゃあああ!?」」」」
いきなり服を脱いだことに女性陣が驚き、悲鳴を上げながら目をそらすが
「あの、皆さん、桜井さん裸になってませんよ?」
「「「「「「・・・・え!?」」」」」」
幼くとも男性だったエリオは悠斗が裸になっていないことを告げる。エリオの言葉を聞いた女性陣はおそる、おそる、顔を覆っていた手を離すと、エリオの言う通り、支給された訓練着を着た悠斗がいた
「さ、桜井さん?もしかして普段着の下に訓練着を着ていたんですか?」
「知り合いに忍者の子がいてな。その子に素早くかつ、的確に着替える方法を教えてもらったんだ」
「1流マジシャン顔負けの技術ですね」
悠斗の新たな一面を知ったすずかは何処か嬉しそうに語った

第15話

「なのはさん、桜井さんってどれぐらい強いんですか？」
悠斗による露出事件（未遂）から何とか立ち直ったスバルはシャーリーと共に訓練の設定をしているなのはに尋ねる
「う～～ん、実のところ私もそこまで知らないんだよね。少し前に休暇を取って家に帰ったときにお兄ちゃんと互角に剣を打ち合っていたから剣術で言えばシグナム副隊長以上だっていうことは解ってるんだけど」
「私は自分達と互角、またはそれ以上だってフェイトさんから聞きました」
フェイトの補佐を行っていたからかシャーリーがなのはの話に付け加える
「「フェイトさんと互角」」
エリオとキャロは新人の中でフェイトとの付き合いが高く、ある程度だがその強さを知っているため互角に戦える悠斗に驚き、特にエリオはどこか尊敬のまなざしになった

「あれが異世界から来た次元漂流者の男か。見た感じ何処にでもいるひょろい男って感じがするが」
「私も先ほどあった時、同じことを思ったが、それは間違いだった。服越しで分からないがかなり鍛えられている。そして・・・」
「そして？」
「我らと同じ匂いを感じた」
訓練場を一望できる場所からシグナムと1人の少女が新人たちの訓練を覗いていた

「あたしらと同じ匂い？」
「・・・・血の匂いだ」
「っ!?」
シグナムの話を聞いて少女　ヴィータが目を見開く
「・・・シグナム、頼みがある」
しばしの間考えたヴィータはシグナムにある頼みごとをした

『桜井さんこちらの準備は整いました』
「こっちも準備を終えたところだ。いつでもいいぞ」
訓練場に着き、始める前の準備体操を行い終えた悠斗はなのはからの通信に、いつ始めてもいいと伝える
『じゃあ、敵の数は２０体、目標タイムは５分で・・・スタート!』
なのはの合図とともに訓練場にカプセル状ロボット、通称ガジェットが２０体出現する
「近くのやつから壊すか」
悠斗は1体のガジェットに瞬動で近づき、木刀を突きさそうとするが、ガジェットは悠斗の突きを躱した
「（さっき見たのと動きが違う？だが）」
ガジェットの動きの良さに悠斗は一瞬だけ驚いた悠斗だったが、手首をひねって木刀の刃の部分を上に変え、上へと振るいガジェットを打ち上げた
「（動きからして実戦を想定したレベルの動きだな。確か話では魔法を無効化する機能があるって話だが、俺の魔法は聞くかねぇ？）確かめてみるか、バーナウ・ファー・ドラグ　火の精霊１９柱、集い来りて敵を射て。〝魔法の射手・連弾火の１９矢〟」
悠斗はフォワードメンバーが訓練しているときになのはからガジェットの性能などを聞いており、自分の魔法もその効果の対象にな

るのかを確かめるべく、火の矢をガジェットに向け放つ。放たれた矢がガジェットにあたる瞬間、２つの間に幕のようなものが展開され、矢を打ち消そうとしたが、何の効果もなく矢はガジェットを撃ち抜いた

「(俺の魔法の無効化は対象外みたいだな)・・・高町、終わったぞ」

『高町、終わったぞ』

「・・・シャーリー、すずかちゃん、タイムは？」

「・・・１分３０秒ジャストだよなのはちゃん」

「タイムだけではどれぐらいの強さなのか計れませんね」

あっという間に終わった訓練を見てなのははシャーリーとすずかにかかった時間を尋ね、２人は結果を報告した

「す、すごい」

「私達の訓練の倍あったガジェットをたった１人で、しかもものの数分で」

「どうするのなのはちゃん？」

「ん～～私が桜井さんと模擬戦をして、直接図るしかないかな？」

『その必要はねぇ』

「え？」

「・・返答がないな。トラブルか？っ!?」
一向に返事が返ってこないことに不審がっていると、殺気を感じとった悠斗は木刀を振るって、何かを斬った
「これは・・・鉄球？」
「木刀で鉄球を斬る・・か。恭也さん並みに規格外な奴だな」
「君は・・」
「あたしはヴィータ。アインスと同じ存在だ」
「そうか、君が守護騎士と呼ばれている者の1人か。んで？俺に何か用か？」
「ちょっと確かめておきたいことがあってな」
空に浮いているヴィータは左手に持っていた長剣を悠斗に投げ渡す。悠斗は左手で長剣を掴み、首を傾げる
「そいつはシグナムの剣だ。無理をいって1回だけお前が使ってもいいよう頼んで貸してもらった。それを使ってあたしと戦え」
『ヴィータちゃん、どういうこと!?』
「うるせぇぞなのは。説教なら後で受ける、今は邪魔すんな」
「・・・・いいぜ。その勝負、受けて立つ」
ヴィータの真剣な表情に何かを感じ取ったのか悠斗はヴィータの頼みを了承し、木刀をアイテムボックス内に収納すると、長剣の柄を握る
「主人以外に使われるのは不服だろうが、この一戦の間だけ付き合ってもらうぜ」
「ヴルケンリッター、鉄槌の騎士ヴィータ、行くぜ」
「そう名乗られたのなら、名乗るのが礼儀だな。神鳴流剣士、桜井悠斗・・参る」

「ヴィータちゃん、聞こえてる？ヴィータちゃん？」
突如として始まった悠斗とヴィータの模擬戦になのはは詳しい話を聞こうとヴィータに声をかけるが返事は返ってこない
「すまないな高町。だが、ヴィータの好きにさせてやってくれないか？」
「シグナムさん」
「「「シグナム副隊長、お疲れ様です」」」
「ヴィータなりに部隊と隊員を思っての行動だ。我らのような騎士は言葉や文字よりも剣を交えたほうがそのものの人なり等、多くのことを知ることが出来るのだ」
「だから、レヴァンティンを貸したのか？」
「あぁ、ヴィータたっての頼みだったからな」
リインフォースの問いにシグナムは滅多に見れないものがみれたと呟きながら真剣な表情で訓練場を見つめる。ヴィータとは別視線で悠斗を見極めるために

第16話

「でやぁあああ!!」
唐突に始まった悠斗とヴィータの模擬試合。小柄な身体から繰り出される強力な一撃を悠斗は左手に持った鞘（氣で強化済み）で受け止めると逆手に持った長剣を振り上げヴィータに攻撃するも、ヴィータは後ろに下がって躱し、バク転すると、ハンマーを薙ぎ払うように振るう。悠斗は上昇して躱すと、長剣を順手に持ち替え、落下の勢いも乗せて振り下ろす
「ちぃ!?」
ヴィータは片手で前に出して盾型の防御壁を展開して受け止める
「甘い！」
悠斗は鞘の持ち手を変えると氣を流して強化し、長剣の峰に叩きつけて威力を上げ、防御魔法を破壊し、硬直しているヴィータに足刀蹴りを行い、地面まで蹴り飛ばした

「ほう、なかなか勉強になる剣の使い方だ。あのやり方ならカートリッジを使わずにガジェットの装甲も斬れそうだ」
模擬戦を見ていたシグナムは自分とは違った剣の使い方をする悠斗の戦い方を見て、自分の戦い方に取り入れてみようかと検討する
「・・・シャーリー、桜井さんから預かっているのって刀だったよね？」
「は、はいそうです。それがどうかしたんですか？」

「刀と長剣じゃ長さも重さも違うから振る速度や間合いが違ってくるの。だけど桜井さんは普通に振るってるの」
「神鳴流は得物を選ばず」
「え？」
アインスの呟いた言葉になのはが聞き返す
「地球にいたときに桜井から聞いたことがある。桜井の使っている流派、神鳴流は銃以外のすべての武器で戦うことが出来るようだ。だからこそ初めて使う将のレヴァンティンであろうと問題なく戦えるということだ」

「（蹴りがヒットする際、自分から後ろに下がって威力を半減させたか。さすがは歴戦の戦士ってところか）」
地面にゆっくりと降りながら悠斗は先程の足刀蹴りを繰り出した際に感じた手ごたえを思い出す。悠斗が地面に着地すると、瓦礫が吹き飛び、そこから８個の鉄球が悠斗へと飛来する
「神鳴流　百花繚乱」
悠斗は氣を込めた長剣を振るって花びらを舞わせながら氣の衝撃波を放ち飛来する鉄球をすべて吹き飛ばした
「でやぁあああああ！」
技を放って硬直状態の悠斗の背後からヴィータがハンマーを振るって攻撃するが、鞘によって防がれてしまう
「アイゼン！」
『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ　Ｒａｋｅｔｅｎｆｏｒｍ』
ハンマーの柄部分が上下にスライドし搭載されているカートリッ

ジが1つ使用され、ハンマーヘッドの片側が推進剤噴射口、反対側がスパイクヘッドへと変わる
「何!?」
「ラケーテンハンマー!!」
普通のハンマーが一転、男心をくすぐる浪漫武器になったことに悠斗が驚いているのをよそに、ヴィータはカートリッジをもう1個使い、噴射口から魔力を噴射して、悠斗ごと、突き進む
「くぅううう!?」
「ぶち抜け!!」
ヴィータは魔力の噴射を一度止め、さらに自身も急停止する。ヴィータによって後ろに後退させられていた悠斗は勢いはそのままで後ろへと吹き飛んでいく。そして、ヴィータは再び噴射口から魔力を噴射、さらに回転を加えながら悠斗へと近づき、無防備な悠斗の腹部に強烈な一撃を与え、廃棄ビルへと打ち飛ばした

「桜井さん!?」
「悠斗さん!?」
ヴィータの一撃でビルに激突した悠斗を見てなのはとすずかが血相を変えて慌てる
「ヴィータのやつ、いくら何でもやりすぎだ」
それを見ていたシグナムもやりすぎだと思い手で顔を覆う
「シャーリー、シャマル先生を大至急呼んできて」
「は、はい!」
悠斗が大けがをしているかもしれないと考えたなのははシャーリーに軍医のシャマルを呼んでくるよう指示を出し、それを聞いたシャーリーは駆け足で医務室へと向かった
「ヴィータちゃん、模擬戦は中止!桜井さんを救助・・・」
なのはがヴィータに悠斗を救助するよう言おうとしたとき、倒壊した廃棄ビルの瓦礫が吹き飛び、訓練着こそボロボロだが無傷の悠斗が

出てきた

「ちょっとやりすぎちまったか？」
悠斗を打ち飛ばした後、ヴィータはやりすぎてしまったと思い、冷や汗を流す
「はやてやなのは達からの説教は覚悟しておいたほうがいかもしれねぇな。取り合えず、気を失ってるあいつを回収す・・」
悠斗の回収に行こうとしたとき、すさまじい衝撃波と共に瓦礫が吹き飛び、中から無傷の悠斗が出てきた
「つな!?嘘だろ」
「男心くすぐる武器を見て気を緩めるなんて俺もまだまだだな」
服についた汚れを払いながら悠斗はぼやく
「な、なんで無傷なんだ!?あの異常に硬いなのはでさえ初めて今のを受けたときはかなりのダメージを与えたんだぞ!?」
「何でって言われてもなぁ～～。まぁしいて言うなら・・・気合い・・かな？」
「き、気合いだあ!?」
「勿論ほかにも理由があるが、あえて言うなら気合いって話だ」
驚くヴィータに悠斗は首を鳴らしながら答えた
「さて、いい1発を貰ったことだし、こっちもお返しをしなくちゃな」
悠斗は長剣を八相の構えで構えると、氣を電気エネルギーに変換させ、長剣に帯電させる
「奥義　極大雷鳴剣」
そして、長剣を一気に振り下ろすと辺り一帯を覆いつくすほどの雷

撃がヴィータを襲った
「ぐううう!?」
バリアタイプの防御魔法で身を覆い、降り注ぐ雷撃に耐えるヴィータ。雷撃の威力にバリアの所々に罅が入り始めるが、ヴィータは魔力を注ぎ込んで破損個所を修復して、何とか耐える
「(この威力の雷撃をいつまでも出すことは不可能だ。雷撃が止んだ時が勝機だ)」
３０秒に渡って降り注いでいた雷撃が止まり、反撃に転じるためヴィータはバリアを解くと
「解放」
いつの間にか雷撃で生まれた爆煙の中を突っきってきた悠斗が目の前におり、その周囲には１５個の火球が停滞していた
「紅蓮拳・烈火」
悠斗は左拳をヴィータへと打ち込む。左拳に連動するように停滞していた火球が悠斗の左拳に集い、拳と共にヴィータに打ち込まれ、ヴィータは声を上げることなく後方の廃ビルまで吹き飛び、激突した
「ふぅ～～～～」
魔法の射手の１発の威力は魔力を込めた拳１発分の威力を持つ。左拳の１発＋１５発分の拳、計１６発分の拳を一気に喰らったことになる
「１６発は多かったか？」
今の一撃のことを少しばかり後悔していると
「よくもやりやがったな」
ボロボロながぴんぴんしたヴィータが怒りの形相をしながら悠斗に突っ込んできた
「はぁ～～まいったな」
模擬戦がまだまだ続きそうだと悠斗が思っていると
『止めなさ～～～～い!!』
訓練場になのはの怒号が鳴り響いた
『今はフォワードの皆の訓練の時間なの！そんなに戦いたいなら後でして!!』

「・・・・・」
なのはの正論を聞いた2人はしばし無言でいると武器を納めた
「お前に言っておきたいことがある」
「どうぞ」
「はやてやなのは達はお前の事を信用しているようだが、あたしはまだお前のことを完全に信用したわけじゃない。変なことをしたら問答無用でぶっ潰す」
「そんなことはしないつもりだが、一応覚えておくよ。これはどうすればいい」
「シグナムに返しておいてくれ。あたしが借りたものだからあたしが返すのが礼儀何だろうが、野暮用がはいるだろうからな」
鞘に納めた長剣を見せて尋ねると自分の代わりにシグナムに返しておいてくれというとヴィータは訓練場を去っていった

第17話

「悠斗さん、大丈夫ですか!?」
ヴィータの少し後になのは達の下に戻ってきた悠斗にすずかが駆け寄り安否を確かめる
「この通りピンピンしてる。シグナムさん、これ。貸していただきありがとうございます」
「それはこちらもだ。いい物を見させてもらった」
シグナムが悠斗から長剣を受け取ると、長剣が光、チェーンの付いた剣のアクセサリーへと変わった
「所でヴィータさんは?」
「ヴィータならあそこで治療を受けながら高町に説教を受けている」
「解ってるのヴィータちゃん、いくら模擬戦だからってあれはやりすぎだよ」
「何もなかったから問題ねぇだろう。むしろのこっちのほうが痛手を負ったっての」
シグナムの目線を追うと、言われた通りなのはがヴィータに説教をしているが、ヴィータはその説教を聞き流していた
「さて、私は仕事があるのでこれで失礼する」
そんな2人に呆れながらもシグナムは気持ちを切り替えると隊舎の方へ歩いていくが途中で止まり、振り返ると
「今度は見るのではなく手合わせを願いたいものだ」
「いいすよ。強い人との手合わせは俺としても願ったりかなったりなんで」
「っふ」
悠斗から手合わせの約束を取り付けれたシグナムは気分よさげに隊舎へと歩いて行った

「悠斗さんって、もしかして戦闘好きですか？」
「ん～～どうだろうな、自分ではそうじゃないかもしれないが、他者から見たらそうなのかもしれないな」
悠斗の問いに苦笑いすると、すずかは予備で持ってきていたタオルとスポーツドリンクを悠斗に渡す
「さ、桜井さん」
「ん？」
すずかから渡されたスポーツドリンクを飲んでいるとスバル、ティアナ、エリオ、キャロの４人が悠斗の話しかけてきた
「どうした？」
「あ、あの、ヴィ、ヴィータ副隊長との模擬戦凄かったです」
「ありがとう。それで、話はそれだけじゃないんだろう？」
「ど、どうやったら桜井さんのように強くなれますか？」
「俺のように・・か。そうだなぁ・・まずは基礎を身に着けることだな」
「基礎・・ですか？」
悠斗の返答に４人が首を傾げる
「何事においても基礎っていうのは大事なことだ。基礎をしっかりとやっていれば応用が利くようになるからな」
『ん～～～』
「はは、言葉だけじゃ解らないか。なら実際に見せたほうがいいかな。高町、この４人借りていくぞ。それとシャーリー、さっきのガジェットを数体ほど用意してくれるか？」
「分かりました。設定はどうしますか？」
「動かない的で頼む。じゃあ、行くぞ」
悠斗はシャーリーに頼みごとをすると４人を連れて再び訓練場へと向かった

「まずはこれだ」
４人を連れて訓練場にやってきた悠斗はガジェットを的に正拳突きを繰り出し、粉砕する
「普通に拳を突き出しただけじゃ今の威力は出せない。踏み込み、重心、力の伝達、引き手による腰の回転、拳の螺旋回転の力を正確に拳に乗せることで今の威力を出せる」
悠斗は４人に解るようにゆっくりと動きながら一連の動きを教える
「最初はゆっくりと正確にやる。慣れてきたら少しづつスピードを上げて行くのがベストだ。そして、今の動きが自然と出来るようになれば」
悠斗はガジェットに背を向けると、空に向かって拳を突き出し、後ろに引いて拳の肘でガジェットを粉砕した
「今みたいなことが出来るようになる。何せ原理は最初に見せた正拳突きと同じだ。ただ違うのは踏み込み、力の伝達を拳ではなく肘のほうに伝えただけだ」
驚く４人に悠斗は原理を教える
「す、すごい」
４人の中で拳や蹴りを主体として戦うスバルは悠斗の一連の動きに感服する
「今は拳を使って見せたが、槍でも同じことが出来る。だが、それをするには基礎をしっかりと身に着けることが大前提だ」
「あの桜井さん、私やキャロはスバルやエリオとは戦い方が違うので必要な・・・」
「基礎っていうのは、体力も含まれている。どんなに優れた技術を持っていても身体が付いてこないのなら意味はない」
ティアナが自分の思ったことを言い切る前に悠斗が基礎とは今の動きだけでなく体力も含んでいると伝える
「まぁ、動きだけを見るなら必要ないかもしれないな。俺が言いたかったのはどんなことでも基礎が大事ってことだ」
『皆～～、そろ揃訓練を再開するよ～』

４人に伝えたかったことを伝え終えると丁度いいタイミングでなのはから訓練再開の通信が届いた

「訓練が始まるようだから俺は失礼するな。頑張れよ～～」

４人にエールを送ると悠斗は訓練場を後にし、アリサのことが気になったすずかと共に隊舎まで戻ていった

第18話

「Aランチお待ちどうさま」
「桜井さん、次、Bランチ3つお願いします」
「あいよ」
務めている者が一斉にくる昼時。機動六課の食堂の厨房で悠斗が複数の作業を同時に行いながら料理を作っていた
「桜井さん、ソースの味見を」
「どれ・・・・塩と胡椒を少々入れて醤油を一滴入れてください」
「はい」
「桜井さん、ステーキ定食2つ入りました」
「冷蔵庫から肉を持ってきて、みじん切りにして載せている玉ねぎと分けて置いておいてくれ」
「解りました」
本来ならヘルプである悠斗が職員に指示を出すことなどありえないのだが、初日のヘルプで悠斗の高い技術力を見た厨房の料理長が自分と同じ立場で職員に指示を出し、調理場を切り盛りして欲しいと頼まれたのだ
「Bランチ3人前、上がり」

「ひゃ～～～すずかちゃんやアインス、料理長から聞いとったけどほんまに凄いな～～」
調理場が見える席に座って、厨房を切り盛りしつつ次々と料理を作っていく悠斗を見てはやてが呟く
「圧巻だね。フェイトちゃんの家にいたときもあんな風だったの

？」
「うんん、普通だったよ」
「多分、仕事モードに入ってるんだと思うな。家にいたときも厨房ではあんな感じだったよ」
「圧巻と言えば、これも圧巻よね」
初めてみる悠斗の調理風景になのはとフェイトは圧倒され、家ではあんな感じだったと説明するすずか。一方、アリサは隣のテーブルを見る
「う～～～～ん、おいしい」
「エリオは男の子だからまだわかるけど、アンタはいつにもまして食べるわね」
「だっておいしいんだもん。エリオをそう思うよね？」
「はい。すごくおいしいです。キャロはそれぽっちで足りるの？」
「う、うん。それに見てるだけでお腹いっぱいになっちゃうから」
「だめよキャロ。午後だって訓練があるんだからこの２人までとは言わないけどしっかりと食べておきなさい」
一杯食べるエリオとスバルにまだ慣れず、少し小食になっているキャロにティアナが食べてエネルギーを蓄えておくようにいう
「いつも思うんやけど言ったあの体のどこにアレだけの量がはいるんや？」
「まぁ食べてもすぐに訓練で消費しちゃうから」
「いいや絶対にそれだけやない。あの量の行き先は・・・あの胸や！」
はやては年齢の割によ～く育っているスバルの胸を見て言う
「私がスバルと同じ年の時はあそこまで育ってなかったで。まぁ、すずかちゃんとフェイトちゃんは育っておったけどな」
はやてはいまだ成長を続けるすずかとフェイトの胸を見て言う
「すずかちゃん、フェイトちゃん、ちょ～～と２人の胸をもませてもらってもええか？どれだけ成長したか確かめたいか・・あた!?」
「アンタは立場ってものを考えなさい」
「別にええやん、男性が女性にするセクハラやない女の子同士のスキンシップやで？」

「アンタねえ、例え女の子同士でもセクハラされたって言って訴えることも出来るのよ？発足された部隊の部隊長が問題ごと起こして、上から目をつけられて解散しろって言われてもいいの？」
「う!?」
「それが嫌なら少しは自重しなさい」
「・・・はい」
アリサの発言にはやては顔をしかめる。機動六課を設立する際、制限をつける処置をしているとはいえ、協力者の協力と裏技等を使って設立までこぎつけたためアリサの言う通り一部の上層部から目をつけられており、問題ごとを起こせばそこをついて解散させられるかもしれないと思ったはやてはそれ以上、何も言えず、アリサの正論に頷いた
「そういえば、フェイトちゃんとキャロの使っている髪留めって色こそは違うけど同じ形だね？」
なのははフェイトとキャロが使っている髪留めを見て同じものなのだと気づき尋ねる
「これは六課が始まる前にフェイトさんとお会いした時に貰ったんです。エリオ君も髪留めではないですけど同じものを持っています」
「そうなのエリオ？」
「はい。僕のはネックレスタイプのです。壊したらいけないと思って部屋に置いています」
「へぇ～～～。フェイトちゃん、何処にお店で見つけたん？」
「見つけたんじゃなくて、作って貰ったんだよ」
「ってことはオーダーメイドってこと？」
「そうなるのかな？」
アリサの問いにフェイトは首を傾げて答えた
「そうなるのかなってお店に行って頼んだわけじゃないの？」
「これは桜井さんが作ったものなんだ」
『・・・え？えぇぇぇぇぇ!?』
フェイトの返答に話を聞いていた女性陣は驚き、厨房で調理を続けている悠斗を見る

「本当に?本当にこれをあいつが作ったの!?」
「うん。錬成魔法っていう物を作る魔法で数分とかからずに作ってたよ」
「何やその魔法!?」
フェイトから教えてもらった〝錬成魔法〟にはやてが驚く。だが、女性陣の中で一番おどろ、いやショックを受けていたものが1名いた
「・・・・・」
「す、すずかちゃん?どうかしたの?」
「な、何でもないよなのはちゃん」
そう1番ショックを受けていたのはすずかだった。1ヶ月とはいえ付き合いの長い自分よりもさきにフェイトがプレゼントを貰ったことに少なからずショックを受けたのだ
「ずいぶんと賑やかだな」
「桜井さん」
「「「お疲れ様です。それとご飯おいしかったです」」」
「厨房の手伝いはもうええんか?」
「料理長が今日の昼はもういいって言ってくれたんでね」
一仕事終えた悠斗が飲み物をもってなのは達の席へとやってき、空いていたスバル達の席に座った
「桜井」
「ん?」
「フェイトとキャロが身に着けている翼を模した髪留めを作ったのがアンタだって話、本当?」
「ハラオウンから聞いたのか?そうだ、ハラオウンとキャロの髪留めは俺の作品だ」
アリサの問いに悠斗は正直に答えた
「そうだ、これを2人に渡すのをすっかり忘れてた」
髪留めの件で思い出したのか悠斗はアイテムボックスから4つの小さな箱を取り出し、すずかとアリサに2箱づつ渡す
「これは?」
「開けてみればわかる」

悠斗に言われた通り2人は箱を開ける。中にはフェイトとキャロが持っている髪留めの色違いと三日月を模したイヤリングと太陽を模したイヤリングが入っていた
「桜井さんこれって」
「っそ。あの時、2人に作っていたお守りを兼ねたアクセサリーだ」
「お守りってそうは見えないんだけど」
「外見こそアクセサリーだが、中身は別だ。これも渡しておく」
「何よこれ？」
「そのアクセサリーに関する説明書だ。暇なときにでも見ておいてくれ」
悠斗はアリサとすずかにアクセサリーの取扱説明書を渡す
「高町、スバルたちの訓練が始まるまで訓練場を使わせてもらってもいいか？」
「え？うん、大丈夫だよ。それと桜井さん、私のことはなのはでいいよ」
「なら私のことも呼び捨てでええよ」
「私もフェイトでいいよ」
「私のこともアリサでいいわよ。特別よ」
「わ、私もすずかでいいですよ。悠斗さん」
「今度からそう呼ばせてもらう。俺のことも悠斗でいい。そんじゃあな」
お互いに名前で呼んでもいいというと、悠斗はコップを返却口において食堂から出て行った
「・・・あ」
「なのは？どうしたのよ？」
「悠斗君に訓練場のシステムの使い方を教えてなかった」
「なら、私が行って教えてくるよ。急ぎの用事がないから悠斗と一緒にみんなが来るまで訓練しておきたいから」
「私も一緒のいくね。データを取っておけば、後でみんなに見せることが出来るかもしれないから」
訓練場の使い方が解らない悠斗の為にフェイトが訓練がてら教え

に行くと言い、すずかも行って訓練の光景を撮っておくといい、フェイトと一緒の食堂から出て行った

第19話

「う～～む、どうやって使えばいいんだ？」
なのはから訓練場の使用許可を貰い、訓練場に来た悠斗だったがどうやってフィールドを出せばいいのか分からずに途方にくれていた
「悠斗」
「悠斗さん」
「フェイトにすずか？どうした？」
「なのはから訓練場の使い方を教えてなかったって言ってたから教えに来たんだ。そのついでに私も訓練していこうと思って」
「私は2人のサポートと訓練の様子を撮りにきたんです」
〝変ってください〟と悠斗に言うとすずかは慣れた手つきで操作していくとフィールドが起動した
「悠斗さん、希望の場所はありますか？」
「そうだな・・・・山岳地帯で人1人乗ることが出来る岩場があれば助かる」
「山岳地帯ですね」
悠斗の希望を聞いたすずかは端末を操作していき、訓練場が山岳地帯へと変わった
「本当に便利なシステムだな」
「でも、どうして山岳地帯なの？」
「山っていうのは整備された道と違って凸凹が有ったり、急に上りになったり下りになったりで変化にとんでいる。その道を全身を使って走ることで総合体力アップをはかることが出来る。つけた筋肉をこねほぐしてなじませるそのためには野山を走るが手っ取り早いからな」
「なるほど」
悠斗の話を聞いてフェイトは後でなのはの話そうと思った
「でも、ただ走るのはつまらないな。どうだフェイト、この野山を舞

台に俺と鬼ごっこしないか？」
「お、鬼ごっこ？」
子供が遊びでよくおこなう鬼ごっこをしようと言われ、フェイトは戸惑う
「ファルトレク・・・今説明した総合体力アップの方法に遊びを加えただけだ。あ～～いやなら別にいいぞ」
「・・・・やります」
しばし考えた末、フェイトは悠斗と鬼ごっこをすることを決め、小1時間ほど全力で野山を駆け回った（もちろん、魔法や氣による身体強化無し）。そして、フェイトの話を聞いたなのははそれをスバル達の特訓メニューに組み入れることにした

「はぁ、はぁ」
「ふぃ～～～いい汗かいた」
1時間ほど山の中で鬼ごっこをおこなったフェイトと悠斗。汗こそ掻いてはいるもののまだまだ余裕の悠斗に対し、フェイトは両手と両膝を地につけていた
「はい、フェイトちゃん」
「あ、ありがとうすずか」
マネージャーのようにタオルとスポーツドリンクをフェイトに渡すすずか。2つを受け取ったフェイトは失った水分を一気に補充するかのように受け取ったスポーツドリンクを飲む
「どうぞ悠斗さん」
「サンキュー。だが、いくら何でも体力なさすぎじゃないかフェイト？」

「ここ数日、訓練してなかったからかな？」
「なるほど、たった数日でも訓練をサボると体は鈍るからな」
フェイトの話を聞き悠斗は納得する
「３０分～１時間でもいいから毎日運動することをすすめるぞ。もしもの時動けなくなって困るのは自分だからな」
「そう・・だね。後でなのはに相談してみる」
フェイトは六課の教導官を務めているなのはにトレーニングメニューの作成をしてもらおうと決めた
「さて、訓練を続けるか」
小休止を終えた悠斗は近くにあった岩場に行き自身の数倍の高さの岩のてっぺんに跳躍すると片手で逆立ちを行い、さらにアイテムボックスに収納していた等身大サイズの岩を片足に乗せると腕立て伏せを始めた
「ゆ、悠斗!?」
「あ、危ないですよ!?」
「１１・・・１２・・・１３・・・」
ほんの少しでも気を抜けば大けが間違いなしの訓練方法に見ていたフェイトとすずかがやめるよう呼びかけるがその訓練に集中している悠斗の耳には届かず、２人は見守ることしかできなかった

「なのはさん、午後の訓練は何をするんですか？」
「いつもと同じで基礎体力アップと軽い実戦だよ」
昼休みを終え、午後の訓練を行うために訓練場へと一緒に向かうなのはとスバル達。訓練内容を聞いてまた同じメニューなのかとティアナが思っていると
「皆にはもうちょっとだけ基礎体力をつけつつ、模擬戦を行ってチームでの戦い方を覚えてほしいからね。個々のスキルアップはもう少しだけ待ってねティアナ」

「え？」
「また同じ訓練なのかって顔に書いてあったよ」
「す、すいません」
なのはに指摘され、ティアナは慌てて謝るも
「気にしてないから大丈夫だよ。あ！それとティアナの午後の練習量はいつもの倍ね」
「気にしてますよね!?」
いつもの量でもきついというのにその倍の量を行えと言われ、ティアナはなのはが自分の考えを気にしていると知り、ツッコミを入れる
「嘘、嘘。さて、悠斗君はどんな場所で訓練をしてるんだろうな～～」
詮議教導官という役職についているからかなのはは少しだけワクワクしていた。そして、５人が訓練場にやってきてみたのは、悠斗と一緒に訓練すると言って追っていったフェイトと２人のサポートをするためにきていたすずかのオロオロしている姿だった
「フェイトちゃん？すずかちゃん？」
「なんか、オロオロしてますね」
２人がオロオロしている方にその場にいる全員が視線を移すと、言葉を失った。視線の先には背中に大岩を乗せて腕立て伏せしている悠斗がいたからだ。しかも大岩には〝ラカン印の気合いの岩〟という意味不明な文字が彫られていた
「２９９７、２９９８，２９９９、３０００」
目標の数の腕立てを終えると悠斗は横の転がって乗せていた大岩降ろし、そのまま仰向けで地面に寝そべっている
「ちょっと悠斗君！」
「ん？なのは？来たってことはもう時間か」
「そうだけど。って違う！今やってた訓練は何!?」
「何って、俺の筋トレだけど？」
「あんな１歩でも間違えば大怪我する筋トレなんて聞いたことも見たこともないよ!?」
「確かに俺も最初やらされた時はどうかと思ったが、今ではあれが

普通なんだよな。なんていうの、適度な刺激のおかげで集中力が増してはかどるんだよ」
「適度な刺激どころじゃないよね!?フェイトちゃんもすずかちゃんも何で止めなかったの!?」
なのはは訓練を見ていたフェイトとすずかに問い詰める
「と、止めようとしたよ?でも、・・・」
「悠斗さん、すごい集中してて私とフェイトちゃんの声が届かなかったの。だから、見てることしかできなくて」
謝るフェイトとすずかになのははそれ以上2人を責めることができず、悠斗に心臓に悪いからしないようにと言われたが〝無理〟と言われ、怒るも、悠斗は聞く耳を持たずフォワードの訓練そっちのけで議論が始まり、なのはが折れたことにより話は終わったが、その訓練をするのはスバル達がいないときかつ、自分を含む、隊長陣、副隊長陣の監修のもと行う事が義務付けられた

２０話

『それじゃあラスト、１０分の模擬戦闘をやるけど・・いけるよね？』
『『『はい！』』』
へとへとになったスバル達だがなのはの言葉に元気よく返事を返す
「・・・・・・・」
その光景を悠斗が眺めている。だが、その表情はつまらなさそうだ
「高町のフォワード達に行っている訓練がそんなに不服なのか？」
「アインス。いや、そう言うわけじゃ」
「顔に不満ありと書かれているぞ」
「・・・まじか」
アインスに言われ、悠斗はアインスの言葉を肯定した
「戦闘訓練ばかりやっているのに不満があってな」
「？何故だ？戦闘技術を鍛えるのは当たり前のことではないのか？」
「戦闘技術を鍛えることに文句はない。だが、戦闘技術だけを鍛えればいいってもんじゃない。身体を鍛えることも重要だ。特にスバルとエリオは近接戦闘を主としている、だから成長に支障をきたさない程度で鍛えればいいのにそれもしない。戦闘技術を覚えるのと同じで筋肉だって一朝一夕で鍛え上げられるものじゃない」
「だが、それは魔法でカバーすれば」
悠斗の話を聞きアインスが思ったことを言う
「じゃあ、質問しよう。魔法で身体能力を1，5倍上げるとしよう、その時、鍛えていた時と鍛えていなかったとき、どっちのほうが上になると思う？」
「それは・・・」
「そう答えは鍛えていたほうだ。近接戦闘ではそのわずかな差で有利にも不利にもなる。だからこそ身体は鍛えておいて損はない。だ

けどこれはあくまでも俺の自論だ。なのはにはなのはの考えとやり方があるんだろう」
自分の持論を言いながら悠斗は午前最後の訓練を見る。訓練場ではキャロのブーストでスピードアップしたエリオの一撃がなのはに届いたことに４人が歓喜をあげていた
「さて、俺も食堂に行きますか。頑張ってなのはに一撃をいれた４人に祝いの料理でも作ってやるか」
「・・高町に言わないのか？」
「言っただろう？あくまで俺の自論だって。それに部外者である俺がその職を専門としている者に言って困らせるわけにもいかないだろう？」
リインフォースに告げると悠斗は食堂へと向かっていった
「・・私としては貴重意見だと思うのだがな」
前のように成長しない魔導生命体の時とは違い、生身に近い身体を得て復活したリインフォースには悠斗の考えはとても貴重に思えた。戦術的に巧くなったとしても基礎となる戦闘力が低ければ下や同程度の魔導師との戦いでは巧く立ち回れるかもしれないが、上の存在には苦戦あるいは敗北もあると思ったのだ
「・・・ヴィータに頼んで訓練メニューを見直してもらおう」

そして、その日の午後。昼食を取り終えたスバル、ティアナ、エリオ、キャロの４人は六課のデバイスルームへと足を運んでいた。理由は、スバルとティアナが使っていた自作のデバイスが壊れてしまった

のを知ったなのはが用意していたデバイスを渡すためだ
「これが・・」
「あたし達の新デバイス」
ケース内で浮いている自分のデバイスの待機状態を見てスバルは嬉しそうにティアナは勿論嬉しいのもあるが期待にこたえられるかという不安も抱えていた
「僕達のは」
「そこまで変わってないね」
スバルとティアナと違って入隊当初から自分達用に作って貰っていたエリオとキャロは貰った時と変わってないデバイスを見て肩を抜かす
「そんなことないですよ～」
そんな2人にいつの間にかいたのか祝福の風の後継機であるリインフォース・ツヴァイが声をかける
「リイ・・・ツヴァイ曹長」
「2人はちゃんとしたデバイスの使用経験がなかったですから、感触に慣れて貰うために基礎フレームと最低限の機能だけで渡してたです」
「あ、あれで最低限!?」
「ほ、本当に」
ツヴァイからの説明を聞いてエリオとキャロは今まで全開で出していた出力が最低限の物だったと知って驚く
「ごめんごめん、お待たせ」
「なのはさん」
「ナイスタイミングです、丁度今から機能説明をしようかと」
4人がデバイスを受け取ると同時のタイミングでなのはが部屋に入ってくる
「そう。もうすぐに使える状態なんだよね？」
「はい」
「それじゃ説明・・」
シャーリーが4人のデバイスの説明をしようとしたとき

「邪魔するぜ」
今度は悠斗が部屋に入ってきた
「悠斗君、どうしたの？」
「俺の愛刀の処理が終わったって聞いたんでね、受け取りに来たのさ」
「そうでした、すずかさん」
「うん。どうぞ悠斗さん」
すずかは台座に置かれていた刀を手に取ると、悠斗に渡す
「サンキュー」
刀を受け取った悠斗は様々な角度から収まった状態の刀を見、すずかから少し離れると刀を抜いた刀身を眺める
「文字やら、魔方陣が刻まれると思ってたんだがそうでもないんだな」
「いえ、見えないだけで魔方陣は刻んでいますよ」
シャーリーの説明を聞いた悠斗は世界が違えば魔法も違うんだなと改めて思い、鞘に納め、刀をアイテムボックス内に収納すると、スバルたちが持っているデバイスに視線を移す
「それが４人の新たな相棒か？」
「うん。これから機能説明をしようと思ってたんだ」
「なら見て行っていいか？この世界の魔導触媒に興味があってな」
「私は構わないけど・・・皆は？」
なのはの問いに４人は問題ないと言い、説明が始まろうとした矢先、警報音と共に赤いランプが光る
「このアラートって」
「一級警戒態勢!?」

第21話

「新デバイスぶっつけ本番になっちゃったけど、練習通りで大丈夫だからね」
「はい」
「頑張ります」
「エリオとキャロ、フリードもしっかりですよ」
「「はい」」
「危ないときは私やフェイト隊長、ツヴァイがちゃんとフォローするからおっかなびっくりじゃなくて、思いっ切りやってみよう」
「「「はい！」」」
「うん。悠斗君もよろしくね」
ヘリに乗り、任務地へと向かう中、なのはがスバル達にエールを送ると、一緒の乗っている悠斗にお願いするが
「・・・・・・」
悠斗は座禅をしており、返事をしなかった
「悠斗君？」
眠っているのかと思い、もう一度声をかけると、悠斗は
「〝精神統一中だ話しかけないでくれ〟」
と書かれたプラカードを何処からか取り出し、なのはに見せた
「「「「(プ、プラカード？っていうかどこから取り出したの／んですか？)」」」」
「〝企業秘密だ〟」
「「「「(心の声を読まれた!?)」」」」
「きゅる～～」
なのは達が驚いている中、フリードが悠斗の頭に乗っかる
「あ、駄目だよフリード」
「〝気にしなくていい。それより、到着するまでにお前たちも精神を統一させておけ。特にスバル〟」

「(なんで私だけ!?)」
「〝新しいデバイスを貰って気が緩み切っているからだ〟」
次々と文字が書かれたプラカードを出して会話をしていく悠斗になのはは
「(どうやって書いてるんだろう?)」
「〝だから企業秘密だって言ってるだろう?これ以上詮索するならお前の子供のころの秘密をばらすぞ?例えば、小学校の体育の授業でやったドッチボールで、ボールをか・・〟」
「にゃ〜〜〜〜!?もう詮索しないからそれは言わないで!?」
少しばかりカオスになりながらもヘリが現場へと向かっていく

「・・・・・」
現場まであと少しと言ったところで精神統一をしていた悠斗が閉じていた目を開けて立ち上がる
「悠斗君?」
「ヴァイス・グランセニック、ヘリのハッチを開けてくれ。お出迎えのようだからな」
『ガジェット反応、航空型現地観測型を補足!』
悠斗がヘリのパイロットを務める男性　ヴァイス・グランセニックに声をかけると同時に、六課の本部から空からガジェット反応を探知したという報告を受けた
「(ロングアーチよりも早く察知した?)ヴァイス君、私も出るよ。フェイト隊長と2人で空を抑える」
「いや、なのはははこのままヘリに乗ってスバル達、FWメンバーと一緒に行け。ここは俺が行く」
出撃するというなのはを抑え、悠斗が出ると告げる
「でも、私とフェイト隊長のコンビなら・・・」

「すぐに片付けれるって?そうかもしれないな、だが飛行型とやらが列車方面にも待機しているのかもしれない。その時、対空手段を持っていないＦＷ達はどうなる?お前は言ったな、何かあっても自分やフェイトが駆け付けると」
「う、うん」
「飛行型の増援が現れ、駆け付けることが出来なくなったらＦＷ達はどうなる?戦場にイレギャラーは付き物、常に最悪を想定して策を講じる、それが指揮権を持つものの務めだ」
そういうと悠斗はハッチに近づこうとして、あることを思い出し、振り返る
「そうだ。キャロ」
「は、はい」
「力は怖いか?」
「え?」
「これは俺の勘だが、練習を見ていた時からお前は力を十二分に出し切れてないと思っていた」
「・・・・」
「当たりか」
俯くキャロに悠斗は自分の考えが当たっていたことを察する
「制御できない強すぎる力は破滅をもたらす」
「っ!?」
悠斗の言葉にキャロはかつて暮らしていた里の長に言われた言葉を思い出す
「だがな、強かろうが、弱かろうが、力は力だ。それを壊すために使うか、守るために使うかは振るう者の心次第。キャロがその力で何かを誰かを守りたいと強く思い、願えば必ず答えてくれる。それに、キャロは1人じゃない。頼もしい仲間に信頼できる上司がいるんだからな」
「悠斗さん」
悠斗はキャロに近づき、頭をなでながら話す
「俺からのアドバイスだ。仲間を信じ中途半端に力を使おうとせず

に思い切って使え。今のキャロに必要なのはきっとそれだ。スバル、ティアナ、エリオ、何かあった時、キャロを支えられるのはお前たちだ。そのことを忘れるな、いいな」

「「はい！」」

「いい返事だ。そんじゃあ俺も行きますか」

ＦＷ達に自分なりのエールを送ると悠斗はハッチに近づく。悠斗が近づいたタイミングでハッチが開く

「ヴァイス・グランセニック、俺が出たら速度を少し落とし、俺が合図したら一気に駆け抜けろ」

「あ、ああ」

ヴァイスに一声かけると悠斗は外へと飛び出し、舞空術で空に浮かびヘリを追い越す

「取り合えず、道を作るとするか」

悠斗は腰に差した鞘から刀を抜刀し、構える

「斬空閃・百花繚乱」

第２２話

「斬空閃・百花繚乱」
振るわれた刀から放たれた無数の斬撃が進路上の飛行型ガジェットを一掃した
「・・・行け」
渡されていた無線機を使って一言ヘリに通信を送ると、ヘリは悠斗を抜いて行った
「さて、思う存分にやらせてもらうか！」
久しぶりの戦場なためか悠斗の心は滾っており、普段見ることのない獰猛な顔で後ろから接近する飛行型のガジェットを振り向きついでに斬撃を飛ばして斬る。斬ったガジェットの爆発音を合図に悠斗は近づき、斬っていく。ガジェットは全機体がＡＭＦという魔法を無力化する機能が搭載されているが、魔力のほかに氣を使う悠斗にとってそんなものは皆無に等しく、ガジェットは次々と鉄くずへと変っていく
「足りねぇな。俺を倒したきゃ後１０万は連れて来い」

「うわぁ」
「ノリノリねあいつ」
作戦室で戦闘を見ていたすずかとアリサは悠斗の表情を見て苦笑いし、悠斗の戦闘を始めてみるロングアーチのメンバーはけた外れの

戦闘力に手を止めて唖然としている
「手が止まているぞ！情報を収集して逐一前線メンバーに報告するんだ」
部隊長補佐を務めている青年の代わりにアインスが作戦室にいるメンバーに喝を入れ、正気に戻させる
「「っは⁉す、すいません」」
「ごめん遅れた！」
ロングアーチのメンバーが作業を再開したのと同時に私用で六課を離れていたはやてが指令室に到着し席に座る
「状況はどうなっとるん？」
「現在、桜井さんとフェイト隊長が飛行型のガジェットと戦闘中、間もなくなのは隊長、とツヴァイ曹長、ＦＷ部隊を乗せたヘリがリニアに追いつきます」
「なのは隊長はでとらんのか？」
「飛行ガジェットを確認した際、出ようとしましたが桜井さんに言われ、ＦＷ部隊の援護に回れと言われヘリに乗っています。そして、その桜井さんでなんですが・・・」
部隊長補佐を務める青年　グリフィス・ロウランドはモニターに視線を移す。そこには飛行型ガジェット相手に無双する悠斗が映し出されていた。ある機体達は一か所に誘導された所を纏めて斬られ、ある機体は氣弾によって撃ち抜かれ、ある機体は踏み込む際の足場にされ、踏み込んだ瞬間に背面の装甲がゆがみ、蹴った瞬間に地面へと勢いよく落下していった
「・・・無双ゲーか⁉」
悠斗の戦いを見てはやてはそれしかいうことが出来なかった

「あらかた片付いたか？」
飛行ガジェットの相手をしていた悠斗は周囲を見渡しながら残っている機体がいないことを確認していると
「悠斗」
「フェイトか」
悠斗と同じようにガジェットと戦っていたフェイトが近づいてきた
「大丈夫・・みたいだね」
「まぁな。取り合えず準備運動にはなったかな」
「あ、あはは」
悠斗の暴れっぷりを遠目で見ていたフェイトはあれで準備運動なんだと乾いた笑みをするしかできなかった
「ロングアーチ、こちらフェイト。今いる空域の敵は撃破したよ。リニアのほうはどうなってるの？」
『こちらロングアーチ。現在、スターズ分隊とライトニング分隊に別れ、リニアの停止とレリックの確保任務を行っています。なのは隊長はリニアに近づこうとしている飛行型の撃破とリニアの防衛を行っています』
「なら、私と悠斗も今からなのは隊長と合流してリニアの防衛に行うね」
『お願いします』
「っと、言うわけだからリニアの方に急ごうか悠斗」
「そうだな。エリオとキャロが心配だから、少し急ぐか」
「スバルとティアナの心配はしないの？」
「あの２人はエリオとキャロと違ってこれが初めての任務ってわけじゃないだろうからな。まぁ、それなりに心配はしてるが」
エリオやキャロのような年齢の子が戦場に立っているのをみると学校に行って学び、友達と遊んでいてほしいと思う気持ちもあるが自らの意思で戦場に立つものは子供、女、老人問わずみな戦士であると言われたことがある。どんな思いで戦場に立っているのかは悠斗には分からないし、去れとも言えない、悠斗にできることは１秒でも早

く戦いを終わらせることだけ
「乗れフェイト、こいつで一気にリニアまで飛んでいく」
悠斗はアイテムボックスから大型のサーフボードに似た機械を取り出し、それに乗る
「悠斗・・・これは？」
「魔力で動く乗り物だ。早く乗れ」
「う、うん」
悠斗にせかされ、フェイトは恐る恐るボードに乗る
「しっかり掴まってろよ」
フェイトが乗ったのを確認すると悠斗はボードに魔力を注ぎ込み、トップスピードの1歩手前まで加速し、リニアを追う
「っ!?」
まるでジェットコースターに乗っている感じがし、フェイトは振り落とされないように悠斗に抱き着く力を強める。途中、2人をリニア方面に行かせまいとガジェットが襲い掛かってくるが攻撃される前に破壊されていく
「あと少しで追いつく、きばれよフェイト」
「・・う・・ん」
あっという間にリニアに追いつき、戦闘に入ろうとした悠斗が見たのは新型の大型ガジェットに弾き飛ばされ、リニアから落ちていくエリオとそのエリオを助けようと跳び下りたキャロとフリードの姿だった
「エリオ！キャロ！」
2人が落ちていくのに助けに行こうとしないなのは。さらには通信で聞こえてきた話を聞いて悠斗は呆れる
「フェイト」
「な、何、悠・・斗？」
「跳ぶぞ」
「・・・え？」
悠斗の言った意味が解らずにいたフェイトだったが悠斗は片手でフェイトを抱えると乗っていたボードから跳び上がる

「へぇぇぇぇ!?」
いきなりのことに状況が理解できず声を荒げるフェイトを無視して悠斗は乗っていたボードを自動操縦モードにしてエリオとキャロのもとへと飛ばす。ボードが2人の落ちる場所まで行くとピンク色の光が2人を包み込み、光が弾けると小さい姿から中ぐらいの大きさへと姿を変えたフリードが姿を現しその背にエリオとキャロが乗っていた
「ふぅ」
2人が無事だったことに悠斗は安心すると
「ゆ、悠斗。そ、そろそろ放してくれると嬉しんだけど」
「ん?あぁ、悪い」
フェイトに声をかけられ、悠斗は抱えていたフェイトを放すと、キャロの魔法で強化されたエリオの一撃が新型のガジェットを破壊した
「やったねエリオ、キャロ」
「あと少しだ一気に叩くぞ」
「うん」
エリオとキャロの無事に安心したフェイトは意識を切り替え、残りのガジェットの破壊を再開した。数分とかからずに残りのガジェットの掃討が終わり、リニアに積み込まれていた〝レリック〟と呼ばれるロストロギアを回収、ヘリに積み込み地上本部へと移送することが決定し、なのはが隊長を務めるスターズ部隊が輸送の護衛を務め、残ったフェイトが隊長を務めるライトニング部隊と悠斗がリニアを回収する部隊が到着するまで警戒することとなった
「・・・・・」
フェイトと共に空からの敵が来ないかを警戒していた悠斗はふと虚空を見上げると刀を振るった
「悠斗?」
「どうかしたんですか?」
「何、うっとおしい羽虫を追っ払っただけさ」
「「?」」

「まさか、超小型のサーチャーに気づくなんてね」
とある薄暗い某所で1人の男が映像が途切れた投影ディスプレイを見て呟く
「まぁいい。物語を進みだした、もたらされるのは破滅か、それとも救済か。すべては神のみそしるだね」
男は心底楽しそうな笑みを浮かべながら高らかに笑う

第２３話

「さて、皆、初の任務お疲れ様。皆のおかげで、無事にレリックの確保と運送ができたわ」
六課の部隊長室に集合した隊長陣とＦＷメンバーにはやてがねぎらいの言葉を贈る
「（なぁ？なんでユウ君はあんなに不機嫌なんや？）」
「（それがよく分からないの。最初のほうは普通だったんだけど、エリオとキャロが落ちたあたりからあんな感じになって）」
はやては椅子には座らず壁に寄りかかって不機嫌そうな表情でこちらを見る悠斗を横目で見ながら念話で理由を知ってそうななのはとフェイトに尋ねる
「（もしかしなくてもそれが不機嫌な理由なんとちゃうか？）」
「（でも、２人とも無事だったんだよ？）」
フェイトの話を聞き、不機嫌な理由がそれではとはやてが言うが無事だったのに不機嫌になっているのはおかしいという
「後でみんなのデバイスにロングアーチが撮った戦闘の映像を送るから、それを見てどこがダメだったを書いて提出してね」
「「「はい！」」」
なのはの言葉にＦＷメンバーは元気よく答え、一礼すると会議室から退出していった
「さってと、ユウ君」
「・・・何だ？」
「ユウ君もお疲れ様や。おかげで大きな被害を出さずに処理することができたわ」
「・・・俺は自分の仕事をしただけだ。話がそれだけっていうなら俺はお暇させてもらう。あぁ、その前になのは、お前に聞きたいことがある」
「ん？どうしたの悠斗君」

「なんで、エリオとキャロから落ちたときに助けにいかなかった？」
「え？何でって、あれだけ離れればＡＭＦに干渉されずにフルパフォーマンスが出来ると思ったから」
「干渉されずに・・ねえ？その根拠はどこからきたんだ？」
「え？」
「だから干渉されずに魔法が最大で使えるっていう根拠は何処から来たのかって聞いたんだ。通信で聞こえた話だと２人が対峙した機種は初めて確認されたタイプだったらしいじゃないか。だというのにＡＭＦだったか？それの効果範囲が今までのものと同一とは限らないし、出力だって上がっているかもしれないそのことは考えたのか？」
「そ、それは」
悠斗の話になのははたじろぐ
「ここは軍隊だ、上にいる者は下に付いた者の命を預かる立場だってことを自覚しろ」
それを言うと悠斗は部隊長室から出て行った
「あいつ」
「やめろヴィータ」
「でもよぉ！」
「桜井の言っている事は紛れもない正論だ。そのことを我らは身を持て知っているはずだ」
「・・・・」
シグナムの言葉にヴィータはなにも言い返すことが出来なかった

「っふ、っふ、っふ」

隊舎近くの林の中で悠斗はとある処置を施した木刀を使って素振りを行っていた
「(きつく言いすぎたか?・・・いや、あれでよかったんだ。あいつらは楽観的過ぎる、何かが起こる前に教えてやらなきゃいけねぇ。例えそれで俺が嫌われることになっても)」
一通りの素振りを終えると悠斗はアイテムボックス内からバスケットボールサイズの鉱石を取り出し、とある魔法を使って鉱石を浮かせ数メートル先の上空まで浮かばさせる
「我流秘剣〝鏡桜〟」
悠斗は木刀を構え、魔法で浮かせていた鉱石を落とし、視界に入った瞬間、瞬動を使って距離を詰め木刀を振るう
「・・・計4回・・か。まずまずだな」
地面に落ち、8等分になった鉱石を見て悠斗は及第点を付けた
「・・・っで?いつまで隠れてみているつもりだ・・なのは、フェイト?」
「にゃはは・・ばれてたの?」
「バレバレだ」
「だから止めようっていったのに」
近くの木から苦笑いしたなのはとフェイトが出てくる
「ちょっと眠れなくてフェイトちゃんと一緒にお散歩してたら悠斗君が素振りしてるのが見えたんだ。はい、タオルとスポーツドリンク」
「・・・悪いな」
自分で用意していたものがあるがせっかく持ってきてくれたので悠斗はそれを受け取り水分補給と流した汗を拭いた
「う〜〜ん、見事に8等分されてる。振るったのは1回なのに」
「悠斗、今の技はなんなの」
「複数の斬撃をもって一撃となす剣技だ」
「??」
「解りやすく言うなら、4つの斬撃を同時に放ったのさ」
「同時って・・そんなこと出来るはずが・・・」

「普通は・・な。出来たとしても連撃。俺はこれを厳しい修練の末、習得することが出来たのさ」
「・・・悠斗のいた世界ってどんな世界なの？」
水分補給を行っている悠斗にフェイトが興味本位で悠斗のいた世界のこと尋ねる
「俺がいた世界・・か。魑魅魍魎がいる世界だったな」
「「ひぃ」」
魑魅魍魎という単語を聞いたなのはとフェイトは互いの手を握って身体を震わせた
「しかし、厳しいこと言った奴だっていうのによく話なんかしようと思うな？普通は嫌いになると思うけどな」
悠斗は普通に話しかけてきたなのはの精神に呆れる
「だって、私達のことを思ってあえて厳しい言葉で言ってくれたんだよ。感謝はしても嫌いになったりなんてならないよ」
「・・・いつ分かったんだ？」
自分の考えを理解されていたことに少なからず驚いた悠斗はなのはに尋ねる
「悠斗が部屋から出て行った後にシグナムが教えてくれたんだ」
「・・そうか」
「あとシグナムはこうも言ってたよ。〝恐らく過去に自身の判断ミスで取り返しのつかない事態になり、誰かを失ったのかもしれん〟って」
「・・・あの人はエスパーか何かか？」
「じゃあやっぱり合ったんだね。・・・悠斗君、思い出したくないってことは十分承知してるけど、話してほしいの」
なのはに悠斗に何があったの聞かせてほしいと無理を承知で頼み込む
「・・・そうだな」
悠斗は少し考えるとなのは達に話す事を決めた。話が長くなりそうだと思った悠斗は斬った鉱石を拾い、〝錬成魔法〟で人数分の椅子と簡易テーブルを作り上げ、アイテムボックスから茶葉とティーポッ

ト、水と人数分のカップを取り出し、火の下級魔法で湯を沸かし、淹れた

「「・・・・・」」

一瞬の出来事になのはとフェイトの思考が停止寸前だった

「「ふぇ!?」」

「何呆けてるんだ?座りな」

悠斗は呆けている2人の目の前で指を鳴らして正気に戻し、座るよう言うと自分も椅子に座り

「さて、何から話すかねぇ〜」

転生先で巻き込まれた異世界〝トータス〟で起きた自身の失敗談を語り始めた

第２４話

「あれは俺が高2になって1か月ぐらい過ぎた日だったかな？その日、俺は俺の世界の裏の関係者とお茶をしていてな、1年前の夏休みに行った魔法世界で起きた大冒険のことを話しながら今年の夏休みについてのどうするかを話し合っていたんだ」

　淹れたお茶を一口飲んでから悠斗はなのはとフェイトに生前に起きた第2の大冒険について語り始めた

「魔法世界？」

「あぁ。人間に加え、獣人やら、竜やら有名なＲＰＧに出てくるモンスター等がいる文字通りのファンタジー世界だ」

「「へぇ～～」」

　悠斗の話を聞き、なのはとフェイトは興味を少し興味を抱く

「だが、その実体は火星という星に創られた幻想世界なんだけどな」

「「・・・え？」」

「何でも始まりの魔法使いが創造したらしいが、何のために創ったのかは知らん、そこまで興味がないからな」

「「・・・・」」

　重要なところに興味がないという悠斗に2人は何も言えなかった

「話を戻すぞ。話も終え、帰ろうとした矢先、俺の足元に見たことのない魔方陣が突然浮かび上がった。いきなりのことに唖然としていた俺はその魔方陣の放つ光に飲み込まれ、気が付いたら異世界にいた」

「「異世界!?」」

「何でもその世界の神とやらが呼んだらしくてな俺のほかにも別世界の地球から31人の生徒と1人の教師も呼ばれた。呼んだ理由は世界を救うために魔人族と呼ばれるものと戦ってほしいんだと」

「悠斗、戦うってことは」

「そうだ、呼び出した俺達に戦争、人殺しだな」

「「っ!?」」
「別世界の地球から呼び出された教師は生徒達にそんなことさせられない、元の世界に返してくれと言ったが、帰る手段がないとほざきやがった」
悠斗はお茶を飲んで一息つくと、話をつづけた
「そんな時、1人の生徒が自分達には力がある、何があっても自分が皆を守って見せると言っちまったのさ。そいつはクラスでも影響力が高く、そいつの言葉に感化され、1人、また1人と戦うことを決めて行った。自分達がこれから何をするのか、何をさせられるのかも知らずにな」
「悠斗君はどう答えたの?」
「1人でも生かすために現実を教えてやった、自分達が何をやらされるのかをな。まぁ、そんなに効果はなかったけどな」
悠斗はその時の事を思い出しため息を吐く
「結局、生徒たちは戦争に加担するという流れになり、戦闘訓練が始まった。俺はその時点で強かったから訓練に参加する必要はなかったんだが、いつの間にか俺がその世界の騎士団を鍛える側になってた」
〝どうしてあんな流れになったのかね〜〟と呟きながら悠斗はお茶を飲む、その様子になのはとフェイトは苦笑いする
「俺が鍛えた騎士団のことはどうでもいいな。んで、訓練を初めて2週間がたったころ、実戦を経験させるためにとある迷宮に入ることになった。非戦闘員も含めてな」
「「・・・え?」」
戦えないものまで戦場に連れて行くことになのはとフェイトは自身の耳を疑った
「俺も戦えない者は連れて行く必要はないといった。騎士団長も同じ考えだったらしいが上からの命令に逆らえず連れて行くことになった」
「悠斗君はどうしたの?」
「当初は行かない予定だったんだが、嫌な予感がしてな一緒に行く

ことにした。数日をかけて迷宮のある街へとたどり着き、迷宮に挑むことになった。その迷宮は１００階層まであるらしく、実戦を積ませることが目的だったからそこまで奥まで降りるつもりはなかったらしい。２０階層にたどり着いたとき、１人の少女が見つけた鉱石を捕ろうとした馬鹿な男のせいで罠にかかり、強制的に５０階層まで移動させられ、前後から現れた骸骨兵士と１体の強力な魔獣が出てきて一気にピンチになった。突然の出来事に俺と騎士団以外の者達は混乱した。混乱する者達に檄を飛ばし、指示を出した俺は自分の力におぼれ、言うことを聞かない自称勇者とその勇者の言うことは絶対だと信じてやまない馬鹿で脳筋な男を上の階まで上がる階段まで放り投げた後、一人の男と一緒に殿を務めた」

「・・・結果は？」

「その魔獣以上のものと戦ったことがある俺にとってはそこまで強く感じず、さらに一緒に殿を務めてくれた男のおかげで楽に倒せた。だが、ここで一つの問題が起きた、後方から放たれた魔法の一つの軌道が男に向かって曲がり、男に魔法が当たって、吹き飛んだ。そして、それと同時に俺達がいた橋の崩壊が始まった。戦闘の疲れと魔法によるダメージで男はうまく体を動かすことが出来ず、崩壊した橋の残骸と共に落ちて行った」

「「・・・・・」」

「俺は手を伸ばして落ちていく男を助けようとしたが、届かなかった。そして、その男のことが好きだったであろう女の子を気絶させて戻ろうとした矢先、俺達がいた場所も崩壊してな、俺とその女の子の親友の子と一緒に落ちて行ったのさ」

〝我ながら情けなかったな～～〟っとぼやきながら悠斗は少し冷めたお茶を飲む

「奇跡的に生きていた俺達は迷宮からの脱出、落ちた男の探索を始めた。道中色々なことがあったが長くなるから飛ばさせてもらう。探索をしていくうちに俺達は落ちた男を見つけた」

「よかった」

「生きていたんだ」

「見つけたはよかったんだが、男は変ってしまっていたんだ」
「「変っていた？」」
「優しかった性格はなくなり、自分の目的を邪魔するものは容赦なく殺すという風にな」
「「っ!?」」
男の変貌ぶりを悠斗から聞いた2人は眼を見開く
「一番の救いだったのは完全な外道になっていなかったことだな。だが、今でもこう思うことがある、あの時、男の手を掴んでさえいれば男は優しく、思いやりのある性格のままでいたはずだってな」
悠斗の表情と声色には後悔の念があった
「これが俺の失敗談だ。この話を聞いてどう思い、どう行動に移すのか見届けさせてもらう。盗み聞きさせている者達も含めてな」
「盗み聞きさせてるって何のこと？ここには私とフェイトちゃんしか・・・」
「惚けるな。デバイスの通信回線を開いて、フォワード達とロングアーチ以外の面々に今の会話を聞かせてたんだろう？」
『・・・いつから気づいてたんや、ユウ君』
観念したのかテーブルに置かれている紅い宝玉からはやての声が聞こえてきた
「最初からだな。ごくたまに息をのんで鳴る喉音が宝玉から聞こえてからな」
『聞き取れるかとれるか微妙な音が聞こえるってどんだけ耳がええねん』
悠斗の聴覚の良さにはやては呆れる
「さて、明日も早いことだしそろそろ寝るとしようぜ」
「そうだね。悠斗君」
「ん？」
「話してくれてありがとう」
悠斗に話をしてくれてことへの礼を言うとなのははフェイトと共に隊舎へと戻っていった
「・・・誰一人欠けることなくこの1年過ごしていけることを願いた

いな」
２人がいなくなったのを確認すると悠斗は空に浮かぶ３つの月を見上げながら呟き、隊舎へと戻っていった

第２５話

「どうしてこうなったのよ～～!?」
「ティ、ティアナさん、声を抑えて」
「見つかっちゃいますか・・・」
木の陰に隠れて今の状況に叫びそうになるティアナをエリオとキャロがなだめていると、〝メキ〟という音が近くから聞こえてき、４人が恐る恐る後ろを振り返ると
「み～～つ～～け～～た～～」
「「「ひぃいいいい～～!?」」」
身体に強制ギブスのようなアーマーを身に着けた悠斗がいた。顔全体は仮面で覆われているが眼の部分にある黒いゴーグルが黄色く発行しており、恐怖を与える
「本当にどうしてこうなったのよ～～!?」

事の発端は３０分ほど前にさかのぼる
「さて、今日の朝の訓練だけど、ちょっと趣向を変えようと思います」
「なのはさん、それはここ（訓練場）にいる八神部隊長に関係あることなんですか？」
「私は関係ないで」
「じゃあ、どうして？」
滅多に訓練場にいないはやてがここにいることが原因なのかとティアナが尋ねるが当の本人であるはやてがそれを否定する
「私がここにいるんわ。皆と同じで訓練をするためや」
「メンバーも全員揃ったことだし、今日の朝練の内容を教えます」
姿勢を正したＦＷメンバーは興味半々、恐々半々である

「今日の朝練は・・・鬼ごっごをします」
『・・・・・・は？』
なのはの言葉にその場にいる全員が間の抜けた声を上げた
「な、なのは、今なんて言ったの？」
「鬼ごっこって言ったよ」
フェイトの問いになのはが答える
「鬼役はあたしらの誰かってことか？」
「うんん、私達、隊長陣も逃げる側だよ」
「はぁ？じゃあ、誰が鬼役を・・・」
「鬼役をするのは俺だ」
金属がきしむ音と共に悠斗が朝霧の向こうから現れた
「おはよう悠斗君」
「おはようさん」
「所で、身体に身に着けているそれは何？」
「これか？強制ギプスみたいなものだ。身に着けると設定した分の重力が身体に掛かる」
「ちなみに今の設定は？」
「１５だが？」
「それもう強制ギプスじゃないよね!?」
悠斗に掛かっている負荷を知ったなのはがツッコム
「っというかよく動けるな」
「鍛え方が違うんでな」
「ルールは皆も知ってるルールと同じだけど。攻撃、補助などの魔法は無し。目くらまし等の逃げるための魔法のみ許可します。それと時間内まで逃げ切れた人には今日のお昼に悠斗君が作った特製のデザートが食べれます」
『っ!?』
デザートという言葉に女性陣の目の色が変わる
「ちなみに今日作ったのはミルクレープだ」
「クレープを何層にも重ねたケーキやね」
勝者の景品に釣られ、何人かの女性は闘志を燃やす。そして、鬼

ごっこが始まった

『ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ!!』
「まるでホラー映画を見ているようね」
審判役を頼まれ、いつもより早く起きたアリサは映像越しで逃げるＦＷ陣とそれを追いかける悠斗を見て、苦笑いする
「っていうか、あいつ本当に私達と同じ人間なのか疑っちゃうわね」
１５倍の重力付加に加え、フェイスマスクによって通常より呼吸するのが難しく、心拍機能も低下しているというのに悠斗の動きはそれを全くと言っていいほど感じさせていなかった
「・・・トラウマにならないといいわね」

「ティ、ティア!?どうしよう!?」
「どうしようも何も、捕まるか、こっちの体力が尽きるかの２択しかないわよ!?」
『全員、目をつむって、耳をふさげ』
必死になって逃げるＦＷ達だったが、体力も尽き掛け、掴まりそうになった時、念話で指示が出された。ＦＷ達はその指示に従い、目をつむり、耳をふさぐ。するとＦＷ達と悠斗の間に何かが落ち、弾け、辺り一面を光と音が覆った
「これって、閃光魔法？」
『皆、そこから１１時の方向に向かって走って』

『ぼやぼやしてると置いていくからな』
スバル達は互いの顔を見て頷き、耳をふさいだ状態で言われた方向へと走った

「皆、こっちだよ」
ふいに声をかけられ、振り向くと、なのはを含めた隊長陣が別れて木の陰に隠れていた
『口にすると悠斗君に悟られるからここからは念話で会話するよ。4人とも別れて木の陰に隠れて』
『はい』
なのはの指示に従い、4人は別れ、なのは達のように木の陰に隠れる
『ヴィータ、お疲れさん』
『言われるほど疲れてないけどな』
『エリオ、キャロ、大丈夫？』
『は、はい』
『何とか大丈夫です』
『サーチャーを使って様子をみとったけど15倍もの重力負荷がかかった状態の上に心拍機能も低下している状態であの動き、ほんまに人間かいな』
くしくもアリサと同じ考えに至ったはやてだが、その考えは的を得ていた。人外や、精霊、さらには自称神と名乗る物達との戦いとある魔法の力で、悠斗の肉体は人間としての限界を超えているのだ（早い話、史上最強の弟子の無敵超人のじいさん）
『っ！全員、動くな！』
ほかのメンバーが念話で会話している間も警戒を怠っていなかったシグナムが何かを感じ取り動かないように指示を出す
「・・・・・」
ゆっくりとした足取りで悠斗がなのは達のいる場所へとやってき

た

『嘘だろ!?もう回復したっていうのかよ!?』

閃光と音によるスタン攻撃からの回復が想定以上に速いことにヴィータは驚く

「・・・・・・・」

『全員、意地でも動いたり、声を出したらあかんで』

きょろきょろと当たりを見回す悠斗を見て、ほんの僅かな音によって相手のいる位置を探り当てることが出来る。それがはやてがサーチャー越しで得た情報をもとに導き出した結論だ

「・・・・・・・」

ここにはいないと判断した悠斗は別の場所へと向かおうと進路を変える。見つからずに済んだそのことに安堵するなのは達。だが、

〝きゅるるる～～〟

っという、この場に似合わない音が鳴る

『・・・・・・』

『・・・あはは』

隠れている一同が音のなったほうに振り向くと、片手でお腹を押さえたスバルが罰がわるそう顔で後ろ頭を掻いていた。そして、全員が慌てて木の陰から顔を除くと、動こうとしていた悠斗の身体がこちらへと向き直り、ゆっくりと顔を上げると、ゴーグルが黄色く発光しており、足に力を込めると走り出した

「「スバル～～～!!」」

「ご、ごめんなさ～～い!?」

それと同時になのは達も駆け出し、ティアナとヴィータが音を出したスバルへと怒る。不本意だったとはいえ自分の出した音のせいで再び地獄の追いかけっこが始まってしまったためスバルは謝ることしかできなかった。その後、追いかけっこは朝練終了間際まで続き、終わった後、悠斗以外の全員は精魂尽き果てた様子だったと見ていたアリサは語った。鬼ごっこの勝敗?それは神のみぞ知る

第２６話

「「「はぁ～～～～」」」
いつも通り、４人で一つの席に着いたＦＷメンバーは席に着くなり揃ってため息を吐いた
「ため息ばっかり吐いてると幸せが逃げるぞ？」
「・・・誰にせいで吐いていると思ってるんですか？」
自分達の心情などまったく知らない悠斗にイラついたのかティアナが少しとげのある言葉づかいでジト目を向ける
「ってゆーか、なんであんなに負荷のある状態で動けるんですか？」
「何でと言われてもな～～・・・鍛え方が違うとしか言いようがないな」
スバルの問いに悠斗は４人と自分の訓練と鍛練を思い出し、鍛え方が違うというしかできなかった
「ほい」
そして、悠斗はエリオとキャロの前に今朝の訓練を始める前に言っていた景品のケーキが乗った皿を出した
「悠斗さんこれって」
「今朝おっしゃっていたケーキですよね？どうして、私とエリオ君は掴まっちゃったのに」
「何、怖がらせちまったからな。その詫びだ」
「ええ～～エリオとキャロだけずるい！」
「２人はまだ子供だ。トラウマになっちまったら俺のせいだからな。訓練の後、フェイトにもトラウマになったりしたらどうしてくれるのって言われまくったんだよ」
〝過保護にもほどがあるよな～～。ん？そもそも、あの説教は過保護に入るのか？〟と呟きながら悠斗は仕事へと戻っていった
「じゃ、じゃあ」

「いただきます」
昼食を食べ終えていたエリオとキャロは遠慮がちに悠斗から貰ったケーキを一口口にする
「ん～～おいしい」
「こんなおいしいケーキは初めて食べます」
「う～～～いいな～～」
「諦めなさいスバル」
幸せそうな表情でケーキを食べるエリオとキャロを見てうらやましそうな顔をするスバルをティアナが諦めさせる
「お！みんな揃ってるな～～。呼び出す手間がはぶけてラッキーや」
食堂にやってきたはやてが都合よく揃っている前線メンバーを見て笑みを浮かべる
「はやてちゃん、何かあったの？」
「実は聖王教会からの要請で次元犯罪者に盗まれたロストロギアの回収を頼まれたんや」
「それってレリック？」
「レリックとは別の物や。場所が場所だけにうちらに白羽の矢が刺さったんや」
フェイトの問いに自分たちが追いかけている物とは違う物だとはやてが伝える
「・・・はやて、もしかしてその場所って〝地球〟じゃないでしょうね？」
食後のお茶を飲んで話を聞いていたアリサがはやてに尋ねる
「・・・そのまさかや。盗まれたロストロギアが運ばれたのは第９７管理外世界〝地球〟。しかも、うちらの故郷である海鳴市や」
『ええ～～!?』
アリサの言葉をはやてが肯定した。予想外のことに隊長陣とすずかが驚き、大声を上げた

第２７話

「ここが明日、なのは達が来た時に貸し出すコテージよ」
地球への出張任務が決まった日の夕方、悠斗、アリサ、すずかの３人はなのは達の臨時拠点を提供するための準備をするため一足先に地球、海鳴市へと戻ってきていた
「・・・・」
「どうしたの悠斗君？」
「いや、家がここ（海鳴市）にあるのにわざわざ、こんな物を建てるなんて。金持ちの考えることは解らないな～～と思えばいいのか、アリサの手腕を褒めればいいのか迷ってな」
海鳴市に戻ってきてまだ１時間経っていないのに、臨時拠点を用意出来たことにどんな反応をすればいいのか困る悠斗
「ちょっと、確かにこのコテージは私の家が建てたものだけど、一般人への貸し出しもしてるのよ。まぁ、偶に家族で使うときもあるけど」
「結局使ってるんじゃねぇか」
「と、とりあえず、中に入るわよ！うちの者が１週間に一度は来て掃除をしてるはずだけど、人数分の部屋と布団があるかどうか確認しないと」
悠斗の視線に耐えられなくなったのかアリサは足早にコテージの中へと入っていった
「ふふふ」
「はぁ～～」
そんなアリサを見てすずかは笑い、悠斗はため息を吐くとコテージに入り、部屋の確認を行った。３人は３０分かけてコテージ内の点検を行い、不備等がないことを確認するとそれぞれ家へと戻っていった

アリサを家へと送り、月村邸へと戻ってきた悠斗とすずかはファンリンを交えた3人で夕食を取った後、すずかは久しぶりに飼っている猫たちに戯れ。悠斗は借りている部屋に籠ると鍵を閉めるとアイテムボックスからダイオラマ球を取り出し、中へと入る。そして、道着に着替えると、滝行を始めた

「(集中、集中だ)」

前まではナイアガラの滝並みの水が流れてくるだけだったが、改造を施し、流れる水の量は同じだが流れる速度、落ちる速度が格段に上がっており、悠斗曰、改造前の滝行が殴られているような感覚だとしたら現在の滝行は砲弾を撃ち込まれている感覚に近いらしい。滝行を始めて1時間経過辺りで時計がなり、それを聞いた悠斗は休憩をとるため滝から出た

「次は筋トレだな」

10分ほど休憩をとった悠斗はなのは達との鬼ごっこで使った強制ギプスを装着して、筋トレを始めた

「(この重力制御機能付きギプスは結構いいかもしれないな。岩を背負ってやるよりも高い効果が得られそうだ)」

気まぐれで作った強制ギプスをつけての鍛錬が大岩を乗せて行うよりも効率がいいと感じたのか、今後はこのギプスを使用して、筋トレを行うことを決めた。筋トレを終えるとギプスをつけたままロードワーク、素振り等を行い、残った時間は身体を休ませるために使い、1日を終えると外へと戻り、明日の朝食の準備を行った後、眠りについた

そして、次の日

「やっほ〜〜すずかちゃん、悠斗君。昨日ぶりやな」

月村邸に設置されている転移ポートからはやてとシャマル、アインスの3人がやってきた

「いらっしゃいませ、はやて様、シャマル様、アインス様、長旅ご苦労様です。荷物は自分が運びますのでこちらに」
「おぉ～～執事モードの悠斗君を見るんはこれで2度目やね」
「あらあら、はやてちゃんから聞いていたけど・・・すごい様になってるわ。そして、アインスもメイド服を着てたんでしょう？見てみたかったわね～」
「すっごく似合ってたんやで～～。写真撮ってあるから後で皆で見よう～～」
「さすがはやてちゃん。抜け目ないね」
はやての抜け目のなさにすずかは苦笑いする
「上に上るにはそれぐらいの抜け目のなさがないとなれないって教えてくれた友人がおるんやよ。さてと、なのはちゃん達も仕事を始めてるころやろうし、私らもおしゃべりしてないで始めようか」
「はい。まずは、お買い物ですね」
「ふふふ、久しぶりの買い物と料理作りやからな～～腕が鳴るわ～」
よほど楽しみなのかはやては鼻歌を口ずさみながらコテージではなく商店街へと向かっていった

第２８話

買い物を終え、アリサの用意したコテージへとやってきた悠斗達は任務に必要な機材の設置をしつつ、夕食の準備を始める

「いや～～４年もここ(海鳴市)に帰ってないから私らのこと覚えている人なんていないって思うとったけど、覚えてもらってるもんなんやな～」

商店街での買い物をしているとき、なじみのお店によったはやては店主が自分のことを覚えていてくれたことにびっくりしたのだ

「はやて、機材の設置、完了したぞ」

「おおきに悠斗君」

「そっちのほうも手伝おうか？」

「こっちは手伝わんでええで。悠斗君はみんなが戻ってくるまでゆっくりしてて～な～」

「そうか？ならお言葉に甘えて」

悠斗ははやての言葉に甘え、２階へと上がっていった

「さてと」

悠斗が２階に上がっていくのを見送ったはやては三角巾で髪を覆う

「気合いが入ってるわねはやてちゃん」

「そりゃあ、男の人に手料理をふるまうなんて初めてやからな～～気合いも入るわ」

「でも、クロノ提督やユーノ君には何度かごちそうしてるわよね？」

「そうやけど、同年代のしかも、会ってまもない男の人に手料理を振舞うんやで？私でも緊張するわ」

「はやてちゃんでも緊張なんてするんだ」

「ちょいまち、すずかちゃん、〝私でも〟ってどういうことや？」

「はやてちゃんってそういうことあまり気にしないとばかり思ってたから」

「いくら私が図太いからってそれはないんとちゃうか？私だって緊張の1つや2つはするで」
すずかの発言にはやては少し不機嫌になるが夕食の準備を進める
「あらあら」
滅多に見ることのないむくれ顔のはやてを見てシャマルが微笑ましそうに笑う

その頃、悠斗はというと
「３９５、３９６、３９７、３９８、３９９、４００！」
強制ギプスを身に着け、筋トレを行っていた
「はぁ、はぁ。重力の倍率を３０にしただけで身体に掛かる負荷がここまで変わるんだな」
仰向けになって倒れながら悠斗は重力がいかに強力なのかを再認識する
「当面の目標は３０倍の重力負荷がかかっている状態で大岩を乗せた状態でいつものトレーニングメニューをこなせるようにすることだな。しぃ～～～～・・・うし、素振りでもしてくるか」
小休止を終えた悠斗は立ち上がると素振りをするために下へと降りて行った。その際、強制ギプスを身に着けているところをはやてに見られ〝それ持ってきてたんかい〟っと呆れられた口調でツッコまれた

「ただいま～～」
「っお、おかえり～～。サーチャーの設置ご苦労さん」
「「や、八神部隊長!?」」
なのは達スターズ分隊がコテージに戻ってくると、はやてが鉄板で料理を作ってたいるのを見てスバルとティアナが驚き、手伝おうと思

い動こうとしたが
「ライトニング分隊の皆が戻ってくるまでゆっくりしててええで」
「で、ですが」
「部隊長から頑張ってる部下へのちょっとしたご褒美や」
「はやての料理はギガうまだからな、期待してろ」
戸惑う2人を他所になのはとヴィータは手伝ているアリサ、すずか、シャマル、アインスの元へと向かっていった
「そういえばはやてちゃん、桜井さんは何処にいるんですか？」
はやて達と行動を共にしているであろう悠斗の姿がないこに疑問を感じたツヴァイがはやてに尋ねる
「悠斗君なら・・・あそこや」
はやては野菜を炒めている手を止め、コテージの側にある小川を指さす。スバル、ティアナ、ツヴァイの3人は指さすほうに視線を移すと
「っふ、っふ、っふ」
小川に入って素振りをしている悠斗を発見した
「もうかれこれ、1時間は素振りしてると思うで」
「い、1時間もですか!?しかもあのギプスをつけて」
「ほぇ～～～凄いです～～」
「悠斗く～～ん、そろそろ皆が返ってくる頃やから、手伝って～な～～」
「ん？分かった。次で最後にするから少し待ってくれ」
はやての声が聞こえたのか悠斗を返事を返すと、大きく息を吸い、呼吸を整えると
「チェスト――!!」
下段で構えた木刀を振るいあげると、水飛沫が上がると共に小川の水が左右にわかれた
「「え？えぇぇぇぇぇぇぇ!?」」
「・・・よし」
最後の確認を終えた悠斗は小川から上がると、ギプスを外し、掻いた汗を拭くと何事もなかったかのようにはやての手伝いを始めた

「「・・・・・・」」

そして、とんでもない物を見てしまったスバル、ティアナ、ツヴァイはしばらくの間、思考が停止しその場から動かなかった

第２９話

「あ～～～いい湯だ～」
悠斗はまるで老人のような口調で湯船につかって1日の疲れをとっていた
「しっかし、いろいろと大変だったなエリオ？」
「はい。悠斗さんが助けてくれなかったらどうなっていたか」
悠斗は隣で一緒に湯船につかっているエリオに声をかけるとエリオは疲れた顔で頷いた。悠斗達は今、海鳴市にあるスーパー銭湯に来ているのだ
「だけど、本当に色々なお風呂があるんですね」
「風呂によって効能、温度等が違うんだ。取り合えず全部に浸かってみて、気に入った風呂に入りな」
「はい」
「だけど、まさかキャロがこっちに来るだなんてな～」
エリオにそういうと悠斗は自分の左隣で湯につかっているキャロのほうをみる
「１１以下の男の子は女性用の風呂に入っていい。その逆もしかりだが」
「えへへへ～～」
純粋無垢な子は時に恐ろしいという言葉を理解した悠斗だった
「それにしても」
エリオは悠斗の身体に刻まれている傷を改めてみる
「更衣室の時も見てびっくりしましたけど、凄い傷ですね」
「鍛練中に負った傷や、戦っているときに負った傷等々で負った傷だ」
「治したりはしないんですか？」
「ん～～確かにこの世界の医療技術なら傷跡も消せるんだろうけど、消そうとは思わないな」

「どうしてですか？」
「自分への戒めのためさ。このほとんどの傷は油断がもとで負ったが傷がほとんどだ。そのことを忘れないためと２度同じ過ちはしないということを思い出させるために残してるんだ」
「「????」」
「はは、２人にはちょっと難しかったかな」
話を聞き、首を傾げる２人を見て悠斗は２人の頭をなでる
「２人にもいつか分かるときが来るさ。まぁ、そういったことにならないのが一番なんだけどな。さて、一緒に風呂に入ることなんて滅多にないし、背中の洗いっこでもするか」
悠斗は風呂から出ると２人を連れて洗い場まで行き、自分の頭などを洗いつつ、エリオとキャロの頭を洗い、２人に背中を洗ってもらった

「ん～～～これで景色もよく、酒もあったら最高なんだけどな～」
背中を洗ってもらった後、子供風呂に行くエリオとキャロを見送った悠斗は露天風呂へと赴き、夜空を見上げながらこの場に酒があったらと愚痴るもない物はないので潔く諦め湯につかっていると
「ふむ、これが露天風呂というものか。雑誌やテレビ等で何度か見たことがあるが、ここまでの解放感を感じるとは」
「そういえば改装したっていう張り紙があったけど・・・特に変わった様子はないよね？」
「そうだね」
「（男にしてはやけに声が高いな）」
女性に近い高い声に本当に男なのかと思った悠斗は失礼かと思ったが声のするほうへと振り向く。湯気のせいでぼんやりとしか見え

ないがどことなく女性の体つきに近かったことに疑念を感じていると、だんだん湯気が無くなっていき、目にしたのは
「・・・は？」
「「え？」」
「む？」
タオルを身体に巻いているがほぼ全ら状態のフェイト、すずか、アインスの3人だった
「んな!?」
「「悠斗／さん!?」」
「桜井、何故ここに？」
裸を見られた同士、当然の反応を示す3人とは対照的にアインスが悠斗に尋ねる
「何故って、ここは男風呂に露天だからな。俺としては何で3人がここにいるのかが気になるんだが？」
「え？ここって女風呂の露天だよね？」
「そんなわけ・・・まさか」
悠斗の話を聞き、フェイトは女風呂だと言う。その言葉を聞いた悠斗はある答えにたどり着いた。それは
「混浴？」
「「え？」」
「だから、この銭湯の露天風呂は混浴だってことだ」
「「え」」
「しぃ～～～、大きな声を出すな」
悠斗の話を聞いたフェイトとすずかが大きな声を上げようとする前に悠斗がそれを諌める
「取り合えず、湯につかれ。そのままだと風邪ひいちまうからな」
悠斗は3人を見ないよう後ろをむき、3人はおずおずといった様子で湯につかり始める
「「・・・・・」」
「いい湯だ」
気まずい雰囲気の悠斗、フェイト、すずかの3人と違って、1人露

天風呂を堪能するアインス
「・・・悠斗」
「・・何だ？」
「その・・・・・見た・・よね？」
「・・・・・・(タオルを巻いていたから大丈夫なんて言えねぇねよ。それにタオルを巻いていたから身体のラインやその他諸々がくっきりと解っちまったし)」
「「・・・・・・」」
フェイトの〝見た〟というのが何を意味しているのかを悟った悠斗は答えることが出来ず、返事を返さない悠斗にそれが答えなのだとフェイトとすずかの2人は理解する
「肌を見せるのはそんなにも恥ずかしいものなのか？」
「男はそうでもないが女は・・な」
「そうか。やはり私にはそういう一般常識的な知識が不足しているな」
「仕方ないですよ。アインスさんが蘇ってまだ3ヶ月しかたってないんですから」
難しい顔をするアインスをすずかがフォローするとちらりと悠斗のほうを見る。背中だけしか見えないが鍛え抜かれた肉体だということが分かる
「(悠斗って着やせするタイプなんだ)」
一方、フェイトもすずか同様、ちらちらと悠斗のほうを見ていた。すると、男子風呂の戸が開き、数人の男性が来たということが分かった
「ど、どうしよう!?」
「3人とも、俺の後ろに隠れろ」
「でも、隠しきれないよ」
「問題ない」
悠斗は2人の影分身を呼ぶ、隠れるよう言う
「これで問題ない。とにかく端のほうに行くぞ」
悠斗はフェイト、すずか、アインスと2体の分身と共に端のほうに

移動し、3人は露天風呂のやってきた人にばれないよう身体を縮こませ、悠斗の背後に隠れる
「何だよ～～今日も外れか～～」
「露天風呂が混浴風呂に改装されてから女体を見るのと出会いを求めて毎日来てるがなかなかお目に掛かれないな～」
「俺は小学生の低学年の女子を拝めているから満足だがな。さて、今日はどんな子に会えるかな～～」
「「出たよロリコン」」
入ってきたのは高校生の男子3人。言葉から察するに合法的に女性の裸を見るためにこの銭湯に通っているようだ
「あ～～～出会いが欲しいな～～」
「周りのやつらはどんどん彼女をつくっていくしよ～～」
「俺達の何が悪いっていうんだ！ただ普通にクラスでエロトークしてるだけなのによ！」
「「「(それが原因だろ／だよ／だね／だな)」」」
話を聞いていた4人はその行動が彼女が出来ない原因だと悟る
『なのは、聞こえる？』
『フェイトちゃん？どうしたの？』
『今、露天風呂に来ちゃだめだよ』
『え？どうして？』
フェイトはなのはに念話を送り、今、露天風呂に来てはだめだと伝える
『この露天風呂、混浴みたいでね。それを知らないで来たら悠斗がいたんだ』
『そ、そうなんだ。でも、悠斗君だけなら行っても問題ないんじゃ』
悠斗なら紳士的な行動を取るであろうと何となくわかったなのはは露天に行っても問題ないと尋ねるが
『それが、新しく高校生ぐらいの男の子が3人が入ってきてね。その子たちの目的が女の子の裸を見る事らしくて』
『え!?フェイトちゃん達大丈夫なの!?変な目で見られてない!?』
『うん。端に寄ったうえで悠斗の背に隠れてるから今のところは大

丈夫だよ』
『わ、分かったよ。皆には私のほうから伝えておくね』
なのはに女子全員への言伝を頼むと念話を終えると、悠斗の背からそっと顔を出し、男子たちの様子をうかがう
「どうやら、彼らは若い女性客がくるまで粘るみたいだな」
「みたいだな。はぁ～～（耐えろ、耐えるんだ悠斗）」
アインスの言葉に悠斗は頷き、ため息を吐くと、タオル越しとはいえ背中に伝わる感触に耐えながら理性を保つ努力を行う
「ん？端のほうに誰かいるな？もしかして女性客か？」
すると、悠斗達がいることに気づいた1人の男子が悠斗達のほうへとやってくる
「「っ!?」」
「（ふむ、まずいな）」
いくら悠斗の後ろに隠れているとはいえ座っている状態。もし近づいてくる男子の背が高ければ一発でばれてしまう。そんな緊張感の中、悠斗がとった行動は
「なぁ、聞いたかあの話？」
「あぁ、課長が浮気してるっていうあの話か？」
「そうそう。実はその話、マジらしいぜ？」
「「（悠斗／さん？）」」
いきなり声色を変えながらあたかも3人で話しているようにしゃべり始めた
「何だ男かよ」
「お～～い、これ以上いても女性客が来そうにないし今日はもう帰ろうぜ」
「おう」
奥にいるのが男だと解ると男性は残念そうにし、一緒に来た男性に声をかけられると露天風呂から出て行った
「「・・・・・・」」
「・・・もうこなさそうだな」
3人の男性が露天風呂から出て行ってから1分ほど待ち入ってこ

ないことを確認すると、フェイト、すずか、アインスの3人は悠斗の背の後ろから出る
「ふぅ～～～一時はどうなるかと思った」
「悠斗さんのきてんのお陰ですね」
「通じるかどうかは賭けだったけどな。それより、他の男性客が来るかもしれないから戻ったほうがいい」
「そうだね」
「じゃあ、お先に失礼する」
悠斗の言葉に納得し、3人は露天風呂から上がり女風呂へと戻っていった
「・・・・・・はぁ～～～～」
3人がいなくなるのを確認すると、疲れが出たのか悠斗は湯の中に沈んだ
「（・・・何とか耐えることが出来た。でも）柔らかかったな～～って、耐え抜いてないやんか」
耐え抜いた自分の理性を褒めたが、耐え抜けていないことに気づき、自分の向けてツッコミを入れた

第３０話

「はぁ～～～えらい目にあった」
悠斗は露天風呂であった事を思い出しため息を吐く。その際、背中から伝わってきた感触を思い出してしまい、頬を叩いて強引に忘れようとする
「悠斗さん、どうかしたんですか？」
「いやなんでない。それよりキャロは？」
「キャロなら、女湯のほうに戻りました。着替えはあっちにあるみたいなので」
「あ～～～服を脱いでから男湯のほうに来たからな」
タオルを巻いていたとはいえほぼ裸で男湯にやってきたキャロを思い出す悠斗。服を着、待合スペースにやってくるが女性陣はまだ来てないようだ
「エリオ、売店で牛乳を買ってきてくれないか？それと、余ったお金で好きな飲み物を買ってきていいぞ」
「解りました」
悠斗から５００円を受け取ったエリオは売店へと赴き牛乳を２本購入してくると１本を悠斗に渡し、お釣りを返そうとしたが
「持っててていいぞ、お駄賃だ」
悠斗はお小遣いだと言ってエリオに残ったお金を渡し、牛乳を一気飲みすると、設置されているマッサージチェアに座って、マッサージを始めた
「あ～～～～～きく～～～」
本来ならマッサージの予約をして専門の人に身体のこりをとってもらいたいところだが、いつロストロギアの反応が出るか分からないためチェアを使用しているのだ
「っ!?チェアは人と違って偶に痛くなるのが欠点だよな」

「悠斗さん見てください。こんなに取れました！」
すると、ゲームエリアに行っていたエリオが戻ってき、ゲットした大量のお菓子を見せる
「おぉ～～～これまた大量だな。でも、食べるなら明日以降にしろよ？」
「はい」
「お待たせ～～」
捕ったお菓子を見ながら笑みを浮かべているエリオを見ていると、女性陣がやってきた
「エリオ、そのお菓子どうしたの？」
「あそこにあるゲームコーナーで試しに遊んでみたら取れたんです」
「へ～～～地球のゲームセンターにはそんなゲームもあるのね」
「ティア、キャロ、私達もやってみよう」
「やってみようって・・・あんた、こっちのお金持ってるの？」
「・・・あ」
ティアナに言われ、地球の金銭を持っていないことに気づいたスバルは眼に見えて待ちこみ始めた
「はぁ～～～スバル、ティアナ、キャロ。ほれ」
それを見た悠斗はため息を吐きながら財布から５００円硬貨を３枚取り出し３人に向かって軽く弾いて渡した
「え？え？悠斗さん？」
「それで飲み物買って、余ったお金で遊んで来い」
「い、いいんですか？」
「エリオにだけ小遣いを上げるのは不公平だからな。いらないっていうなら返してくれてもいいが」
「ありがとうございます。ティア、キャロ、行こ！」
「ちょっとスバル!?えっと、ありがとうございます」
「悠斗さん、ありがとうございます」
お礼を言って、足早に売店へと向かったスバルを見て、ティアナとキャロは悠斗にお礼を言うとスバルを追って売店へと向かっていっ

た
「はぁ～～～～～～・・・・んん？」
３人を見送り、マッサージに意識を戻すと、ふと視線を感じ振り返ると、女性陣（シグナムとシャマル、アインスを除く）が悠斗をジィーっと見ていた
「・・なんだよ」
「別に～～４人にはおごって私らにはないんやな～～なんて思ってへんよ？」
「（ぜって～～思ってるよ）・・・ほれ、１０００円あれば足りるだろう」
「ええの？おおきに～～♪」
笑顔で悠斗から１０００円を受け取るとはやては他の皆を連れて売店へと向かった
「すまないな桜井」
「貰っている給料の額を考慮すればたいした額じゃないですから」
シグナムの謝罪の悠斗は苦笑いで答える。全員が全員好きなことをしてリラックスしていると設置したサーチャーにロストロギアの反応を感知し、悠斗、アリサ、すずかの３人を除いた全員が現場へと向かっていった
「私達はどうする？」
「コテージに戻って支度をしておけばいいんじゃないか？」
「そうね。それじゃあ先に戻って準備をしておきましょう。高ぶった心を落ち着かせる紅茶も準備しておきましょう。淹れるのは任せたわよ悠斗」
「はいはい。・・・・ん？」
返答し、歩き出そうとした悠斗は足を止めて、空を見上げる
「悠斗さん？」
「どうしたのよ？」
「・・いや、何でもない。行こう」
数秒間虚空を見ていた悠斗は２人に何でもないと告げるとコテージへと歩いて行った

「ふぃ～～～心臓が止まるかと思ったぜ」
とあるビルの屋上で1人の青年が冷や汗をかいていた
「結構距離あるから大丈夫かと思ったんだけどな～～～あの男本当に人間か？」
青年は置いていた椅子に座ると自分で淹れた紅茶を飲みながら考える
「どうすっかな～～。俺が雇った連中に2人を襲わせ、危なくなったところにさっそうと参上して助け、好感度を上げつつ、魅了する作戦だったってのに。・・・位置はばれてないだろうからここから射抜いて、射抜いた後、雇った連中に2人を襲わせるか？」
「射抜く・・か。それはここから放つ矢が絶対に届くと確信してないと出ない言葉だな」
「っ!?」
自分以外いないビルの屋上に先程まで自分が見ていた青年、悠斗がフェンスの上に座っていたのだ
「な、な、な」
「何でここがばれたかって？俺の感知能力なめるなよ」
悠斗はフェンスから飛び降り、青年に近づいていく
「お前が害のない者だったら、見逃そうと思ったんだが・・残念だよ」
「く、喰らえ！」
青年は黒い弓を何処からともなく取り出すとこれまた1本の矢を何処からともなく取り出し悠斗に向け射った。人が射ったと思えないほどの速度で放たれた矢はそのまま悠斗にあたると思われたが、悠斗は刀を抜刀し、矢を2つに両断した
「っ!?くそ、くそ、くそぉーー!!」
射った矢が斬られるとは思ってなかった青年は矢のほかに様々な

剣を悠斗に向かって撃っていく
「(剣だけを撃ってくるが俺の持つ〝千の顔を持つ英雄〟と同じ能力か)」
それに対し、悠斗はゆっくりと歩きながら対峙している青年の能力を分析しつつ、迫りくる矢、剣等を叩き斬りながら1歩1歩ゆっくりと近づいていく
「何なんだ、何なんだよお前!?」
「俺か?お前と同じ存在だよ。ただまぁ、一つ違うのは・・・神の部下で、お前のような自己中心的な奴(転生者)を狩る者だ」
自分の能力がまったくと言っていいほど効かない悠斗に青年が恐怖しながら尋ねると悠斗は淡々と言った口調で自分のことを話、一閃。対峙していた青年を斬った
「また転生する機会があるならまっとうな考えであることを祈るよ」
刀を振るって付着した血を飛ばし、鞘に納めると。斬った青年の身体が光り輝き、光の粒子となって姿を消した
「成程、こうやって神のいる場所に戻るってわけか。ん?でも、最初に対峙した奴は普通に遺体として見つかったが・・・・今度聞いてみるか」
用が済んだとばかりに悠斗はその場から立ち去った

「今戻った」
「悪いな」
「気にするな」
コテージに辿り着くと外で空を見上げていた悠斗?が悠斗を出迎えた。悠斗は悠斗?に刀を渡すと煙と共に消えた。悠斗が受け取った刀をアイテムボックスに収納したと同時にロストロギアの回収に言っていた面々が戻ってきた

「ただいま～～」
「お勤めご苦労さん。今、紅茶を淹れるから席について待っててくれ」
「いや、私らはこのまま帰ろうかと・・・」
「あの４人を見ても、同じこと言えるのか？」
「え？」
悠斗に言われ、隊長陣が振り返ると今にも眠りそうなスバル達がいた
「1日や2日開けていても問題はないだろう。それに滅多に地球に帰ってこれないんだから親孝行の一つや二つして行っても罰は当たらんだろう」
「で、でも、それじゃ基地で働いてもらってる人たちに申し訳・・・」
「基地にいる面々には帰ってから特別休暇を与えればいいだろう。期間限定とはいえ新設された部隊だから頑張らなきゃいけないのは解るが適度なガス抜きは必要だぞ？」
悠斗に話を聞き、今日、明日は地球で過ごすことが決まった
「悠斗、明日の夜、私に付き合いなさい」
「はい？」
そして、悠斗は明日の夜、アリサとデート？することとなった

第３１話

地球に運び込まれたロストロギアを封印、回収した翌日、なのは達前線メンバーは街を観光したり、ご当地グルメを堪能したり等々、のんびりと過ごしていた。そして、悠斗はというと

「う～～～～んやっぱり、青よりは黒のほうがいいかしら？」

「俺はどっちも同じに見えるがな～～？」

アリサの家で夜に行くパーティーで着用するスーツ選びをしていた

「つーか、俺のよりも自分が着ていくドレスのほうはいいのかよ？」

「大体は決めているわ。それより悪いわねこっちの事情につき合わせちゃって」

昨晩、父親からの電話で今日、行われるパーティに出席して欲しいと頼まれたアリサは悠斗に自分の彼氏のふりをして一緒にパーティーに出てほしいと頼まれたのだ。理由はパーティーに出席すると必ずと言っていいほど出席している他企業の社長やら変わり出来たぼんくら息子達から交際を申し込まれるのだ

「大会社の社長令嬢も大変だな」

「本当よ。会社とかそういうの関係なく私のことを見てくれているなら考えてもいいけどどいつもこいつも下心が丸わかりなのよ」

「そこで、今日俺と一緒にパーティーに行って彼氏ですって言っておけば今後、そう言った輩が近づてこなくなるっか？」

「そういうこと。やっぱり黒にしましょう」

悠斗の問いに頷くとアリサは悠斗が着ていくスーツを決めると今度は候補に挙げていたドレスのうちどれを着ていくかに悩み始めた

「ここがパーティーをおこなうホテルよ」
夜になり、執事兼運転手の鮫島の運転する車に乗ってホテルにやってきた悠斗とアリサ。悠斗はホテルの大きさにため息を吐く
「うちで経営するホテルで５２階～６７階までがホテルになってて６８階と６９階はレストラン、最上階の７０階には２つの会場があるわ」
「・・・帰っていい？」
「だめに決まってるでしょう？ほら覚悟を決めなさい！」
「でぇ!?」
帰ろうとする悠斗の背中をアリサはおもいっきり叩いた
「はぁ～～～しゃ～ない。では行きましょうかお嬢様」
「ええ、エスコートは任せたわ」
「アリサお嬢様、桜井様行ってらっしゃいませ」
ごく自然に悠斗に左腕に抱き着いたアリサと共に悠斗は鮫島に見送られながらホテル内へと入っていった

一方そのころ、昨日に引き続きコテージの外でバーベキューを楽しんでいる六課一同
「・・・・・・・」
「すずかちゃん、どうしたんだろう？今日1日ずっと上の空みたいだけど」
バーベキューには参加せず、椅子に座ってボーっとしているすずかを見てなのはが心配そうな顔をする
「あ～～～気にせんほうがええでなのはちゃん」

「え？何で？」
「今日の朝、アリサちゃんの話聞いたやろ？今後悪い虫が寄ってこないように悠斗君に彼氏のふりをして貰ってパーティーに出席するって。ふりとはいえすずかちゃんからしたら気が気でしょうがないんや」
「どういうこと？」
はやての言っていることが分からず、なのはは首を傾げる
「はぁ～～～鈍感すぎなのも考えもんやな。あっちは・・・」
なのはの鈍感さに呆れ、はやては別のほうをみると
「エリオとキャロは今日何処に行ったの？」
「フェイトさんと一緒にオールストン・シーっていう臨海テーマパークに行って遊んできました」
「遊園地のほかにも水族館があってすごく楽しかったです。だけど・・」
スバルに今日1日どうしていたのかを尋ねられたエリオとキャロはフェイトとアルフと一緒にテーマパークに遊びに行ったと言うと肉を焼いているフェイトに視線を移す
「フェイト」
「・・・・」
「フェイト!!」
「ア、アルフ!?大きい声出してどうしたの？」
「どうしたのって、何度呼んでも返事をしてくれないから大声で呼んだんだよ」
「ご、ごめん」
「遊園地で遊んでるときもずっとボーっとしてたけどどうしたんだい？まさか、どこか悪いのかい？」
「何処も悪くないから大丈夫だよ」
「本当かい？」
「本当だよ」
どうやらフェイトも今日一日上の空だったらしく家族であるアルフに心配されていた

「(ふむ、どうやらフェイトちゃんも無意識とはいえ悠斗君を恋愛対象としてみとるみたいやね)応援したいけど私もそうやからな～～～。料理で腕と味で好感度を上げようとしたけど、いまいちやったし別の手を考えなあかんな～～」
はやてもはやてで自分への好感度を上げるための策に頭を悩ませていた

「こりゃまた随分と豪勢だな」
最上階のパーティー会場に到着した悠斗は内装、参加している企業代表、出されている料理の数々を見てネギまの世界で出席したことのあるパーティーを思い出してしまった
「えっと、受付の人が言うにはもう来てるはず何だけど・・・・いた。行くわよ悠斗」
会場に入るとアリサは周りを見回すと、目的の人物を見つけたのか、引っ張る形で悠斗と一緒にその人物の下へと赴く
「パパ、ママ」
「ん?アリサ!それに桜井君」
「あらあら」
アリサが声をかけたのは実の父であり大企業〝バニングス社〟の社長を務めるデビット・バニングスとその妻でありアリサの母親であるジョディ・バニングスである。2人は話していた者に声をかけて、話を一時中断させる悠斗達の下にやってくる
「久しぶりねアリサ。元気そうで安心したわ。悠斗君も久しぶりね」
「お久しぶりですジョディさん、デビットさん」
「今日は娘のわがままを聞いてくれてありがとう。お詫びになるかどうか分からないが今日のパーティーを楽しんでいってほしい」

「まぁ、楽しめるかどうか回り次第ですかね？」
悠斗は周囲からの視線と聞こえてくる話し声に耳を傾け、早速効果が出ていることに安堵する一方、若い男性陣の射殺そうと言わんばかりの視線に呆れる

「ふぅ～～～～」
「お疲れ様」
パーティー会場を離れ休んでいるとアリサに声をかけられ、手に持っていたカクテルを渡された
「・・・・・」
「心配しないでもノンアルのカクテルよ。アルコールを試してみたいけどパパ達がいるからね」
「俺はアルコール入りのカクテルでもいいんだけな」
受け取ったノンアルカクテルを一口飲むとアリサも悠斗の隣に腰掛、カクテルを飲む
「しかし、俺がいても大して変わらなかったんじゃないのか？」
「いつもよりはマシだったわ。それに、さっきあんたが言った言葉で近づいてこなくなったしね」
悠斗がパーティー会場を離れる少し前、アリサの会社と同じ中小企業の息子が声をかけてきた。アリサ曰く〝パーティーに毎度参加してはしつこく自分に声をかけて気、付き合ってほしい〟と言ってくるそうだ。男は悠斗と腕を組んでいるアリサを見て、悠斗が誰なのかを尋ね、アリサが〝私の彼氏よ〟と言うと、悠斗にどこの会社の息子なのかと尋ねた。悠斗は取り合えずアリサと同じ大学に通っている学友で最近付き合い始めたと言う。悠斗が企業の息子ではなく一般家庭だと知った男は逆玉を狙っている男などアリサにはふさわしくないと周りの参加客に聞こえるようわざと大きな声で言うが、逆に

『確かに第3者から見れば俺はアリサがバニングス社のご令嬢だと知って付き合い、玉の輿を狙っている男なのだと認識されるんだろうが、俺はそんなこと一度も考えたことはない』
『俺はアリサがバニングス社の令嬢だから告白し、付き合おうと思ったんじゃない。アリサ・バニングスという1人の女性が好きになったから告白したんだ』
「まったく、あんなことをよく咄嗟にしかも恥ずかしげもなく言えたわね」
「俺は本当のことを言っただけだ」
悠斗の言葉を聞いて呆れると、悠斗のことをじっと見る
「(よくよく思えば悠斗ってかなりの優良物件よね～。顔は私がこれまであった事のある男子の中でも上位、ぶっきらぼうだけど気が利くし、何かあった時には守ってもらえるほど強い。大企業の令嬢だって知っても何処にでもいる普通の女の子として扱ってくれるし・・・ってなんでこんなに悠斗のこと考えてるのよ!?これじゃあまるで・・・)」
「アリサ?顔が赤いが大丈夫か?」
「え!?ええ、大丈夫よ」
「そうか?」
「そ、それより、そろそろ会場に戻りましょうか」
考えていたことを忘れようとアリサは残っていたカクテルを一口で飲み切ると、立ち上がり、会場に戻るようい
「そうだな、そろそろ会場に」
戻ろうと言おうとしたとき、悠斗は嫌な気配を感じる
「悠斗?」
なかなか来ない悠斗に不信がり、アリサが戻ってくるとエレベーターが到着した音が鳴る。そしてドアが開くと同時に武装した複数の男たちが会場へと突撃していった